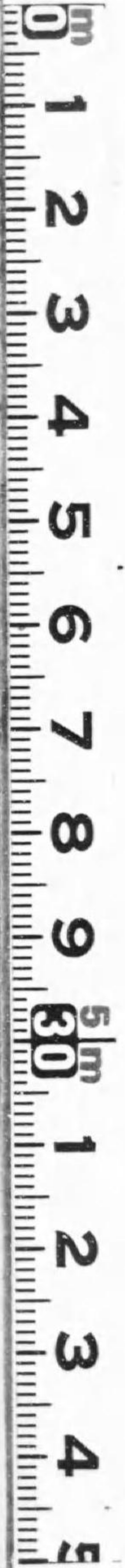




348
94



始



特220
210

著盟同限制兒產者産無

1933年

プロレタリア産兒制限法

耕
進
社
版



序

プロBCの今までの闘争の中から得た理論や実際について、何かまとめたいと思つてゐた。恰度プロBC常任委員会は僕の意見を支持してくれて、小さい乍ら、本書を著した。勿論、もつとハッキリ書きたい處や、くわしく書きたい處があつた。然し、出来るだけ大衆的に出版したいと言ふ出版所の意見もあつたんで、書きたい點も遠慮しなければならなかつた。伏字までしなければならぬ部分さへあつた。實際残念だが、やがて思ふやうに書ける時が来るまで闘争しなければならぬと決意しながら……。

本書を脱稿したのは、昨年十月だつた。然しそれも、或事情のため中絶してゐたが、プロBC常任委員会に於て承認されてゐるので、出版所の方へ廻したのであるが、第一章の前の部分は、本書を無事に出版するために削つて仕舞

つた。だから幾分、物足りない感じがすると思ふが大衆的に出版するには仕方のないことであつた。

非常に急いだので推敲も満足に出来なかつたから文章が読み難い箇所もあるし言葉使も勿論ゴツ／＼したものになつて仕舞つた。

最後に、技術的な部分にも幾分不完全な箇所があつたが、その點は他の機會に改めることにして、不充分ではあるが、大衆諸君の前に送る！

一九三三・二・一五日

大 川 浩

目 次

一、細胞と生殖……………	一
二、産兒調節は生物學的自然の理法である……………	三九
三、男性生殖器について……………	四九
四、女性生殖器について……………	五一
五、交接について……………	五二
六、妊娠について……………	五九
七、内分泌について……………	六一
八、分娩について……………	六九
九、避妊の方法……………	七二
十、結 論……………	一五九

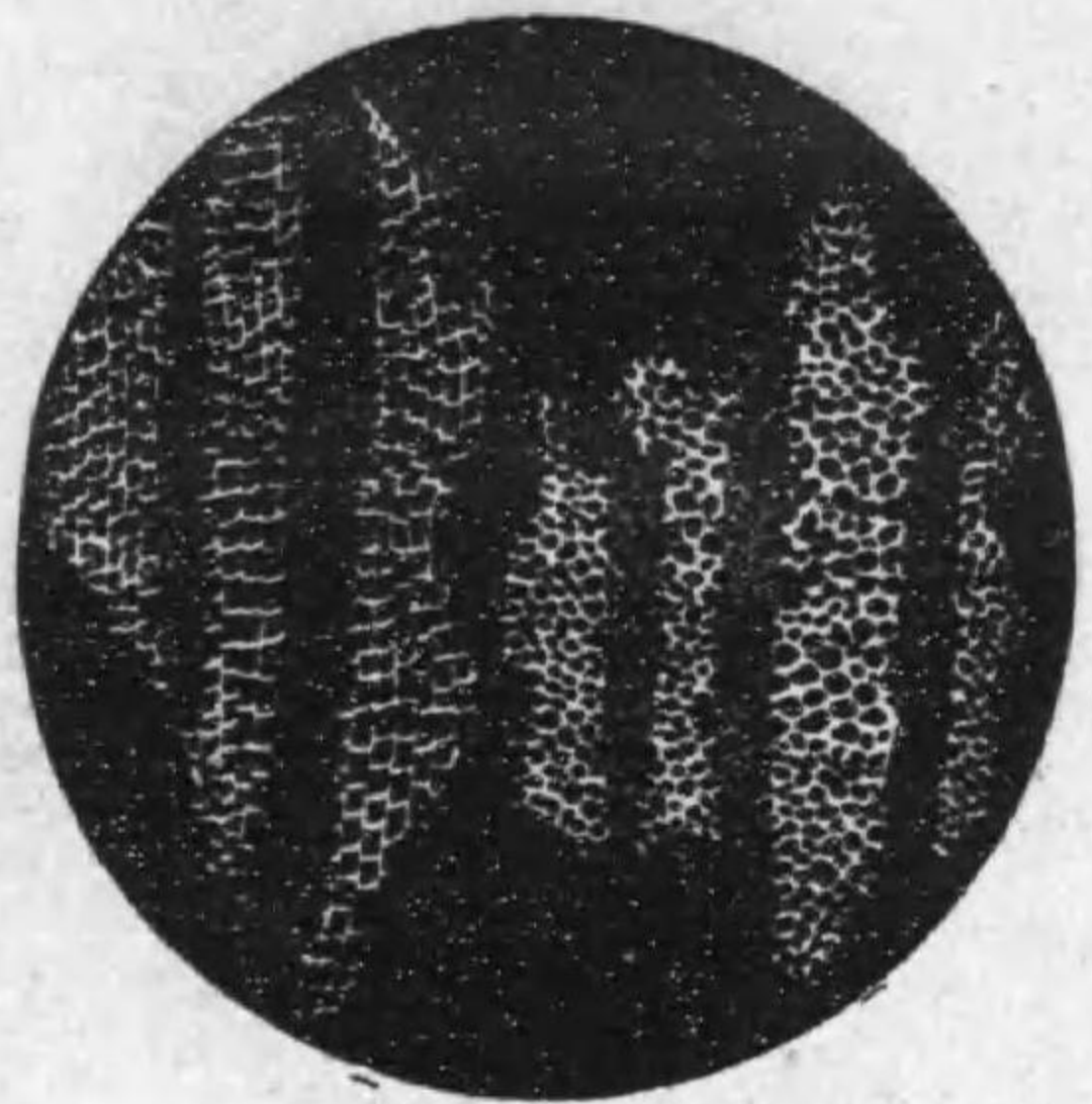
一、細胞と生殖

産兒制限の方法、即ち、避妊法の技術を述べる前に子供は如何にして生れるか、即ち、生殖作用から述べねばならぬ。

精子と卵子 人間の最始は細胞である。すべての生物を構成してゐるのは細胞である。細胞と言つても非常に多くの種類があつて、それを此處に述べてゐては難かしくなるばかりでなく、それ程必要でもないから、避妊に必要な細胞のみを述べ、生殖作用の主要な部分のみに止めておきたい。

我々は子供の生れるのは男女の接合に依つて出来ると言ふことを知つてゐる。男子のみにても不可能であるし、女性のみに依つても不可能である。勿論、或種の昆虫や鳥類に無精生殖と言つて男細胞を必要としないものもあるが、これ等は特殊な生物であつて、人類にあつては斯かる無精生殖は絶対にない。兎に角、生殖作用を営むには、

男性の生殖細胞と、女性の生殖細胞と結合しなければ出来ない。で、男性の細胞を、「精子」と謂い、女性の細胞を「卵子」と謂ふのである。



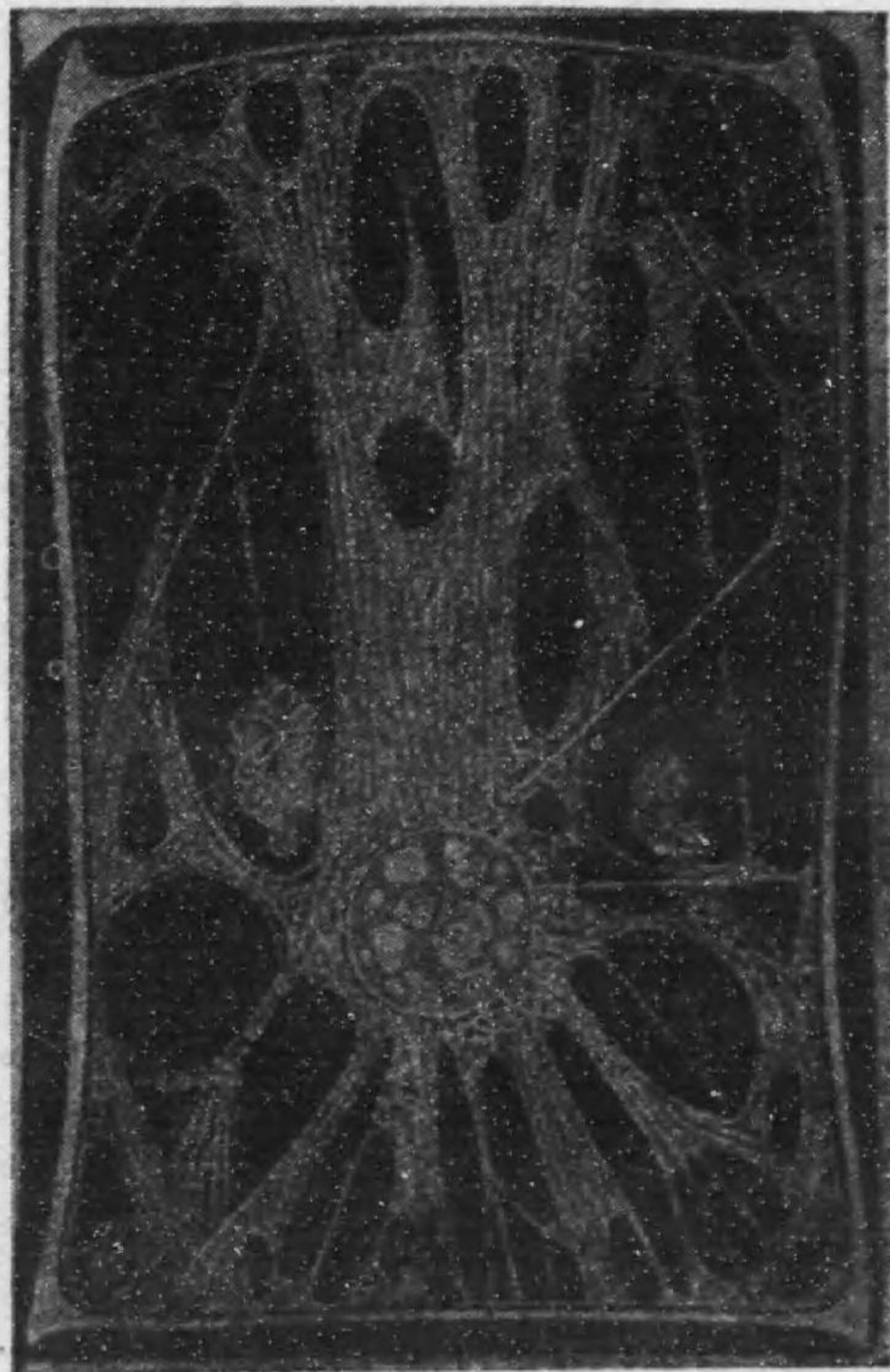
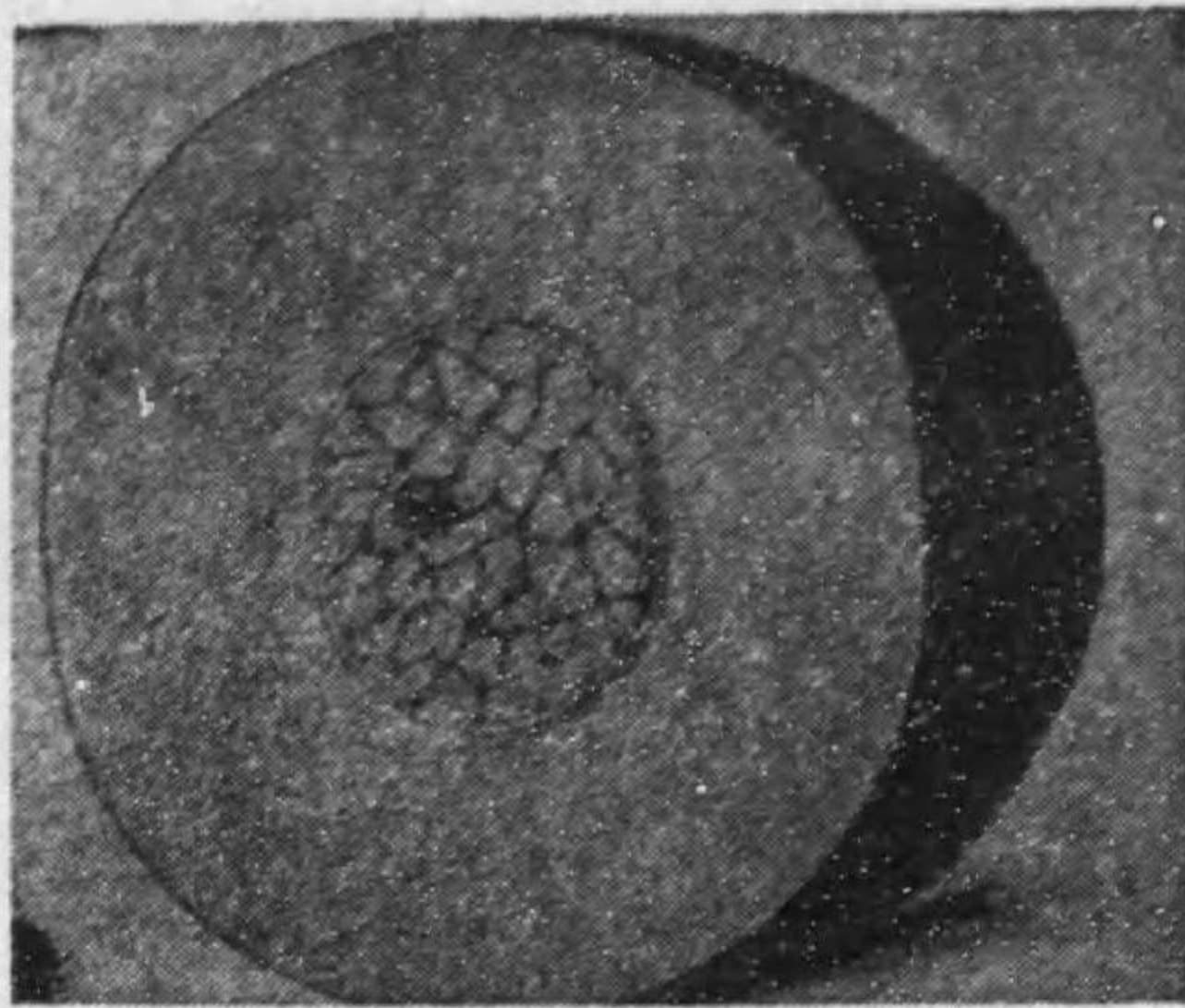
ロバートフークが寫生した
コルクの細胞

細胞と謂ふのはどんな物であるか、と言へば生物の基本単位とでも稱するもので、今から二百五十年ほど前に顕微鏡が始めて發明されてから發見されたもので、勿論、ギリシアのアリストテレスは「動物體は同質部と異質部の二種の部分が組合さつて出來てゐる」と言つてゐるが、それは、決して細胞を指したものでなく、血とか肉とか生物構成現象を指してゐるので、やはり、實際的に細胞として我々の目に映るやうになつたのは顕微鏡發明以後である。顕微鏡が出來た頃、英國のロバート・フークと言ふ人が顕微鏡の擴大力を調べてみる爲め、色々な物を顕微鏡の下にかけてみてゐたが、或時、コルクの栓を切

つて眺めて不思議な構造を發見した。コルク一面に孔だらけでまるで蜂の巢のやうになつてゐるのでこの室に彼は細胞と名づけた。然しそれは今日謂ふ細胞ではなかつたのである。一八三八年今から九十年ばかり前に、獨逸の植物學者シュライデン及び彼の友人で動物學者シュワンは各々、その専門の方面から顕微鏡に依つて、動物も植物もその構成基本は細胞であると發表した。

細胞の構成 以上の事實から考へると、生物と言ふのは凡て細胞から成つてゐることとが判る。細胞と言ふのは、水飴か卵の白味のやうにとろ／＼したものの、小さい塊であり、目に見へないやうな小さな物であつて一般に大きな生物ではそれが多數に集つて生物體を作つてゐる。そのどろ／＼したものは原形質といふもので非常に複雑な化學成分を持つてゐる。こんな複雑な化學成分は無生物にはない、原形質の中には必ず泡のやうな球が入つてゐる。恰度握り飯に梅干が入つてゐるやうになつてゐると思へばよい。この球は核と言ふもので、どんな細胞にも必ず見られるものである。この核

動物の細胞と植物の細胞



下は動物の細胞の模型圖。細胞膜がなく核の傍に中心體があつて後光のやうなものが放射してゐる。上は植物の細胞。細胞膜があつて細胞質は澤山の空胞のために網をはつたやうになつてゐる。細胞質には細かい粒があつてたへす流れ養分や新陳代謝産物の循環を行はしめてゐる。

は周囲の原形質とは少々化学成分が違ふもので、これを特に核質と呼び、これに對して周囲の原形質を細胞質と呼んでゐる。核と細胞質とは細胞の二要素であつて、そのどちらが缺けても細胞としての生活が出来ない。

斯して細胞質と核とは動物、植物を通じて生物の細胞を造る要素であるが、これ以上の構造になると、動物と植物とは相違を生じて來る。先ず植物では普通細胞質の中に數個の色素體と言ふのがある。緑色の部分を造る細胞ではそれが葉緑素を含んで葉緑體と言ふものとなつて居り、馬鈴薯や米麥では澱粉を含んで澱粉粒と言ふものとなり、人參などではカロチンと言ふものを含んで有色體と言ふものとなつてゐる。

細胞の分裂 細胞の不思議な現象は分裂である。生物は凡て細胞に依つて構成されてゐると前にも述べたが、澤山の細胞も基は一個の細胞から分裂したもので、一番始めは一個の細胞が分裂して二個となり、四ヶとなり、それがバクテリアのやうな單細胞

胞生物であれば離れ離れに生活を續けるのであるが動物や植物を構成してゐる細胞はそれが離れ離れにならずに結びついて一つの生物體を組立てるのである。兎に角、細胞が分裂して二つになつて最初の細胞を母細胞と謂、後のを娘細胞と呼んでゐる。細胞は決して突然に湧き出るやうなことは絶対にない。凡ての生物は斯くして細胞の分裂に依つて出来てゐる。我々人間は四百兆と言ふ驚く可き数の細胞から構成してゐると謂はれてゐる。

分裂の方法 細胞の分裂は不思議な程我々を驚かす現象であつて、分裂と言つても餅でも千切るやうに無難作に行はれるものではない。前に述べた、核は原形質の中で非常に重要なもので細胞のキヤプテンとも謂ふ可きものであらう。分裂が起きるに當つて先ずこの核が奇々妙々な、極めて手の込んだ變化を起して結局核のなかの主要なものが二つに分れる、即ち細胞が分裂を始めると、核の中の染色質を綴つて網のやうに擴つた核絲が次第に形をあらためて、何本かの細い紐のやうなものになる。それは極

めて細長いが次第に太くなり、又、短くなりつひに棒のやうなものになる。これは色素でよく染るから染色體といふのである。面白いことにはこの染色體は生物の種類に依つて、それ／＼數が一定してゐる。

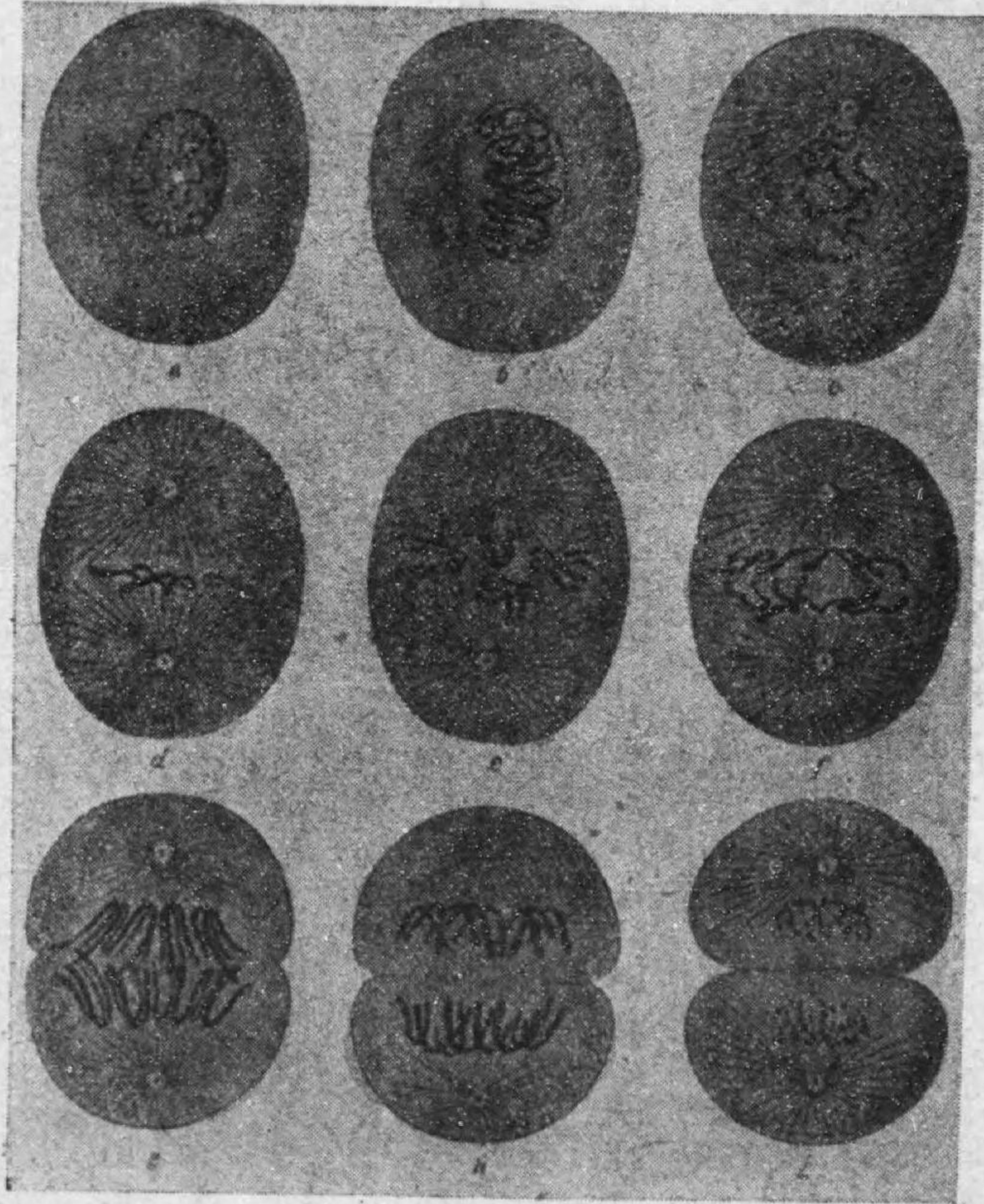
次に染色體は各々が縦に裂け目を生ずる。核のなかに、かういふ變化が起りつゝある間に、核の外では中心體が活動を起す。中心體と言ふのは核のそばにある小さな球で、先づそれが周圍に御光のやうな放射線を現し、次に二つに分れ、核に添ふて動き核をはさんで對ひ合ふ。そうなつてからもどちらも御光のやうなものを持つてゐる。なほ核のなかにある仁と言ふものは、その變化の間に自然に形が小さくなつて、つひに消えてしまふ。これまでは分裂の準備期で、一般にこれを前期と謂つてゐる。

次に核膜が急になくなり、地球で言へば南北の極と言ふやうな處にある二つの中心體がめい／＼放射線を染色體までのぼす、そしてそれを地球で言へば赤道と言つた處に持つて來て列べる。それは恰度折り重つた線り人形を二人の人形使ひが絲で定つた

位置に持つて来るやうである。そして染色體は赤道のところに行儀よく環をつくつて列ぶ、横から見ると兩極の中心體から出てゐる細い絲が棒線のやうな形になつてゐて、その中央の一番膨れたところに染色體が横つてゐるのが重つて見へるが、どちらかの極の方から見ると、染色體が車座になつて列んでゐるのが見へる。染色體の數はこの時容易に數へることが出来るのである。この時各々の染色體はその裂け目が横から見へるが極から見ると、見へないやうに置かれてゐる。斯うなつた時までを分裂の中期と言つてゐる。

續いて各染色體は中心體から絲で引ばられるやうに、一せいに裂け目からはなれ半分は上に他半分は下にと動き出す。勿論引ばられるやうに見えるけれども實際に引ばられてゐるのではない。しかしどうしてこんな現象が起るかは、今の處全く判らない。染色體の片割れが中心體の處まで行つてしまふまでを分裂の後期と呼んでゐる。そしてこの時には細胞は少し細長くなり染色體が車座になつて赤道の處が少しくびれ

細胞の分裂



動物の細胞が分裂する順序。a 普通の状態にある一の細胞。b 分裂を始めるに核のなかの染色質が何本かの紐のやうなものになる。中心體が二に分れる。c 染色體ができる。中心體が兩極に來て相對する。d 染色體が中央に列ぶ。染色體が縦に裂ける。f.g.h 各々の半分が中心體に引かれ細胞がくびれる。i 染色體がぼやけて核ができる。

て来る。

染色體が中心體へ來るとくつき合つて一塊りとなり、同時にその周圍に新しい膜が出来て、それ／＼新しい核になり、ついで染色體の輪廓がボンヤリして来る。平常の姿の核になつてしまふ。又、中心體も御光がなくなつて核のそばにおさまつてしまふ、一方に於て細胞はますますくびれ二つの細胞に分れてしまふ。これを分裂の末期と言ふ。

以上述べた分裂は最も模範的な動物の細胞分裂の有様であるが、ある生物では平常は中心體のない多くの植物の細胞では兩極のところから、いきなり御光のやうなものが現れる。今述べた細胞の分裂法は、われ／＼を始め殆んど凡ての生物體が作られる時に行はれるものであるが、ある種の生物や、ある器官ではさういふ複雑な方法によらず、核が團子を千切るやうに、いきなり二つに割れ、無雑作に細胞分裂が行はれることがある。このやうな分裂方法を直接分裂といひ、普通の方法を間接分裂といふ。

間接分裂では核の兩極に御光のやうな絲ができて、染色體を引ばるから、これを有絲分裂といひ、さういふことのない直接分裂を無絲分裂といつてゐる。

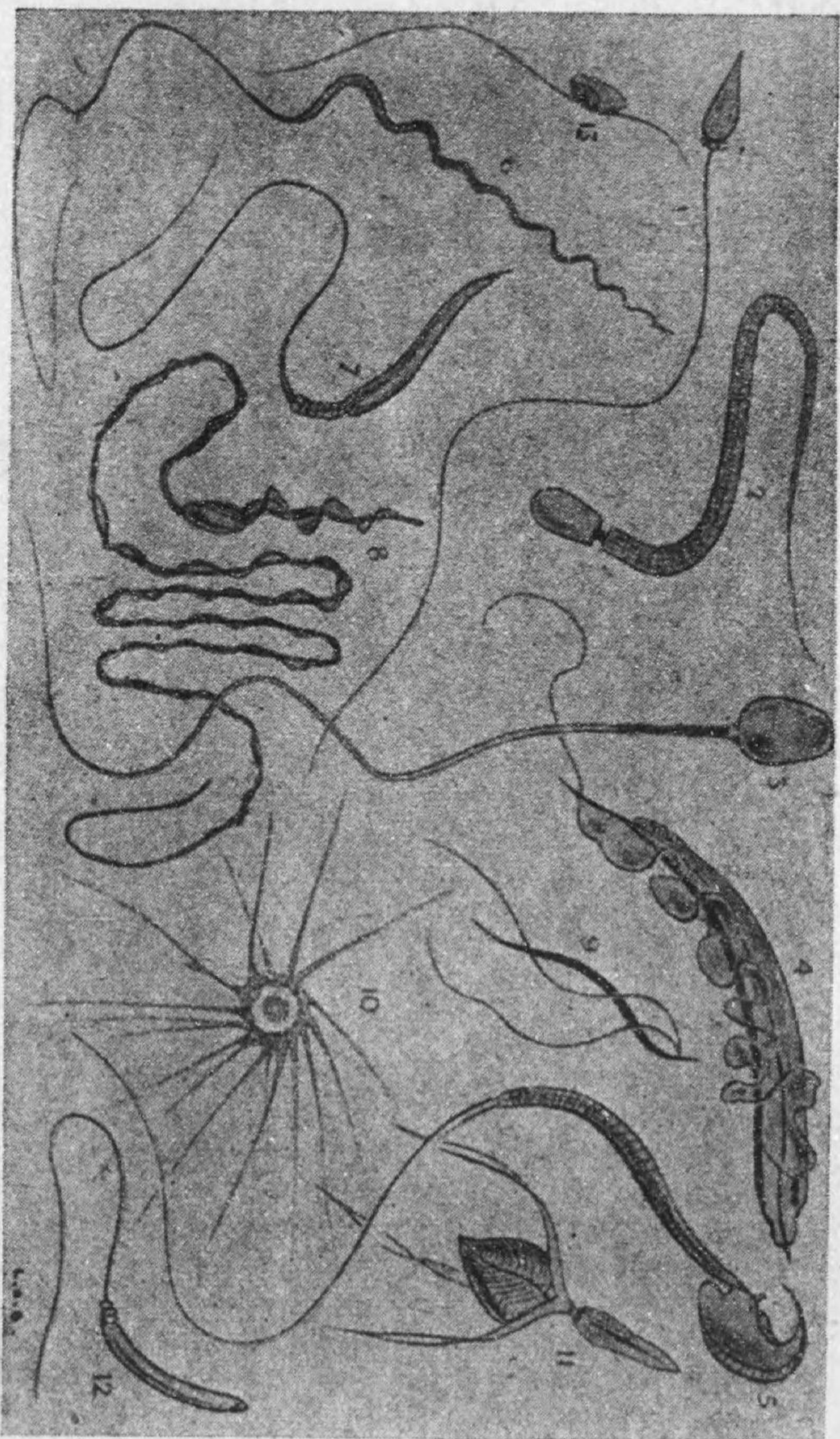
細胞が分裂して生物體を構成し、それは絶えず分裂増殖することは判つたが、次に生殖に就いて言へば、その方法も千差萬別と言へる。バクテリアのやうに、一つものが二つに割れ、それ等のものがまた二つのものに分れドン／＼殖へてゆくのがあるかと思へば、オニユリのやうに葉柄の腋のところに小さい球が出来て、それが落ちて一本の植物となることもある。然し、一般に普通な方法は雄の細胞と、雌の細胞とが出来て、それが合體して一つの細胞が出来、それから新しい個體を生むことである。斯ういふ生物では體のある部分の細胞の分裂に依つて雌や雄の細胞が出来るので、これを生殖細胞と謂ひ、これに對して、生物體を作る細胞を體細胞と謂ふのである。體細胞は生物が死ぬると共に死んで仕舞ふけれども生殖細胞は生物體からはなれて子を作り子孫の續く限り無限に分裂して生き永らへてゐるのである。

前に一寸言つておいた染色體であるが、その染色體は生物に依つて數が異り、生物の種類に依つて數は一定してゐる。だから生殖細胞の場合に雌雄の生殖細胞が合體して一つの細胞を作るとすれば、その時、染色體の數は倍になるやうに思へるが實は、生殖細胞では、間接分裂と少し違ふ分裂を行つて雌雄の生殖細胞には染色體の數が半分減つて行くのである。これがため、これが合體して出來た細胞の染色體の數は依然として生物固有の數になつてゐる。

生殖細胞 生物は大抵精子と卵子の合體に依つて子を作る。人間も勿論である。

精子 精子は非常に小さなもので、顯微鏡に據らなければ見ることが出來ない。形はオタマジャクシの尾のすつと長いやうな形だと思へば差支ない。これが精液の中に無數に尾を振つて遊ぎまはつてゐる。始めて精子が発見されたのは今から二百五十年程前のことで恰度、始めて細胞が発見された頃である。

細胞が発見されたのは、前に述べた通りであるが、當時、オランダにローウエンヘ



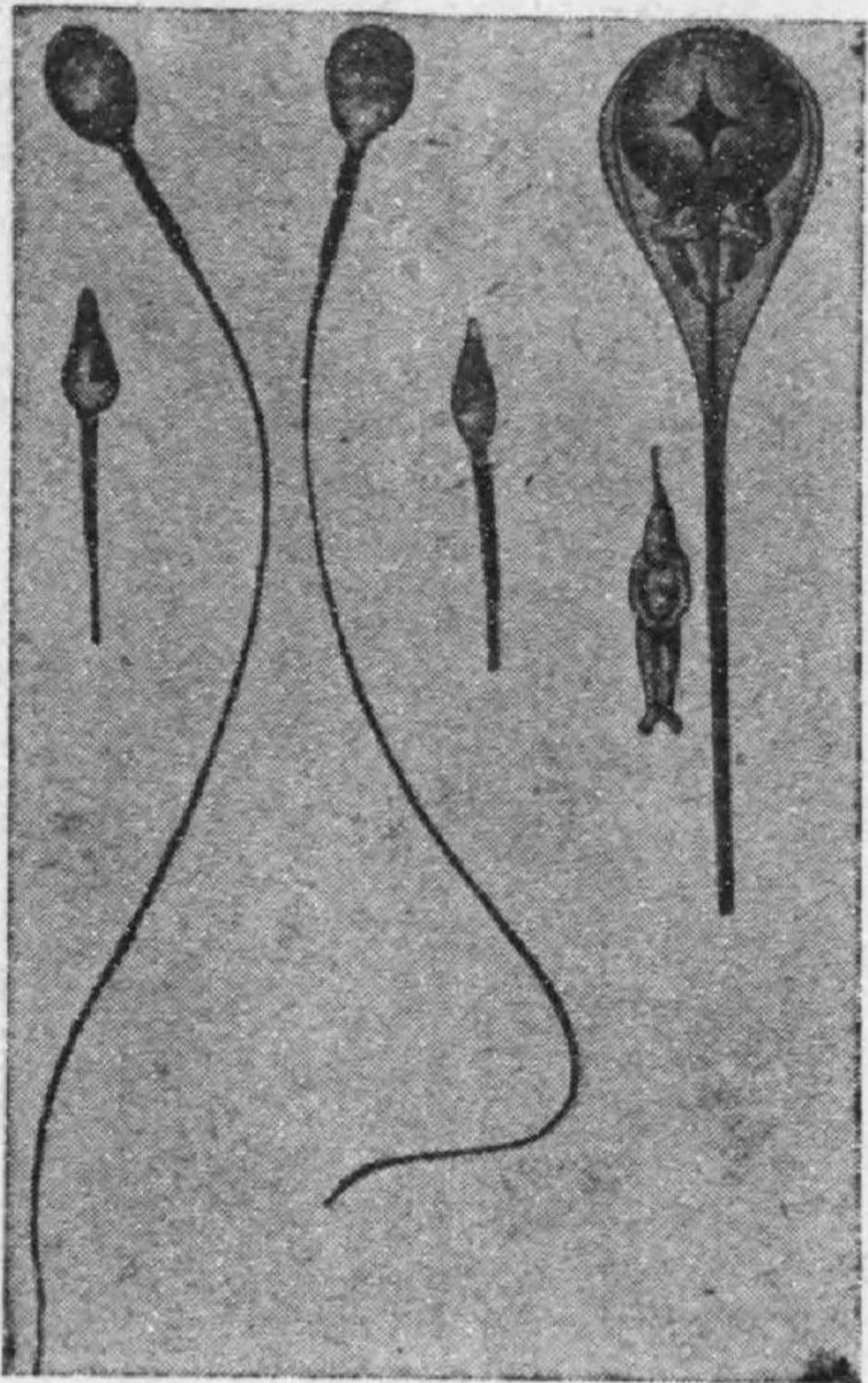
精蟲のいろいろ

- 1 カニ。2 コウモリ。3 人。4, 6 ヒキカハルの類。5 ネヅミ。7 ウミガメ
- 8 カハラヒバ。9 サナダシ。10 カニ。11 ヒバ。12 カハル。13 海藻の一種

細胞の生殖

イクと言ふ學者がゐて、その弟子のハムと言ふ學生が、顯微鏡を作つて色々なものを調べてゐたが、たまく淋病患者の精液を手に入れたので、それを見てゐると、中に無数の小さな蟲のやうなものがあ

人の精蟲



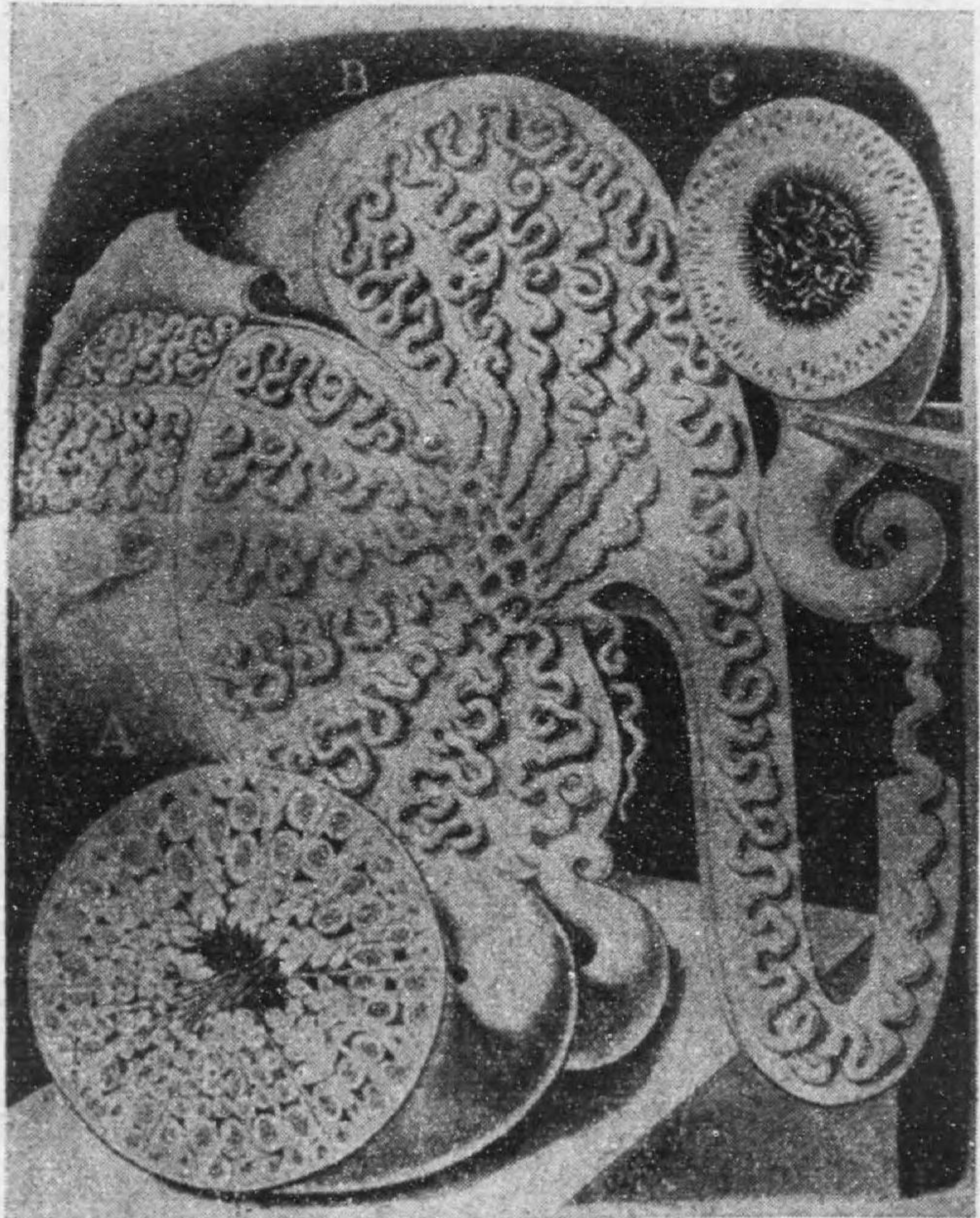
左は人の精蟲二個。左右は頭部と頸部を側面から見たものは精蟲のなかに小人があると思つた昔の學者のかいた精蟲の圖。なかにはその小人がはひ出したものを見たさいふものもあつた。左の小人はそれをかいたもの。

るので驚いて先生のローウエンヘーにこのことを告げた。先生は、これは何か寄生蟲であらうと思ひ、精液の中にあるところから、これを精蟲と名をつけた。ところが翌年になつて、ローウエンヘークスは色々な動物の精液を調べてみて同様のものがあることを知り寄生蟲でないことが判つた。

さて精液が卵を解へらすのに必要なものであることは前から知られてゐたが、この爲めにこの精蟲(精子)が必要かどうかと言ふ疑が起つた。そこで、或學者が蛙の精液を濾して精蟲を除き去つたものと濾さないものとを卵にかけてみたところが前者では卵が解へらなかつたので始めて精蟲が卵の發生に必要なものであることが判つた。兎に角、こゝで精蟲は蟲でないことが判つたが、始めローウエンヘークスがつけた名前がそのまま精蟲(又は精子)と名づけられてゐる。

精蟲が発見されてから一般に精蟲の過重視が始つた。それまでは、婦人側の卵子を男性の精液があたゝめて成長させるものであると言つた考をもつてゐたのである。だから精蟲が発見されてからは、精蟲は婦人の胎内に宿をかりて、成長するものだと言つた考を起してブルヂョア道學者等はそれを盛に婦人は男性の従だと言つた道徳を振りまわしたものである。

精蟲はどこで出来るか これは男性の生殖器から述べなければならぬので、男女



精巢の基構造を示す、A 精子の出来る處、B 精蟲が此の屈した管を通過してCの處に至つて交接の時之れから射出されるのである (カーンより)

生殖器官の部で解剖的な方面は後で述べるとして、こゝでは生物學的に簡單に述べる丈に止めて置く、その前に、精蟲とはどんな構造をしてゐるか？ と言ふことから先きに述べてみよう。

精蟲の構造 動物の精蟲は大抵同じやうな形をしてゐて、前にも述べたやうに、オタマジャクシの尾の方がめつぼう長いやうな形のものであると思へばよい。たゞ動物の種類に依つて頭の形が多少違ひ、尾が長かつたり頭が長かつたり、するだけである。われ／＼人間を始め、貝類やサンゴ海綿類に至るまで皆精蟲の形がまく似てゐると言ふことは實に不思議と言へる。

幾度も述べたやうに精蟲は一つの細胞であるが、その働きに應じて特別な形と構造に變つたものである。人間の精蟲を検べると頭は一寸西瓜の種に似て扁平で、それが二部に分れる。前の半分は一種の細胞質で、その先きが尖つてゐるのは卵に突入するためである。後半は核になつて、次に尾はつけ根の處が少しの間太くなつてゐる。そ

の頭に近い少ばかりのところを頸部、その他を連結部と言ひ、本當の尾はそれから後を言ふのである。頸部には頭部に接して中心體の一つがある。連結部には他の一つの中心體が前後に分れて入つてゐる。その間に、細い線のやうなものがラセンに巻いてゐる。尾には末端少しばかりのところを除いて鞘で包まれてゐる。全體の長さは一分の五十分の一ぐらいである。

精蟲の出来るところはどの動物も睪丸で出来る。普通人間や獸類は外部にブラ下つてゐるが、魚などは他の内臓と同じやうに腹の中におさまつてゐる。で獸類の睪丸を切りとつて顕微鏡の下にのぞくと、細い管が塊つてゐる。その管の壁をなしてゐる處が精蟲と言ふ細胞になる處で、これを精原細胞と謂ふのであるが、これが澤山分裂して精細胞と言ふものになる。精細胞はいづれも染色體の数が半分に減つてゐるが見た處普通の細胞の形をそなへてゐる。これが段々變化して精蟲となり、壁からはなれて管のなかを輸精管と言ふ管に出て、そこで管の壁から分泌される粘液にあふと始めて

動き出すのである。體外に出る事がなければ精蟲はそこで二三ヶ月も生存してゐる。

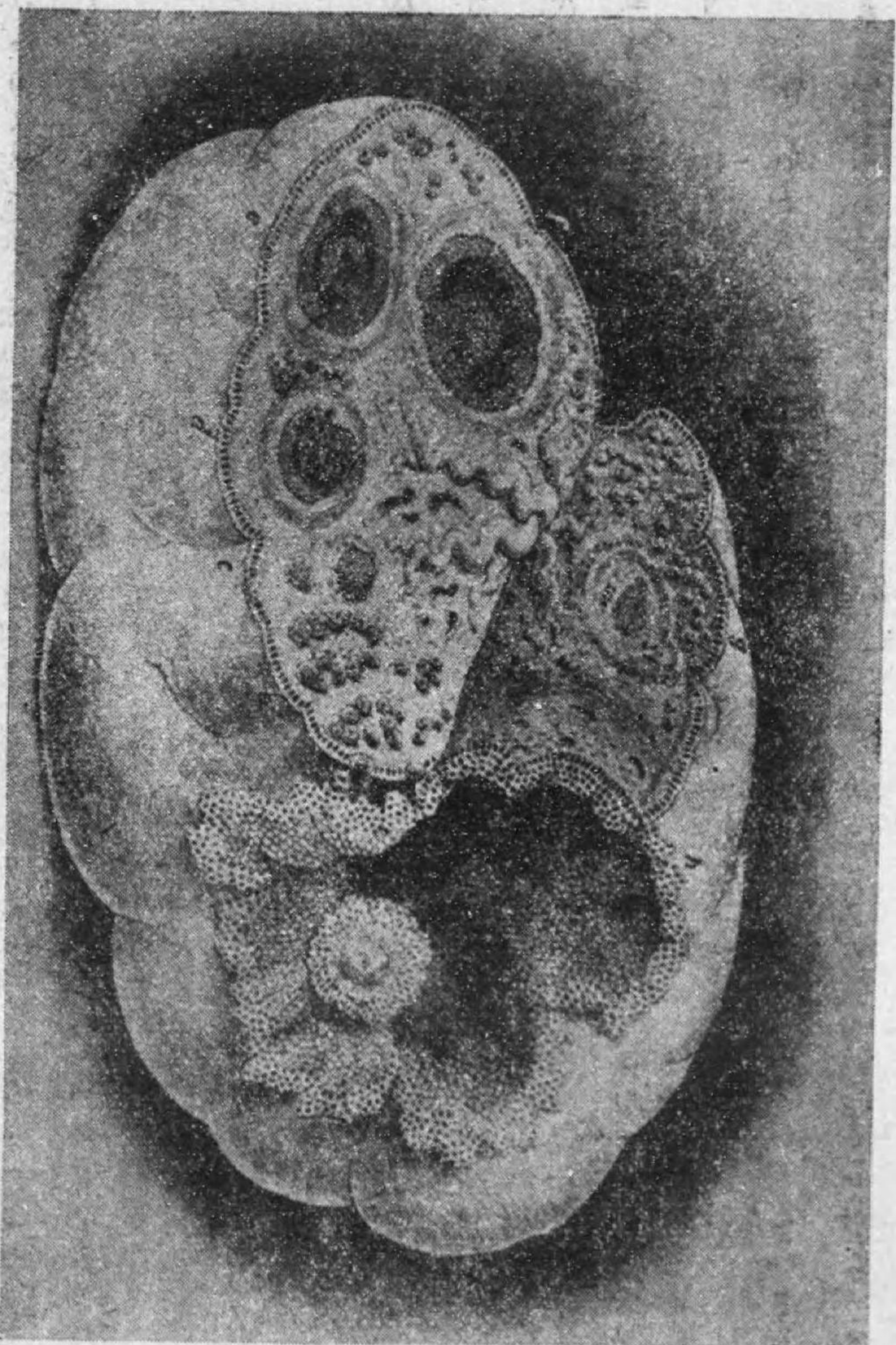
精蟲の數、睪丸内で出来る精蟲の數は夥しいもので、人間では一週間に二億二千六百二十五萬七千も生ずる、であるから男性が節制してから第一回の交接に依つて射出される精蟲の數は實に二三億にも達すると言ふ。精蟲の數は大抵の場合どの動物もこのやうに過剰生産を爲してゐるが、精蟲が確實に卵子に接合出来るものはこのやうなことはない。例へば、ダフネラと言ふ蟲のやうに精蟲が間違なく卵子に達するやうに生殖器の構造が出来てゐるのは卵は二つしか出さず精蟲は唯一個である。

人間の精蟲の運動の速さは一分間に三・六ミリメートルで體の小さい割合に頗る速いものである。若も此割合で人間が走るとすれば一時間に實に十五里走る割合となる人間では女子の體内に入つて精蟲は適當にあるとすれば十日間位は生きてゐる。犬や兎では二十日位は生きてゐることがある。蝙蝠では六ヶ月、蜜蜂では四五ケ年も生きてゐると言ふことである。

胎生と卵生 卵と言へば鳥や魚の卵が頭に浮ぶ、即ち卵と言ふのは動物が体外に産み出すやうな風に考へる。そして卵を生まぬものは卵を持つてゐないやうに考へるのであるが生物は凡て卵を生ずるのである。たゞ普通に卵を産まぬと言ふのは卵が体内で解つて子供になるだけで、子供となつて生れるものを胎生と言ひ、そうでない卵から解つて生れるもの、即ち卵を外部に産み出すものを卵生と言ふのである。獸類の外動物は大抵この卵生に依るものである。

卵に就いて言へば一般に知られてゐるのは鳥の卵であるが、これは本来から言へば卵でない。何故ならば外部に出て來た時はすでに精蟲が這入つてゐるもので、形も元來、外に出る時、あんな形になつたもので、精蟲が入るまではあんな大きなものでもない。そして卵は黄味だけが卵で白味はそうでないのである。

獸の卵は非常に小さく、人間の卵などは、〇・二ミリ、犬、猫、牛、馬など皆大抵それ位の大きさである。だから肉眼では殆ど見えない位である。ネズミ等では〇・〇



卵巢を切つて内部の構造を示す、最も幼い卵、其の他の卵細胞と一緒に卵巢の基質内に落ちたもの、卵はクラリアン包の出来る順序、黄體、ホクラリアン氏包から出て輸卵管に移り行つた處の成熟卵(カーンより)

六ミリと言ふから顕微鏡でなければ見ることが出来ない。それにしても精蟲に比べると遙に大きい。それから獸類の卵は胎内にて養はれてゐるから、鳥類のやうな卵生の養分は持つてゐない。

卵の出来る處 卵の出来る處は卵巢と言ふところであつて、前に精蟲の出来る處は男性の睪丸であると言つたが、女性の卵巢と言ふところと睪丸は對してゐる。これを解剖的な方面は女性生殖器の部に就いて後から述べる。女性の卵巢は外部に現れてゐない體內にあつて人間では長さ一寸位の卵形のもので子宮の兩側に一つずつある。卵はその周圍にある卵原細胞から生ずるもので、それが成熟すると一つずつ離れて輸卵管といふ管に出てくるのである。人間は月經のある毎に一個づゝの卵を産み一生のうち五百ほどを産むが、子供が體內にゐるから子供になるのは割に少い。

受精 ある動物では、卵が精蟲を待たずして發育するものがある。これを處女生殖と言つてゐる。然しそれは例外でほとんど一般には精蟲と合體して子供となるものである。この精蟲と合體することを受精と謂ふ。然し、これは同種類の男女でなければ決して受精するものでなく犬と人間とは決して受精するものでない。だがある動物では縁の近い卵と精子が、ほとんど稀であるが受精することがある。

受精について面白いことには、ウニ、アイマキ、ナマコ、アサリ、等の精蟲、卵は體外に出て受精する。即ち水中で漂つてゐる間に受精するので勿論水中に棲むものに限る。これ等の生物は一個所に群つて棲んでゐるのであるが、別に雌と雄とが近づいて放出するわけでもないで卵と精蟲とはうまく會ふ機會が少い、それで卵も精子も非常に無數に放出するもので、盛に出す時は水の色が濁るほどである。

魚などは一般に産卵期があつて、その時になると、雄は雌を追ひかけて雌が卵を産むと雄が同時に精蟲を出してそれに掛ける。蛙は雌に雄が抱きついて雌が卵を産めばその上から精蟲をかけるのである。だから蛙は交尾してゐるやうであるが決して直接交尾してゐるのでない。

交接 水中に棲むものは以上のやうに水中に於て生殖を営むものであるが陸上にあ
る動物は受精が体内に於て営まれる。即ち、雌の卵のある穴へ雄の精蟲のある穴を合
せてるのであつて、これを交接、又は交尾と謂ふのである。

交接の事を述べたから、もし述べてみる。人間等では生殖器管が特別附屬して
るが鳥類は大抵肛門が生殖器管となつてゐる。だから交尾する時は肛門を少し開いて
互に壓しつけるだけである。たゞガン、カモ、駝鳥などでは雄の生殖器の口が突起にな
つてゐて、それを雌の肛門に挿し込むのである。ウニやナマコに至つては外見は勿論
解剖して見ても卵の粒が小さくて卵巢と卵丸とよく似てゐる。魚でも蛙でも雄雌の別
は解剖してみなければ判らない。鳥以外の陸生動物では、皆交接する爲めの特別な道
具を持つてゐるもので、大抵輸精管の先が突起して直接、雌の卵の出る部分に精蟲を
入れる装置に出来てゐる。タコやイカは奇抜な方法で交接を行ふ。タコは足八本、イ
カは十本足を持つてゐるが産卵期になると、そのうち一本が生殖器管となつて働くの

である。即ち、一本の足は先がやはらかなになつて、交接にあつて輸精管をその足の
先にうけてこれをのばして雌の輸卵管の中に入れる。

植物等も面白い受精方法をとるのであるが面倒になるし、避妊學にはさほど必要で
もないからこゝでは述べないことにする。

染色体について 今迄に述べたことは細胞と受精であつたが人間は卵子と精子が結
合して一個の新らしい人間を生むと言ふことも判つた。そして精子が卵子に結合する
場合には交接と言ふ現象に依ることも判つた譯である。だが、この精子と卵子をもつ
と、くわしく知ることには、後に述べる「避妊」にも必要であるから、今までの體細胞
の分裂は、生物の一般的な分裂であつたが、生殖細胞について、もし述べてみたい
それは、本書の基本ともなると考へるからである。

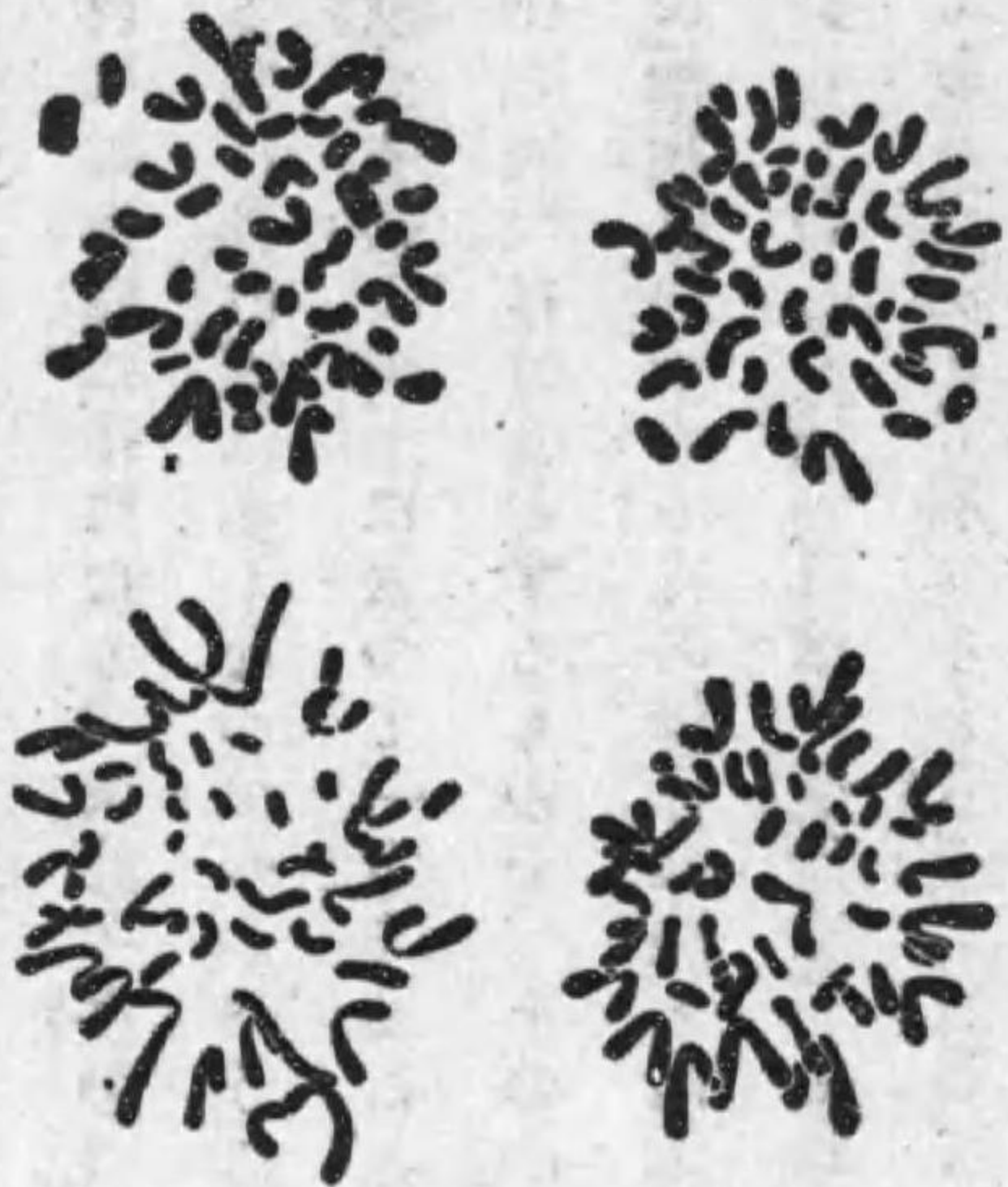
前に、細胞が分裂する時核の中に染色体と言ふものを生ずると言ふ事を述べた。そ
して染色体は生物の種類に依つてその数が一定してゐる。複雑な方法に依つて細胞を

顕微鏡で覗くと、染色體がよく見へる。人間であればその数は四十七個で女子ならば四十八個である、その形はみいずを千切つたやうなもので長いや短いもの點のやうなもの、同じ形のものほとんどないと言つてよい。だが同種類のものであれば、どの細胞をとつても、皆同じである。つまり、Aと言ふ染色體はどの細胞でもAとして認めることが出来る。

此の様な染色體が獨特の形を保つてゐるのはどういふ理由か？ 細胞が分裂して二つに裂けた場合は新しい核の中に引き込まれた染色體は形が崩れてしまつて混ざりあふやうに見へる。しかし精密に調べてみると、それ等の染色體は決して混り合ふのではない。染色體はいづれも、一つの泡のやうなものの中に入つてゐて、その泡が膨れ、染色體が細い粒々にわかれて内に散ばるために混り合ふやうにみえるのであるが、各々その泡のやうなものゝ境はいつまでもなくならないものである。そして次に分裂する時には、泡が段々細くなり、なかに散つてゐた染色體がかたまつて再び染色體とする。

なるのである。それだから核と言ふものは、核液の中に染色體が散つてゐるものでなく、右のやうに泡がギツシリつまつてゐるのである。染色體がその個性を失はないの

人間の染色體



上の二つは日本人の、下の二つはベルギー人のいづれも男の染色體。對になつたものを列べて見る。一つ端が出てくる。

なつてゐるからその数は偶數になつてゐなければならぬ。然し時には一つだけ仲間

はずれがあつて、奇数の場合もある。これは後から説明することにする。

生殖細胞と染色体 精子や卵子は體の一部分が分裂して生じたものであるが、若しもこれ等の核が生物に特有な染色体があつたとしたら、受精に依つて卵子と精子が結合すれば染色体は倍になり、次の子供の時はその倍と言ふやうな譯になり受精の数を重ねる毎に染色体は多くなつてゆくやうに考へられる。若しそんなことがあれば染色体の数は生物の種類に依つて一定することはない筈である。ところが生殖細胞は他の體細胞と異つた分裂をするもので、その心配は必要ない。

前に精蟲は男子の睪丸の精原細胞と謂ふものが分裂して生ずることを述べた。それをも少しくわしく述べれば、最初は、それが幾度も普通の分裂を行つて数が殖へる。そしてある程度まで殖へると分裂が止つて一つ一つ形が大きくなる。十分大きくなると、それが二つに分れ、都合二回の分裂を行ひ、四つになり、それが精蟲になるのである。この最後の分裂のうち初めの一回の分裂が普通とちがつてゐる。先ず形の大き

くなつた細胞の核は普通の細胞とちがつて染色体が崩れて散らばることをしないで始めはめい／＼細い糸のやうなものになつて、核の中に擴る。細胞が大きくなると共にそれは對をなして二本づつ端から寄り添つて行き一本になり、次第にこれが太く短くなる。尤も一本になつても、全く融合するのではなく、合せ目が幾分か残つてゐることが多い。このものは、矢張り、染色体と言ふのであるが、普通の染色体と區別するために、二價染色体と言ふ。その意味は二つと同じと言ふことである。この二價染色体の数は言ふまでもなく、普通の染色体の数の半分である。例は、この生物の染色体の数が二十とすればこの二價染色体は十であるわけである。二價染色体が出来ると、細胞はいよ／＼第一回の分裂を行ふ。その時二價染色体は合せ目から裂け、分れて別の細胞に入つてゆくのである。つまり第一回の分裂で出来た二つの細胞の染色体の数は、その生物の固有の数の半数になるわけである。それ故にその細胞の染色体は對をなすものがない。斯うして染色体の数を半分に減じて分裂するのを減數分裂といふ

のである。第二回の分裂では、これ等の染色體は普通通り一つが縦に裂けて、別々の細胞に入つてゆくから數は減じない従つてこれより生ずる精蟲も半數の染色體を持つてゐるのである。

卵子も精蟲とほゞ同じやうな分裂をすと思へば差支ない。だから、精子と卵子と合はした時、その染色體は、それが生じた核は固有數の染色體を持つてゐる譯である。だから何代たつても、その數は變らないし、植物に於ても同じである。

受精と言ふことは、卵と精蟲とが合體すると言ふことであるが、その核が混り合ふと思ふのは間違つてゐる。染色體と言ふのは前に言つたやうに泡のやうなものの中に入つてゐるのであるから、受精した卵が何千億何兆と分裂しようと、決して混りつこない。どの細胞の中でも雄から來た染色體と雌から來た染色體とは、いつも睨み合をしてゐるのである。たゞ生殖細胞の必要な場合にのみ二價染色體を作つて結合するのである。だから夫婦に依つて作られた子供は、本當の結合でなく、その子供が生殖細

胞を作ることによつて始めて結合出來ると言つた譯になる。

卵や精子は體の一部分が分裂して出來たとは前にも言つたのであるが、それでは、生殖細胞からでも出來るかと言へば決してそうでない。受精した卵が最初に分裂する時から將來生殖細胞となるべきものが區別されてゐるのであつて、受精した卵が第一回の分裂を起す時、接差した核の兩極に精蟲から中心體が御光のやうなものとなつてゐるが、一方の極に澤山の顆粒が認められる。この顆粒はその後分裂に於ても必ず一方の極だけに残つてゐて、他の極に移ることがない。つまり何回分裂しても一方の細胞だけに、これが入つてゆくのである。ところが桑實期と言つて、分裂した細胞がいよ／＼一つの人體と言ふ器官を作る前期になつてゆくと、顆粒は二群に分れ、二つの細胞に平等に入つてゆき、それから、その細胞は特別な位置を占めるやうになり、同時に顆粒は細胞内に散らばつてしまふ。そして、それは生殖細胞になるのである。これから考へると、受精した卵の中には既に生殖細胞となるべき部分が既に分れ

てゐることが判る。そしてすべての生物に於ても、生殖細胞は歴代に亘つて續いてゐるものであつて、體細胞はやがて死滅して、次に生殖細胞が新しい個體を作り、斯くして、生命は永く續くことも判つたと思ふ。

細胞の研究は、染色體に依つて最大の興味をそゝるもので、生物の凡ての固有な性質をそなへてゐるもので、此後に述べる避妊學も、正しい生物學的立場から研究する場合には是非必要である。それ故、少しは面倒でも、これをよくのみ込んで頂きたい。何度も繰り返すやうに、染色體は、その分裂にあつて、散ばつたり塊つたりするもので、その分裂にあつては、多少大きさの違ふ場合もあり、細い粒々が一列に列んで恰も珠子のやうな形になる。それは特に生殖細胞が成熟して、これが減數分裂を行ふと言ふ時に特に明かに見ることが出来る。そして、學者はこれが染色體の本來の構造であつて、みゝずを千切つたやうになるのは、これ等の粒が膨んで互に密着するのであらうと言つてゐる、この珠子のやうに粒々のつながりこそは恐らく、それ

違ふ性質の原を宿してゐるのであらうと言はれてゐる。たゞその粒々、いくらかの性質が含まれてゐるかは判つてゐない。粒に大小があるところをみると大きいには多くの原が含まれてゐるのでないかと考へる。

前に言つたやうに減數分裂の際には對をなしてゐる染色體が接合するのであるが、その時兩者をみると、全く瓜二つであることが判る。即ち、大小の粒の順序が一定してゐて、大粒は大粒同士小粒は小粒同士結合するのである。判り易くする爲めに假に一本の染色體は、A・B・C・Dと言ふやうな原が列んでゐるものとする。それと對を爲してゐる他の一本は、a・b・c・dと言ふ原が列んでゐるとしよう。普通の體細胞の分裂の時には對をなしてゐるのは離れくになつてゐる。そして染色體が縦に裂けるときには右のやうに違つた粒は、それく半分に分れる。即ち、AもBもCもDも、皆切半にされて裂けて出來たものは、どちらでも、A・B・C・Dといふやうに列んでゐるから、それが分れて行つた娘細胞は母細胞と全く同じものである。

ところが生殖細胞が出来るときに行はれる減数分裂では對をなしてある染色體が一度接合して次にまた分れ／＼になつて別々の細胞に入つてゆく。即ち、一つの細胞はA・B・C・Dと言ふ染色體を他はa・b・c・dと言ふ染色體を持つことになる。つまり生殖細胞が二通り出来て、一方は父から来た染色體他は母から来た染色體を持つことになるのである。随つて、前者から發生した父の性質を持つてゐるのが後者から發生したものは母の性質を現すと言ふやうなことになる。

染色體は生物に依つて數が一定してをり、形も同じであるとは何度も言つたことであるが實を言へば、ある種類ではその一つが雄と雌とで形がちがう場合が少くない。時にはそれが全然ない場合がある。即ち、雄と雌とで數が一つちがうのである。例はカメムシと言ふ昆蟲は十四個の染色體を持つてゐるが、雌と雄とでは雄のは一つ違ふ即ち、雌は七ヶ對になるが、雄には六對はそろつて、残る一つが非常に小さくてそろはない。學者はこの不ぞろいの一對の大きい染色體をXと言ひ小さいのをYと言つて

區別してゐる。

生殖細胞を作るため減数分裂をするときには、このXやYはどうなるのか？ 誰にも想像される通り、一つの細胞にXが他の細胞にはYが入つてゆくのである。つまり精蟲はX染色體を持つのとY染色體を持つのと二つになる譯である。雌の生殖細胞では勿論さういふことは起らない。卵は皆同じ七對の染色體を持つてゐるのである。そして受精の時には、その卵にX染色體やY染色體が這入つて來るのである。前の場合には染色體が七對よく揃ふ。即ち、雌が出来た。後の場合には不そろひで雄が出来るのである。つまりX染色體はいつも雄から雄に傳り、決して雌には傳らない。それ故にY染色體に潜んでゐる性質はいつも雄にはかり現れて雌には現れないのである。又時には、Y染色體が全くない場合がある。即ち雄の染色體の染色體の一對は相手が缺けて端になつてゐて、その總數は雌より一つ少いわけである。この細胞が減数分裂を行つて生じた精蟲にはその端の染色體のあるものとなないものがある。端のあるも

ので受精した卵の染色體は數がそろつて雌になり、ないもので受精した卵は一つ缺けて雄になるのである。斯ういふ動物の種類は非常に澤山あつて、現に我々人間もその一つである。

以上は雄の染色體の不ぞろいの場合であつてこれまでの研究によると、動物には斯ういふ例が多いのであるが、稀には反對に、雄の染色體が揃つてゐて、雌の染色體が揃つた場合もある。その結果は、矢張り同様である。その例は、蝶や蛾の類、鳥の類である。例は人としては雄は六十二の染色體を持つてゐるが雌は六十一しかない。随つて精蟲は皆三十一の染色體を持つてゐるが卵は三十一のと三十のと二種でき、前者からは雄、後者からは雌を生ずるのである。

斯様に、雌が出来たり、雄が出来たりするのは精蟲なり卵なりの染色體の數や形が違つてゐるからで、たとへ、そうなつてゐないのでも、形に現れないちがいが、染色體にあるためであらうといふのが一般の説になつてゐる。昔は、外界の状況のみに

よつて、雌が出来たり、雄が出来たりするものであると考へられてゐたが、これを外因説と言ひ今日の染色體から考察されるのを内因説と言ふのである。

さて最後に人間の染色體に就いて述べなければならぬ。だが何分にも人間の染色體は他の動物のやうにその材料が手に這入らないので、手に入つてもそれを處理することが困難である爲めに、その研究は頗る面倒であつた。その爲めに學者も發表した結果がまち／＼でどれに信をおいてよいのか判らない有様だつた。

以前は人間の染色體を二十四だと言ふ説が有力であつた。たとへ、それを信じない學者でも、それに近い數だと信じてゐた、ところがベルギーのウキニワル博士が、男は四十七、女は四十八だと發表した。それがため一時は問題になつたのであるが、あまり數が多過ぎると言ふので一方二十四説はこれを確める研究も發表されたので、賛成者がなかつた。然るに今から十年程前北海道大學教授小熊博士が京都大學の教授木原博士と共に、日本人の細胞で研究した結果ウキニワル博士と同様、男四十七、女

四十八の結果を得た。そして學界に發表してゐるのが大たいその説が正しいとみてよい。

二、産兒調節は生物學的自然の理法である

今までくどくどと細胞の基本的部分について述べた。これは從來産兒調節が醫學的方面に於てのみ問題とされ、最も正常的學問としての生物學的立場から閑却されてゐたことの誤りを知らせることと、非科學的偏見が産兒調節と言ふことの不道德を唱へるブルジョア學者に對する示威としても必要であると考へたからである。

産兒調節は不自然だらうか？ 我々は妊娠と言ふ現象を知つてゐる。生命に拘る程の出血と苦痛、我々は自然のままに苦痛を耐へよと言ふのか？ ヴエルサーエフの『醫者の記録』の中に、支明をほこる社會に、いたましい出産の常規の有様を次の様に述べてゐる。

——私が理論上の産科學の研究に取掛つたそも／＼初めての時、私は書物を開いたまゝ夜つびてそれを前に坐り通してしまつた。私は書物から離れることが出来なかつ

た。氣味悪い、熱氣濼々たる夢魔のやうな、出産の、「常規」な「生理的」過程が私の前に展開された。妊娠した子宮に依つて皺寄せられ壓し縮められた腹部の諸器官特殊な病的な分娩時の陣痛、總てこの出産に際し赤兒の通過せねばならぬ怖ろしい道程は、如何なる定規を以てしても到底計り知ることの出来ない程の、この不適合さは——悉く茲に腹部の諸内臓にまで驚く可き異常を齎し、一度でも出産した婦人はこれに依つて直ぐそれと認める程である……私が始めて出産に立合つた時のことを、今、まるで今日の出来ごとのやうにハッキリと思ひ出す。産婦は若い婦人で郵便局の小役人の妻であり、二度目の出産の場合だつた。彼女は仰向けに横たはり、ふくれ上つた腹は露はされ、支もなく兩手を垂れ、額には汗が滴りとなつて流れてゐた。陣痛が襲つて來ると彼女は膝を弓のやうに曲げ齒を堅く噛んで、唸り聲を出すまいと骨折るのだつたが、しかしどうしても唸らない譯にはゆかなかつた。

——まあ、まあ、奥様もう少しの辛棒ですよね！——平氣な落付き返つた調子で助手がかう産婦をなだめた。

夜は無限に長かつた。産婦はもう我慢することを止めた。泣聲をあげ、身を顫はし指を折り曲げたりしながら病院中に響き渡る程に唸り立てた。その唸り聲は廊下を振動させて、それから何處か遠くの天井の方に消えて行つた。或特別に強かつた陣痛の襲來の後で産婦は助手の手をしかと掴み、ぐつたりとした面持で蒼白になつて痛ましい祈るやうな眼眸で助手を仰いだ。

——先生、どうぞ仰有つて下さいまし、私死ぬんぢやないでしようか？——彼女は苦惱を籠めて訊ねた。

その翌日、病院に彼女の容體を尋ねに彼女の夫がやつて來た。いらくして度を失つて私は厭な、敵に對するやうな感情で彼をじろく眺めた。これは彼にとつて二度目の子供の場合なのだ。——即ち、妻が何でこのやうな苦痛を受ねばならないかを、彼はよく知つてゐる筈だ。それなのに兎に角、このやうな場合に立至つてしまつたではな

いか……漸くその夜遅くなつてから出産は終りに近づいていつた。先づ小さい頭が現れた。産婦の全身は自分から子供を押し出そうとする必死の努力で痙攣的にいきつゝあつた。赤兒は終ひに出た。産婦は會陰を少し裂かれて血の中に泳いでゐるやうな恰好でウト／＼と假睡に落ちた。

——何に、軽いお産さ、だから格別の興味もないさ、助手はかう言つた。

これはおしなべて同じ「常規」なことであつた！……然も事態は「文明」が出産を困難にした、と言ふ點に存してはゐない。非常な苦惱に於て女性は常に産をするのである。既に古代の民がこの不思議なことに驚異の眼を見張り、これを神を呪としての外には何とも解釋することが出来なかつたではないか。——

妊娠が怖る可き常狀であつて、然も必然的な常狀なのである。然も、それは妊娠、分娩、育兒等の最も精力的な生理的勞働を強制してゐる。『今日の此の過度期に女性がその性的受難を、産兒の調節に依つて軽減しようとするのは、全く當然なこと

と言はねばならない。人類は、盲目的な自然が命するまゝの道は無條件に進まんが爲めに高等な腦中樞を所有してゐるのではない。女性に對して如何なる場合にも「子供を生む機械」たれと要求するのは獨斷であらう。』サヴェートの生物學者ア・ネミロフの言葉は、無條件に正しい。

餘りに重過ぎる生物學的負擔から逃がれやうと言ふ尤もな考へからして、女性をして性的受難から遁れる爲めに、有害な避妊法さえ行つてゐると聞く時、又、墮胎、妊娠中絶のうちにもその遁れ道を見出すものも決して、不思議ではない。

それにしても、我々は自然の命する負擔から遁れ得るであらうか？ それは、自然の理法を學び、それを我々の物として闘ひ取ることに依つてのみ自然を征服出来るのだ。

避妊と言ふ言葉は、妊娠を避けると言ふことであるが、妊娠は男女の接合に依つて卵子に精子が結合することから起る。結合も前に言つたやうな複雑な經過を取つて現

産兒調節は生物學的自然的理法である

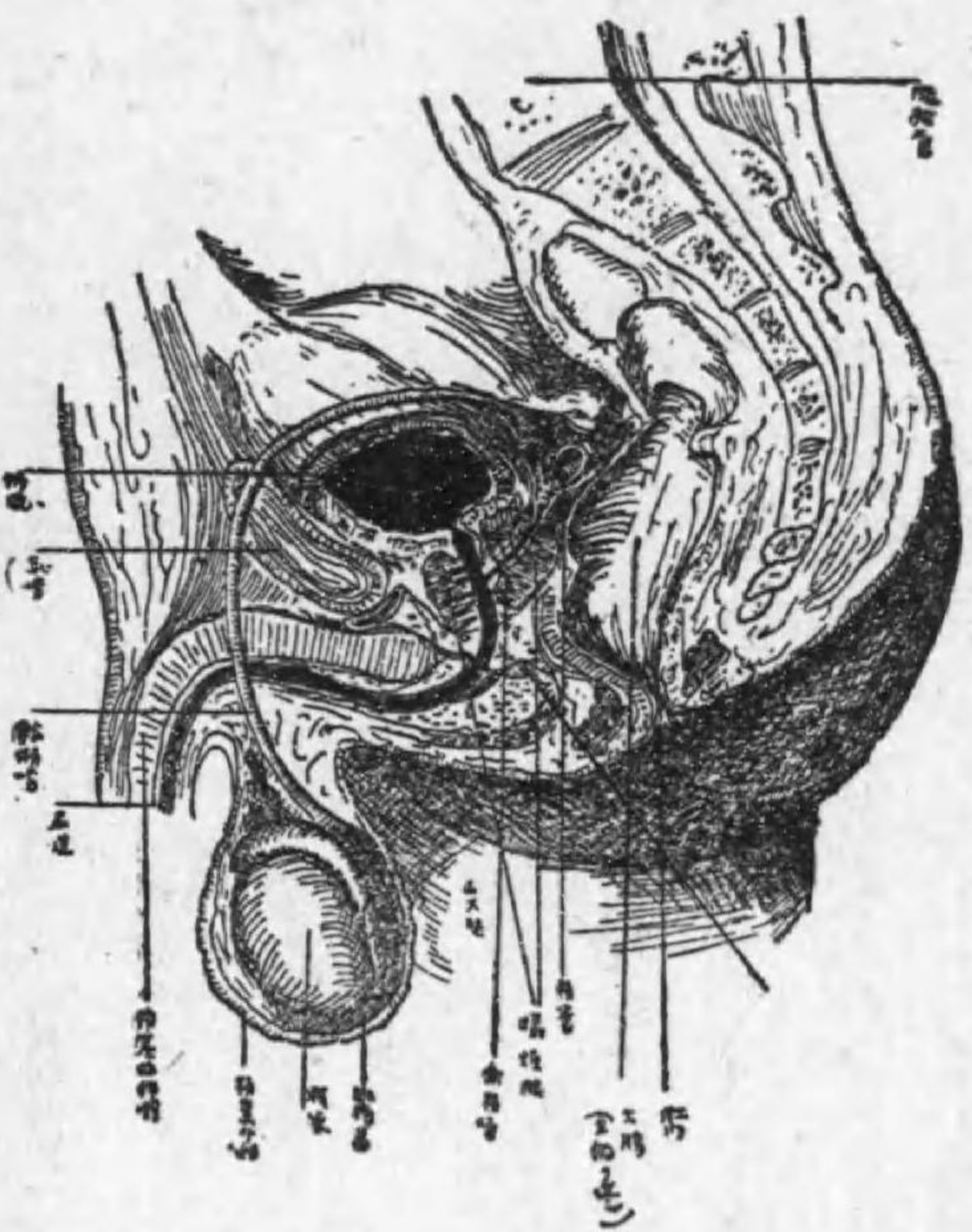
四四

れることも判つたと思ふ。即ち、男子の生殖細胞が分裂して、精子と言ふ精細胞が出來、女性の生殖細胞が分裂して、卵細胞が出來、それが交接と言ふ作用に依つて精細胞と卵細胞が結合する。そして、それはやがて分裂を始め染色體と言ふものが身體の各部を作り、一つの新しい個體である身體を創造する。原始人が不思議な神の意志として解らなかつたのも當然であらう。で我々は妊娠は如何なる器官に依つて、又、如何なる過程をとつて現れるかを知らなければならぬ。それに依つて避妊の方法も知ることが出来るからだ。

三、男性生殖器について

睪丸 前にも男性の精蟲の出來る處は睪丸であると述べた。兩足のつけ根の處に皮膚の囊に包まれて二個の球が

男性生殖器について



ブラ下つてゐる。これは男性の男性たる、又、精細胞の製造元である睪丸であることは説明の必要もあるまい。睪丸は又、一名精巢とも謂はれてゐる。その一個を取り出してよく見ると細い管が一ぱい集つてゐる。それが、ざつと八

四五

百本からあるので、それを精小管と稱んでゐる。一本の管の長さは一丈七尺からあるので若しそれを全部合せると一里位になる。その八百本が段々に集つて精巢網と言ふ網のやうになつてゐるそれがまた集つて送出管と言ふものになつて副睾丸と言ふ處に結ついてゐる。

で、精小管、又は細精管と言ふ。精蟲の本源でこの管の壁の精原細胞が、前に述べたやうに分裂を重ねて、精蟲となる譯である。

副睾丸 これは、送出管が集つて出来てゐる。精蟲の外部に送られる關所とでも言ふ場所であらうか、送出管がうねりうねつて、副睾丸の上に煙管形に重つてゐる。

その、うねり廻つた管は一丈もあるもので、此處は精蟲が外部に出る用意の爲めに血管が通つてゐて温めてくれる。今まで、副睾丸内ではほとんど活動出来なかつた精蟲も此處まで来れば始めて動き出すのである。

輸精管 送出管はやがて輸精管に通じてゐるので、副睾丸の下方から、上へ曲つ

てゆき、副睾丸の近所から離れて、神経や血管等と共にズ、と上に登り、膀胱の横を通つて、兩方の副睾丸から發した二本の輸精管はやがて一つになつて、膀胱の後に沿つて膀胱から出た尿道の出口の近所で攝護腺と言ふ部分に這入つてゐる。即ち副睾丸から攝護腺の間までを輸精管と謂つてゐる。この長さは七八寸位である。

精囊 攝護腺に入るその手前に一寸囊形な部分がある。これを精囊と言つてゐる。これは精蟲が外部に出る迄の休憩所みたいな處で必要に応じて突進すべく、戦備をととのへてゐる處であると思へば差支ない。

攝護腺 精囊の次に攝護腺と言ふ栗の形をした腺がある。精液と言ふ液は大部分この腺から分泌される粘液であつて、この粘液の中に混つて、精蟲が數億をかぞへる程ゐる譯である。若しこの液が無い場合は、精蟲は、交接に依つて女性の卵子と結合出来ない程の重要な腺であると言ふことを知らねばならない。だが、精蟲も、一日數度の交接後などには、ほとんど、その姿も認められないで、この攝護腺液だけの時もある。

る。この液は、男性が一定の年齢に達し、即ち、青春期に達した頃から分泌されるのであつて、それ以前には、わづか、射精管をぬらす位しか分泌されない。

射精管

輸精管が攝護腺に來ると二本が一本となり、それから先一寸位の長さで、尿道に出るまでを射精管と言ふのである。こゝでは攝護腺に依つて小さい流れ口があつて攝護腺から來る液を流し込んで所謂精液を作るのである。

尿道

尿道は直接生殖には必要ないやうに考へるけれど、兎に角、男性生殖器では精液を外部に射出するに必要な器官であるから述べることにする。そして、この管は輸精管や射精管と共に有力な作用をなすもので、先ず尿道の上方にクーパー氏腺と言ふものがあつて、その部分に、尿道括約筋と言ふ關所があつて、精液の出る時は決して尿を出さないやうに、ガン張つてゐる。尿は酸性反應を示し、精液は酸性に對しては非常に弱い。だから、クーパー腺から必要に應じてアルカリ性の分泌物を出して、尿の酸性を中和してゐる。射精管から尿道を通つて外部に精液が射出するのを射精作用

用と言つてゐるが、射精したあとには尿道に無数の精蟲が残つてゐるので、それは尿に依つて、即ち尿の酸性に依つて洗ひ流され、弱められた精蟲が新しい次の精蟲を混同しないやうに用意してゐるのである。そして、又、新しい精蟲も尿に依つて弱められぬやう、精蟲の活動に必要なアルカリ性が、クーパー氏腺に依つて中和され異常なく卵子に結合せしめるやうに非常にうまくつくられてゐる。

陰莖

これは、男根とも言はれてゐる辜丸の上部に、普通は垂れて下つてゐるもので、尿道を包んでゐる太い筒様の筋肉である。その筋肉を皮膚が包んでゐて先の端は粘膜状となり、皮膚がこれを包んでゐるが必要に應じて反轉し粘膜を現し、非常に神経に富みその部分は幾分他の部分と違つて高くなり、先に尿道口を開いてゐる陰莖の筋肉は不随意筋と言つて、我々の意志に反して行動を行ふもので、腦、脊髓、神経、に或種の刺激が起ると、硬直して軟骨のやうに硬くなる。これは、この筋肉が、恰も海绵のやうな組織になつてゐて神経作用に依つて血液が流入する爲めに起る鬱血によ

るものであつて、たちまちのうちに硬直を來す。

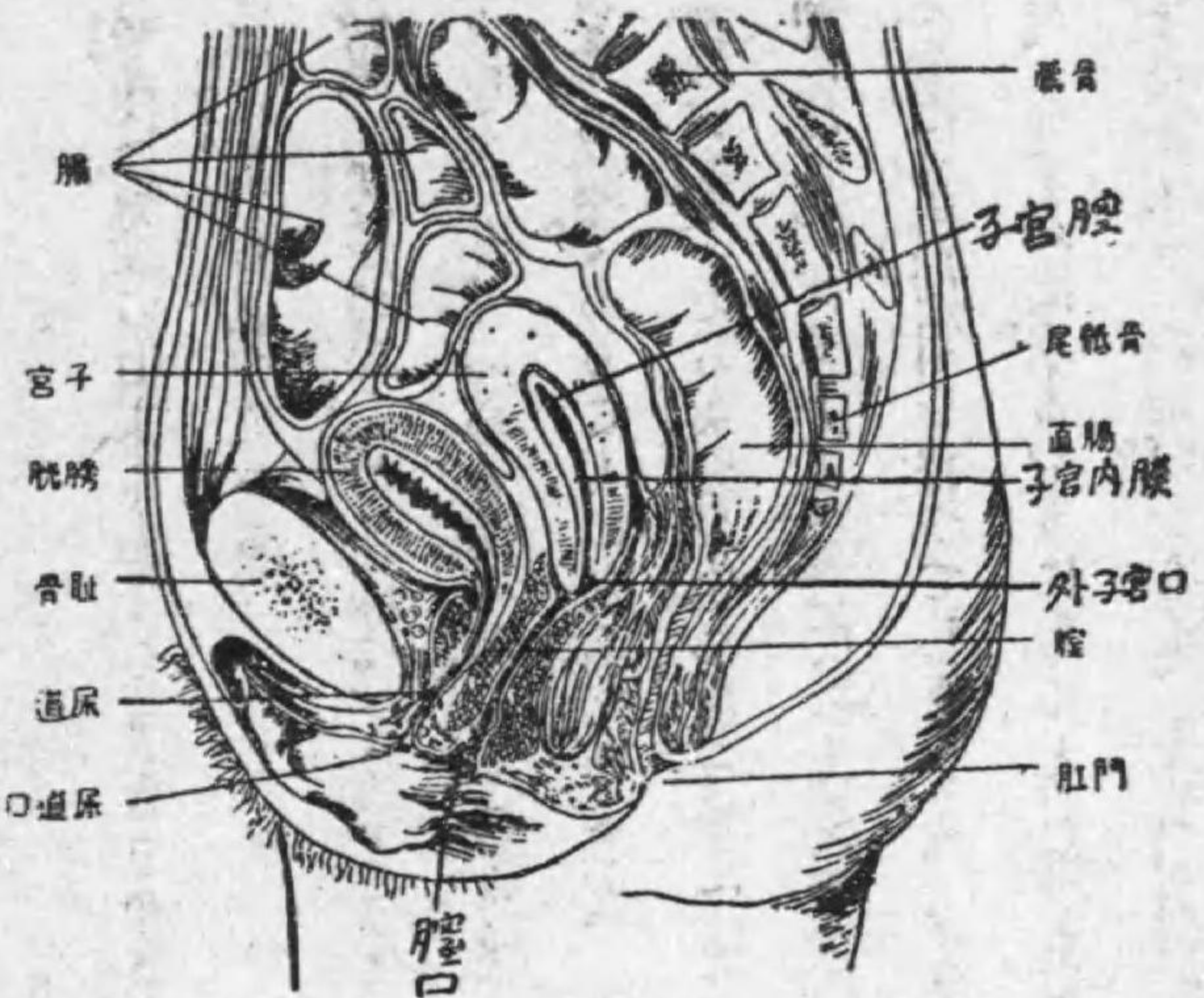
陰莖の上端は前に言つたやうに急に高くなつて龜頭と謂い、快感神経が非常に多く集つてゐる。その部分は特別な皮膚に包まれてゐると言つたが、皮膚も長短があつて或る人は長く龜頭全體を包んでゐる人や、ほとんど包んでゐない人や、たまには全然反轉しないで若し無理に反轉せしめやうとすれば痛みを感じる人等がある、此のやうなものは包皮症と言つて交接にも差支へるから外科的手術に依つて取のぞかねばならない。そして、龜頭は神経作用の最もデリケートの働きをする處であるから、包皮の長い人は一日に一回、位皮膚をめぐつて石鹼で洗ふことが望ましい。龜頭露出の甚しい人も傷つき易い場所であるから注意して保護しなければならぬ。

以上で男性生殖器の避妊に必要な解剖を述べた。精蟲については前に述べてあるから此處では述べないことにす。次に女性生殖器について述べなければならぬ。

三、女性生殖器について

睾丸は精蟲の出来る處であると言ふことを前に述べたのであるが、女性の卵細胞を作る卵巢から述べてみる。

卵巢 男子の睾丸が外部にブラ下つてゐるのに反して、女性の卵巢は腹中におさまつてゐる。凸凹のある鳩の卵位の太さで、子宮の兩側に各々一個づゝ二つある。卵胞を作る處であることは勿論であるが、卵巢の中にはグラーフ氏胞と言ふ卵胞の出来る細胞が多くある女兒が生れた時分には二三萬からあるのだが成長するに従つて四五千個になる。グラーフ氏胞内の生殖細胞は分裂に依つて卵胞となるのであるが、それが完全に分裂作用を終つてしまふと、グラーフ氏胞を破つて卵巢から出て仕舞ふのである。卵胞が出来るやうになると月經と言ふ、子宮から出血を來す現象が現れる。これは大抵十三、四歳頃からで、大抵一回一ヶ月にあるものである。月經と卵胞の成熟



の前探と言ふ觸手に依つて吸ひ込まれ、輸卵管に這入るのである。輸卵管を一名ラツ

とは何等かの關係があるやうであるが、このことは、後から「ホルモン」の項に述べることにする。

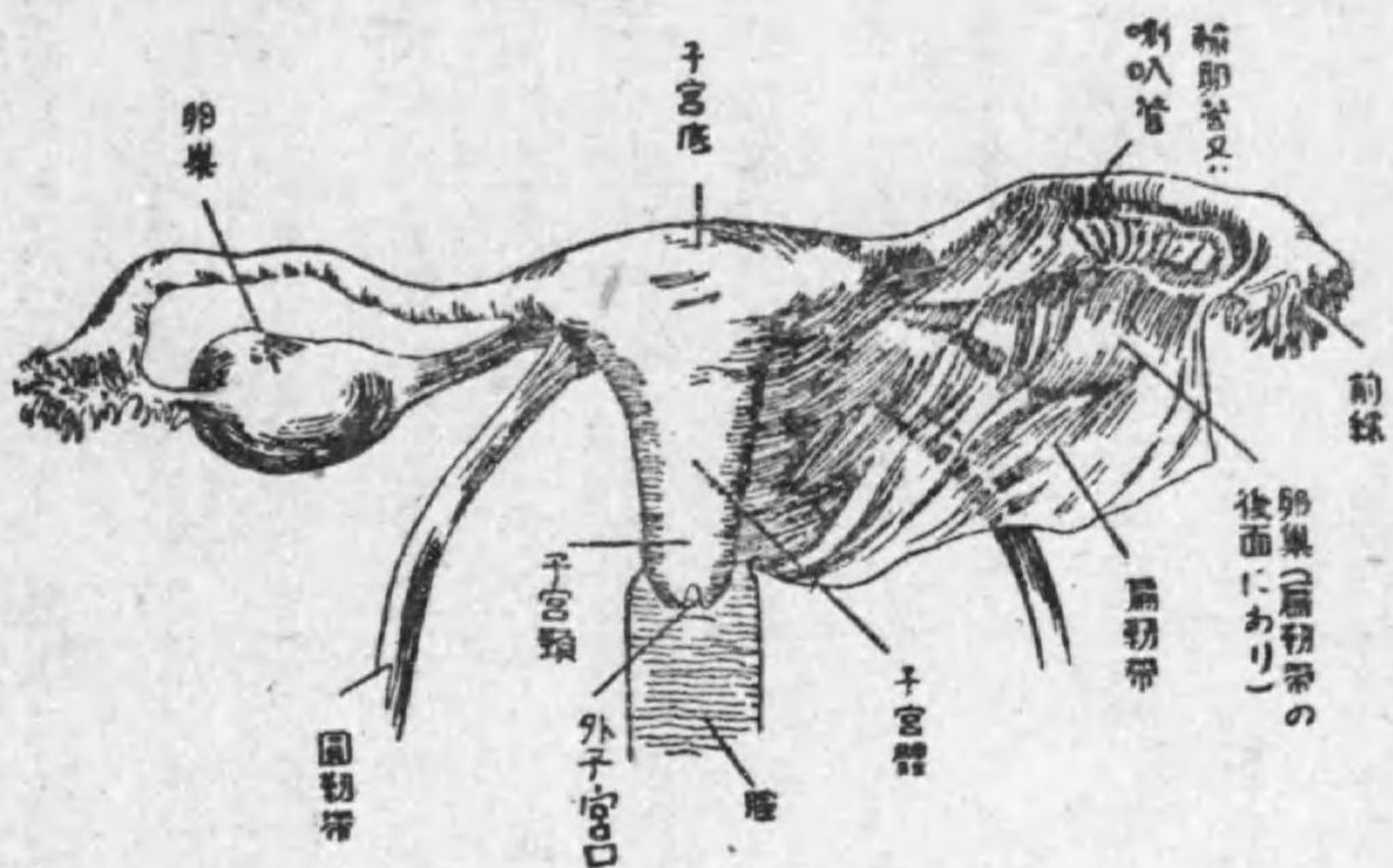
卵巢の下側は輸卵管の先、前探と言ふ房になつたやうなもので包まれてゐて、卵子がグラーフ氏胞からとび出した處を捕へるやうな嗜好をしてゐる。

輸卵管 子宮の上部から兩側に管が出て卵巢を抱へてゐるやうな嗜好をしてゐる。これは輸卵管と言つて、卵巢から排出されて腹腔におちた卵子は輸卵管の先

バ管とも謂つてゐる。男性の輸精管のやうなものである。長さは三寸位で、その中は針の孔位の孔が通じてゐる。そして、この孔は粘膜になつてゐるが、その表面に細胞刷毛のやうなものがあつて、子宮に向つて物を運ぶやうな浪をつくつてゐる。我々の咽喉には食道と氣道と言ふのがあつて、氣道の方へは、やはり斯うした作用があつて空氣が這入る時には差支ないが他の物質や、息することゝ空氣中に含まれた色々の物質は、此の刷毛で外へ、即ち口の方へ押出される作用がある、たんと言ふのは即ちそれであるが、このやうな作用が輸卵管にはあるのである。であるから、前探から吸ひ込まれた卵子は段々と子宮へ向つて送られる。

で精蟲は、前に言つたやうに泳ぎながら、この刷毛の間をくゞつて進んで來る。そして卵子が恰度、この輸卵管に在る時、精蟲が進んで來て結合するのである。そして結合して、輸卵管内で分裂を始め、段々と子宮へ下りて來る。

子宮 一般の人は卵巢のことを忘れて、凡て卵子も子宮で出來るのだらうと考へて



五四

ある人がある。又、或人は、腔も子宮も同じと考へてゐる人もある。勿論、これは全然異つてゐる腔から奥の方に、平にて、僅かにやゝ硬い筋肉に觸れるであらう。これが子宮の一部分で大きさは二寸五分位の西洋梨をさかさにしたやうな形のものである。上中下と分けて、上部を子宮底部と謂ひ、中部を子宮體部と謂ひ、下部即ち手にて觸れる分部を子宮頸部と謂ふので腔部から底部まで孔が通じて底部は廣くなつてゐる。子宮は卵子と精子とが結合して、こゝで發育する場所であり、胎兒の床でもある。

腔 子宮から外部に通ずる空筒である。前に

は膀胱と尿道があり、後には直腸があつてその中間に存在してゐる。筒の直徑は一
寸五分位、長さは三寸位から五六寸に及んでゐる。子宮の突起してゐる前側を前腔穹
窿部と謂ひ、後側を後腔穹窿部と謂つてゐる。男性の陰莖を挿入し、精液を射入せ
しめ交接を爲す場所である。その壁は丈夫な筋肉からなり一面に粘膜に覆はれてゐる。
そして血管が多く、海綿様になつてゐるから交接に際して都合がよい。又、此の腔は
分娩にあつては産兒の通路となる。

處女膜 これは避妊には直接關係ない器官であるが、腔の入口、即ち腔口を、薄
い膜様なもので大半をふさいでゐる膜で、性交、その他、亂暴な運動等に依つて破れ
るものである。一度破壊されたら決して復活しない生物學的に言へば、未熟の婦人が
亂暴な眞似をされてはならぬと言ふので、原始的な遺物であると謂はれてゐる。近代
的な婦人である人達がこれを貴んで奴隷化されてゐるのは笑ひ言でもない。

四、交接について

非常に簡単であるが一應、男女性生殖器の解剖について述べたのであるが、男子生殖細胞が、女性生殖細胞に結合せしめるのには、交接に依らねばならぬ事は、前にも述べたことである。交接と言ふのは、男性の陰莖を女性の腔腔に挿入して、精液を射入することであるが、凡て交接は妊娠と言ふことを前提としてゐるのである。即ち、腔腔は婦人の腔腔は凡て酸性反應を呈し、子宮内はアルカリ性を呈してゐる。それは腔内に棲息する微生物子宮及び腔自身の分泌物を絶へず乳酸状と爲してゐる。それは腔内に棲息する微生物の單細胞（デーデルライン菌、その他）の獨自的な變化によつてなされるもので、外部から浸入する凡ゆる有害細菌等を死滅せしめる。

その作用は、子宮を保護してゐるものゝやうである。精蟲はこの腔内にそゝがれるものであるが、精蟲の向上性、又はアルカリ向上性とも言ふが、精蟲が酸性には見向

もしないでアルカリ性に對しては、それに向つて非常な勢ひで突進する。だから腔内の酸性に反して精蟲はアルカリ性へ向つて、即ち子宮口へ向つて突進してゆく。これはやがて子宮から輸卵管へ進み、恰度、卵巢から排出された卵子とこの輸卵管に於て融合して受精作用を営み、受精した卵は、前に言つた分裂作用を起し、輸卵管内の刷毛（これを氈毛と言ふ）の運動に依つて次第に子宮腔に向つて輸送される。子宮腔まで達する日数は白鼠では五、六日、モルモットでは七日、犬、猫、豚では八日から十日かゝり、人間では略七日から十日位とされてゐる。

で、受精の有様をすこし述べてみる。輸卵管へ来た卵子と精子は、輸卵管内の膨大部と言ふ部分で逢ふと言はれてゐる。兎に角、卵子は精子群が押かけて來ると、卵子の原形質は一部精蟲を迎へるやうな恰好に突起を起す。で精蟲は、眞先に來たものがその突起に吸ひ込まれるやうな、突進するやうな恰好でキリ／＼と這入つて行く、それが、卵子の核に達した頃、今迄の精蟲の尾は切れて融けてしまふ。これを受精と言

ふので、それから前に何度も述べた分裂を起し、所謂、桑實體と言ふ個體となつて子宮腔へ這入つてゆく。そして桑實體は一部は胎芽となり、胎盤となり、臍帯となつて漸次胎兒が成長して来る。

卵子と精子と結合することは判つたが、いつ頃それは結合するのであらうか？これは今日、色々の説があるが定つた説がないのでこゝで述べてゐては面倒になるから避妊の項で述べることにする。

五、妊娠について

受精した卵が子宮に着床してから二百八十日間即ち、月經が止り分娩に至るまでを妊娠と言つてゐる。場合によつては外部の壓迫や色々の影響で、それ以前に胎兒が發育中途で外へ出て来る。これを流産と言つてゐる。七ヶ月の終りまでを流産と謂ふのだが、それが八ヶ月目から以上に排出された場合を早産と謂ひ特別な方法で保育すれば正常な場合と同じく發育する。七ヶ月以下では大抵生るだけの能力がない。

婦人は此の妊娠中に非常に個人的自由を拘束される。「つわり」と言ふ現象は妊娠三ヶ月頃に現れるもので、氣分が悪くなり、食物の嗜好が急變し、それが、やがて消失して漸次臨月に近くなるに従ひ、消化機能や、全體的な生理機能に影響して来る。この間、身體は適當な運動と休養の調和が必要となつて来る。ブルヂョア醫師達は分娩の危険は此の期間の攝生にあると言ふてゐるが、決して、この期間に於ける影響

ばかりではない。それは少女時代からの女性的訓練に依つて分娩時に於ける大部分の危険は除かれ得るのだ。生れて間もない時から、女性は骨盤の發達を増進する爲めの保護と運動が必要であり、青春期に達する當時、及びその前後の衛生は、やがて出産期の危険を除く豫防であり得るのである。資本主義社會に於ける諸施設は、全然斯る方面に意を用ひてゐない。サヴェートルシアに於ては幼児の爲めの托兒所は工場、農村に完成し、尙ほ、それ等の設備の爲め完全を期さんと計劃しつゝある。工場に於ては青春期の處女のみならず、凡ゆる婦人に適當の運動と休養を與へてゐる。その爲め妊娠も順調に分娩時の諸設備と相まつて、危険率は漸次救はれやうとしてゐる。

六、内分泌について

生物は最も進歩した、我々人間の凡ゆる知識、科學を以てしても製作し得ない自然の藝術品とでも謂ふべきものであらう。生物の理法を究めれば究める程、深く深く、相互の關連した有機的な生命と言ふ事實の外、何等の言葉も發し得ない。身體の最も複雑した器官は神經である。腦中樞を中央政府とするならば、その中央政府は決して獨斷的行動はゆるされてゐない。人民から孤立した政府、例へば帝政ロシアの如きツァー政府は、やがて×××××運命にあると同様、若しも腦中樞のみに身體を委せておこならば、やがて身體は疲勞し、死滅の他はない。だが身體は、各部を組織する細胞と、各細胞を動かす腦中樞と、細胞の獨立的活動等に依つてよく統制されてゐる。

生物に最も特殊な作用は「新陳代謝」であらう。人間が精細胞と、卵細胞の結合

したもので新しい生命が生れ、やがてそれは死滅し、次の新しい生命を生んで終つてゆく、これは凡て新陳代謝の働きなのである。ロシアの例を取るならば、ツア
 ー専政政府が倒れ、プロレタリア×××××、労働者農民×××××、五ヶ年
 計画と言ふ新陳代謝を行ひつゝプロレタリア社会は進歩完成してゆく、それはやがて
 又、新しい、社会を生むであらう。それは然し相互的な関連がなくては不可能であ
 る。一部分の働きのみでは片輪な社会を生むことは必然だ。で、それを調節し平均さ
 せる指導部が必要となる。それが中央政府から命令と報告を齎らすやうな作用をする
 器官、即ち、神経である。だが神経のみにては完全な調節は望まれない。そこで内分
 泌と言ふ働きがある。これから述べやうとするホルモンと言ふのがそれだ。

ホルモンと言ふのはギリシア語の「喚び覺す」と言ふ意味であつて、体内の分泌器
 官から分泌されて血液の中に混つて身體の調節に役立つ内分泌物である。何故内分
 泌と謂ふかと言へば、血液や精液のやうに外部に分泌されないで身體内部に分泌される

から内分泌と言ふのであつて、唾液や、汗や、その他の外部に分泌されるものを外分
 泌と言ひ、ホルモンの様なものを内分泌と稱してゐる。

内分泌は色んな器官に働きかけると言ふことは前にも述べたか、例へば胃に働きか
 けるガストリンと言ふ内分泌に就いて言ふならば、食物があると胃の神経
 が中央政府である脳中枢に報告する、脳中枢はこれを取つて喰べよ、と命令を發する
 そうすれば食物を取扱ふ神経は、胃と、唾腺から盛に唾液や胃液を分泌させて消化の
 用意を爲す。それを尚よく、消化する爲めガストリン内分泌物は神経を助けて胃液の
 分泌を盛にさせる。その他に腸に働くセクレチンと言ふ内分泌物は、腸液の分泌を盛
 にさせ、腸が疲れ傷まないやうに働きかけるのである。

斯うして「刺戟素」と言ふべきホルモンは各器官に働きかけるのであるが、それは
 一定の分泌すべき器官を持つてゐる。前のガストリンは胃の下部幽門と言ふ處で分泌
 されるしセクレチンと言ふのは腸の粘膜に分泌する腺がある。内分泌機能と言ふことが

判つて来たのは最近のことでハッキリ判つてゐる内分泌だけでも十數腺あるが、その中の主なるものを述べて、次に避妊に必要な性的内分泌を述べることにする。

副腎 この副腎から二つの異つた内分泌を行つてゐる。そしてこれは身體に重要な役割を爲してゐるから一應述べてみる。副腎と言ふのは、腎臓の上に被つてゐるもので、これから分泌されるホルモンは、アドレナリンと言ふものとコリスと言ふものである、アドレナリンは内臓の神経を刺戟して、その血管を収縮させる働きがある。それが爲めに血圧が高くなり、心臓の働きが強くなり、いろ／＼の分泌腺の働きが盛になる。又コリスはその反對の血管を擴げて血圧を低くする働きがある。これ等のホルモンが相互に働いて、血圧や心臓の働きを加減してゐる。

甲状腺 この腺から分泌されるホルモンも重要な役目を持つてゐるもので、そのホルモンはどんな物であるか、今の處判つてゐないが、この腺は咽喉部にある甲状軟骨の處にある腺で神経を興奮させる働をしてゐる同時に營養を整へてゐるやうである。

副甲状腺 この腺は甲状腺のなかに豌豆位のもで左右二個ある。これを取り去ると激しい筋肉の痙攣を起すから、それから考へて神経に作用して痙攣の起るのを防ぐ作用がある。

胸腺 心臓の上の處に肺にはさまれて胸腺と言ふものがある。これは子供だけにあるもので嬰兒は特に大きい。青春期になると段々質が變つて来る。これは恐らく、生殖器に關係してゐるやうである。これを取り去ると骨格が變化して折れやすくなり、生殖器が非常に發育して来る。去勢した男子等はこれが三倍にもなるが、稀に大人にも残つてゐる人があつて、激しい運動すると心臓麻痺で死る事がある。そして生殖器は子供の時のやうに發達しない。

腦下垂體と松葉腺 大脳の下に腦下垂體と言ふ内分泌腺がある。これは各々異つた三つのホルモンを分泌してゐる。然し、それも格別その處から分泌されるので、一は身體の發育を促す作用で、二は、アドナリンと同じやうな血管の收縮を起す働きと、

三は、乳の出る乳腺や腎臓の働きを助ける働きをするものである。小脳の下に松葉腺と言ふ内分泌腺がある。この腺は、脳下垂體と全然反對の、身體の發育を妨げるホルモンを出して、脳下垂體と調和してゐる。

生殖器の内分泌 男女の生殖器にも内分泌作用がある。性交慾が起つたり、月經があつたり、きまつて、十月目に分娩したり、男が男らしく、女が女らしくなつたり、その他様々の現象は、この生殖器のホルモンに據るもので、他のホルモンのやうに直接生命に拘るやうな事はないが間接には、生殖細胞を無能とし、受胎も、妊娠も、分娩も起らないと言ふ現象を現す。

睪丸 睪丸については前にも述べたが、睪丸内には細精管が八百本もあると言つたこの細精管は精蟲の出来る細胞があつて、それが分裂するのであるが、その精原細胞の外に、間細胞と言ふ細胞があつて、この細胞がホルモンを分泌してゐる。このホルモンは、男子が男子らしい體格を作り、性慾を起し、兎に角、女性と異つてゐるのは

このホルモンの爲めである。

攝護腺 この腺は最近になつて内分泌機能があることが判つたのであるが、この腺については、前にも一寸述べたが、精液はこの腺の分泌物が主であると言つた。攝護腺液と言ふのは即ち、それである。その他にホルモンを分泌してゐる、それはどんな働きがあるかと言へば、精蟲を作るのを促す作用がある。淋病等で、この部分が犯されるとよく不妊症となるのはその爲めに依るもので、この腺が犯されると早く老衰するものは、間細胞の働きも精原細胞が犯されるのに應じて犯されて來るからだ。

卵巢 卵巢についても生殖器の項で述べておいたが、卵が分裂後、破裂して腹腔にとび出すと、その卵はグラフ氏胞に包まれてゐるので、そのグラフ氏胞は卵からとび出して空になる。そうすると、その空な部分は形が少しくずれるが、その中に黄体細胞と言ふ黄色の細胞が出來てくる、これからホルモンを分泌するので、その作用は受精した卵に發育を促すのであつて月經が止まるのもそのためである。勿論、受精

しなかつた場合は、黄体は萎縮してホルモンも分泌しない。だが、萎縮してもそれは間細胞となつて睾丸の間細胞と同じ作用を呈して女が女らしい作用を現すのもその爲である。元來、卵巣には數萬のグラーフ氏胞があるが、色々の關係で、それは全部發育しないで萎縮するが、それ等は總て間細胞となつてホルモンを分泌してゐる。

胎兒 胎兒がホルモンを出すと言ふことも最近判つたもので、これは乳腺の働きを促す作用がある。乳腺の乳が分泌するのは乳腺が破壊される爲めであつて、胎兒は乳腺の壞れるのを防いでゐるが、一度胎兒が分娩されれば乳腺が壞れて乳が出る譯である。

七、分娩について

受精から妊娠、分娩と、婦人の生理的負擔は加重して、やがて育兒と言ふ重荷を負はされてゆく。文明はそれ等の苦痛を幾分でも救つてくれるであらうか？ 資本主義社會の如何なる文明も決して救つてくれない。夫は工場に働き、妻は家庭の雑事を處理してゆく!? だが、現在の社會に於ては、それさへも不可能にした。夫も妻も共にせきに、子供即ち「小さい煽動者のほい、笑みも」プロレタリアの母達は過重な勞働だ。小さき煽動者の前に他愛もない子供のやうな、あいあいたる生活は、とうてい望み得ないではないか！ 一人の子供は彼等の生活を益々困難に陥れてゐる。

妊娠九ヶ月を経過した胎兒はやがて外部に排出される。それは實にデリケートな關係によるものである。先づ、受精された卵は、グラーフ氏胞の黄体ホルモンに依つて發育を促される。新陳代謝機能は漸次、胎兒を發育せしめ、分娩されるのであるが、

それは母親にとつて耐へ難い苦痛を、即ち陣痛をとまなう、多量の出血と疲労、は依復に永い時日を要するもので、營養不充分的母親ならば特に時日を要するものだ。

分娩に伴ふ苦痛は、特に人間に甚しい。それは胎児の頭腦をようやく通過させるだけの骨盤と産道しか有してゐないことにも依るが、胎盤の子宮壁への融着にも依るのである。人類の他動物と比して秀ているのは兩足に依つて歩行することである。その爲めに胎児を外部へ排出せんとする重力のために胎児は特に子宮へ密着する必要がある。他動物は四足歩行のために胎児の重力は腹壁にあつて、産道への影響が少ないので、子宮へ密着する必要がないし、それはたゞ母體を通じて新陳代謝を行ふことのみで、粘膜に附着してゐるに過ぎない。そのため分娩にあたつて苦痛が少く分娩するものである。

又、人類の歩行は、適當な骨盤の發育をにぶらせるし胎児の頭部は、他動物に比して丸味を持つてゐる。それは産道に障礙するのは勿論である。

黃體ホルモンは躊躇なく、分娩を促す。それは陣痛に依つて始まる。數十時間の後には一個の生命が獨立して呼吸するのである。この外部に胎児が排出される作用を分娩と言ふ。

八、避妊の方法

今まで避妊の基礎になる部分を簡単に述べたのであるが、「避妊の方法」編でも判り易くて、簡単な、確実な、科学的な方法を述べようと考へる。避妊と言つても、一般にサツク、薬等を使用してゐる人もあるであらうし、その他色々の方法を講じてゐられるであらう。然し、それが確実な、そして科学的で無害であるか。どうかは、實踐にまつ他はないが、此處に述べる方法は、すぐ實行出来るやう、又、有害なものに對しては批判して、科学的な方法を奨めやうと考へてゐる。

一、器具、藥品等を用ひないて避妊する方法

最近、ブルヂョア婦人雜誌に、「何等器具藥品を必要としない避妊法」だと言つて盛に宣傳してゐたことがあつた。だが、それは、決して新しい方法でも科学的な方

法でもなく、然も、それには少しの費用も必要としないプロレタリア向きとまで書いてあつた。で端書で問合せると、六十錢送れ、秘訣密送とあるではないか、これでは費用はかゝつて不確実では、何にもならない。結局雜誌社にもうけさせるだけに過ぎない。器具、藥品が必要でないなら、勿論、費用もいらぬ筈だ、それが確実かどうか、又無害か、どうか？ 批判しながら、色んな方法について述べてみる。

中絶性交 これは、性交にあつて、一定の時間だけ交接を爲して、男性の射精前に交接を止める方法で、元來、交接は衝動の満足にあるもので、それも、男性ばかりの満足では不可能であり、又、女性ばかりの満足でも不可能なのだ。相互的な満足感に依つて終るもので、若し如何に避妊の目的とは言へ、不満足のままに終ることが性交ならば、これ程不自然なことはあるまい。勿論、避妊と言ふことが自然に反してゐると言ふ意味で性交も不自然に終らしめやうと考へることは數字の謬りより甚だし。避妊は自然の理法を利用して、我々に都合のよいやうにすることであつて、決し

て不自然でなく、當然なのである。新興醫師聯盟編「無産者衛生必携」と言ふバフレットの産児制限の項に、次のやうな意味のことを書いてあつた。——元來、婦人は健康でありさへすれば健兒を産むことが、一番婦人の體に自然である。此の自然に逆つて産兒を制限しようとするのは婦人の體からいふと決して自然な事だとは言へないのである——と言ふのだ。この筆者は、とんでもない不自然に陥つてゐる。前にかへつてもう一度説明しよう。我々の他の動物よりも秀た脳中枢は自然の命するまゝに歩めと言ふのではない。脳中枢に依つて我々は自然の理法を學ぶことが出来る。だから我々に都合のよいやうに自然を征服し利用するのだ。これ以上説明の必要はあるまい。で、中絶が不満足を伴ふばかりでなく、性交不完全行爲が、神經に悪影響を及ぼすことは明かである。又、一般の人に如何に意志の力を働かしても失敗に陥り易い方法であるから科學的方法とは言ひ得られない。その他に、次のやうな非科學的な事實がある。攝護腺液は行爲前に射精管に向つて

分泌されてゐる（少量ではあるが）それにコーベル氏腺液も當然尿道内を中和させてゐることは明かだ。攝護腺中に少數ではあるが精蟲は存在してゐるのであつて、それが射精前に即ち中絶前に子宮腔部邊へ附着しないと證明出来ない。斯うした場合には無効になる譯である。

拔出法 腔外射出とも言ふのであつて、ドイツ等では、労働者間に盛行はれてゐると言ふ報告がある。これは前の方法と同様で、たゞ異なるのは、射精はするが、腔内でなくて射精の瞬間、拔出して腔外に射精しようと言ふのである。意志の力と、不満足感が女性側に起るのは當然であらう。元來精液は婦人に反應を起すと言ふことは生物學者間にも度々唱へられたことであつて、サヴェートの生物學者ネ・ミロフは次の様に言つてゐる。

「精液の化學的生産物が一部女性の肉體の中に腔壁を通じて吸収されて、それが血液に混入することは當然あり得るのである。過度の性交、數人の性交後、婦人は神經



病的現象を現し、性交後嘔吐を催すことさへある。だが適當なそれは、婦人の卵巢機能及び發育に必要な物質である。」と

又、或、性科學の研究者で、色々の資料を集めてゐる某氏は、サツク使用者、六年使用一名、十四年使用一名。十年使用一名、三年使用二名、一年使用一名の五名の統計を送つてくれたが、それに依れば、次のやうな結果を齎してゐる。即ち「サツク使用に依る婦人は、精液の吸収不可能のためオールド・ミスと同様の神經過敏症に陥る如くである。」と。尙ほ、此の點に關する研究は此位で科學的に何等の研究もなされてゐない状態であるから、決定的なことは言へないが、斯うした症狀を呈する場合があることを考慮に入れる必要がある。

射出遠慮法 最後の瞬間を遠慮して子宮から遠い、手前の方で射出しようと言ふのである。最も馬鹿々々しい事は言ふまでもない。精蟲は直接子宮に送り込まれるのではないが自動的な、アルカリ向上性を有してゐるとは前に述べたが、腔腔に射入され

た場合は、如何に遠慮しても精子は決して遠慮なんかするものでない。勿論結果は、失敗であり、何等効果はない。

直後の激動 性交直後、婦人は立あがつてダンスや躍ね上つたりして激しい動作をなす方法である。これも何等効果ないことは説明の要はあるまい。直後の激動は如何なる場合にも遠慮することが正しい。何故ならば、性交行為に依つて、全神經は一種の痙攣状態にあつて、筋肉の疲勞を増すからである。

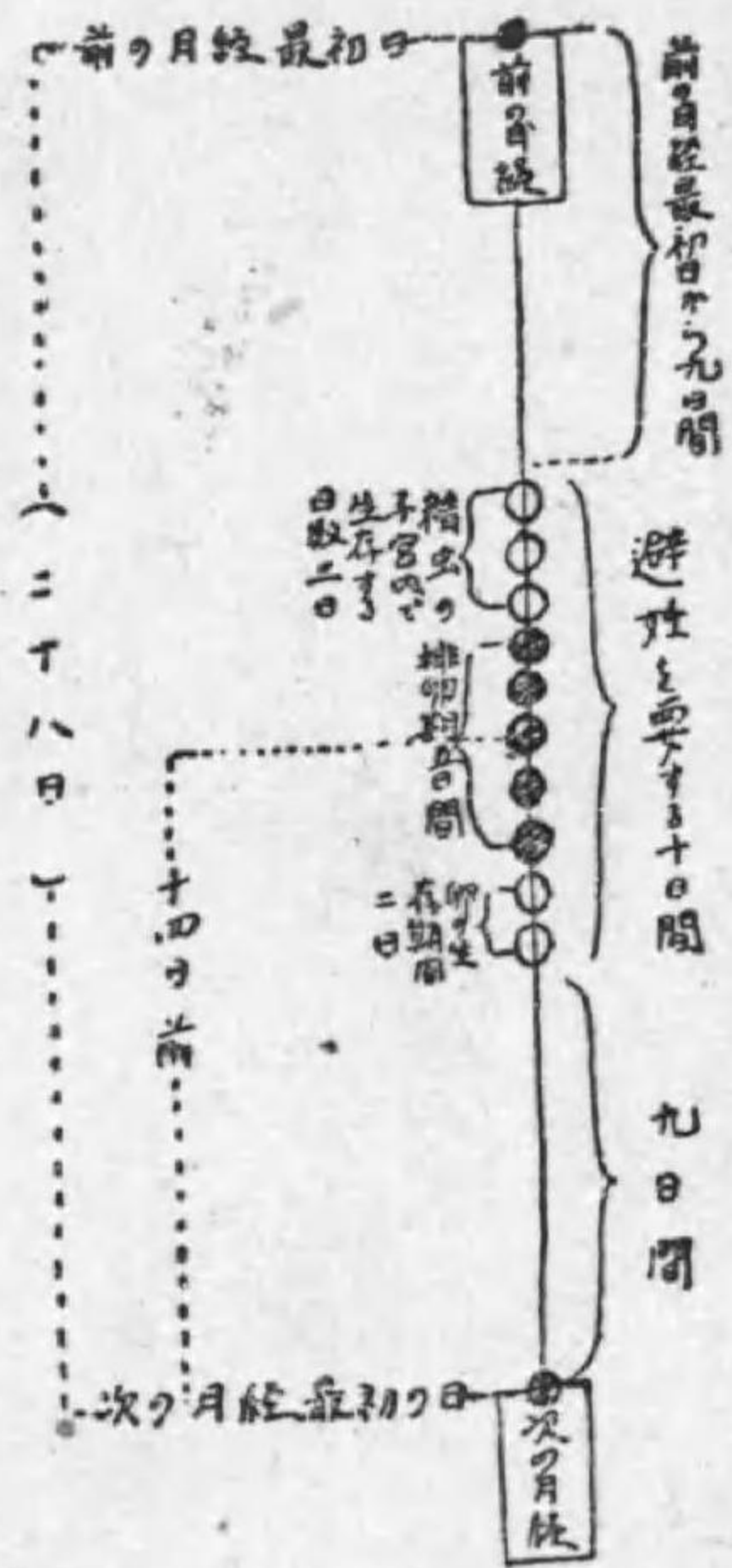
無意志法 何と言つてよいか一寸判らないが、先づ、婦人側は出来るだけ性感を意識しないやうな方法をとるのであつて、所謂、性感がないから妊娠しないと云ふ俗説から考へられたもので、出来るだけオルガズム（性感の最高潮のこと）を意識しないやうにするのだと言ふが、精蟲は、性感には無とんちやくに侵入して行く、勿論効果はない。

この他に、性交直後、コップに水を一ばいのむ方法だとか、斯うした方法が色々

あるであらう。然し、いずれにしても、我々の意志に依つて精蟲の侵入を不可能にすることは出来ない。前に、ブルヂョア婦人雜誌のことを述べたがその方法と言ふのは、拔出法であつて、ドイツの労働者間には相當の實行者があると言はれてゐる。前に言つた、射精前にも精蟲は腔内に侵入すると言つたが、それも決定的なものではなく、射精のやうに確實ではない。だから、ドイツ等の實行者は相當の効果をあげてゐると言はれてゐるが、この實行にあつては、一、意志を強く持つこと、二、女性側を充分満足せしめなければならぬ。と言ふことを考慮に入れて行ふべきである。

排卵期利用の方法 卵子が精子と結合、即ち受精した場合には黄體ホルモンに依つて月經は閉止するものであると言ふことを述べたのであるが、それでは排卵と同時に黄體細胞は出来るかと言ふに決してそうでなく、數日、三、四日頃にホルモンを分泌するので、排卵はいつあるか？ と言へば、それはなかく決定し難い。或學者は、

月經と月經の中間であると言ひ、或學者は月經直前だと言ひ、説は色々に分れてゐてそれではどれが正しいかとなると皆目判らない。前記の「無産者衛生必携」には排卵は月經と月經の中間五日間であるとの萩野博士の説をとつて、精蟲が女性生殖器内で



生存する日數が三日間とし、排卵後卵子の生存期間を二日として、都合中間の十日間を注意すれば避妊出来ると説明してゐる。然し、今更萩野博士の排卵説を持ち出すまでもなく、排卵は決

して中間五日と決つてゐない。それに一方では、次の様な説がある。

「排卵は月經の中間必ずしもあるとは限らない。身體の調子に依つて月經直後の場合もあるし、直前もある。それは、その時の神經とホルモンの關係にあるもので、月

経が定期的であるから排卵も定期的とは限らない。」

と言ふのである。一九一七年、欧州戦争の時、ジーゲルと言ふ人は、性交日の判つてゐる、然も規則的に月経のある婦人三〇〇人について調査した結果、月経が始まつて、第一日後六日間が總数の五三%の受胎率であつて、十日までは同數で、それから減少して四十%となり、十三日から十四日にかけて急速に減少し、廿二日目から次回月経の開始までには甚だ僅少となつた。而も尙、〇となることはなく、五%を保つてゐたと言ふ結果になつた。であるから、受胎率は月経後期に最も多く、月経中間期は多少減少し、月経前期に最も少くなつたのである。斯うした事實から言へば、「必携」の説は誤つてゐると言ふことが判るし、妊娠しない期間はほとんど無いと言つて差支ないのである。最近、ブルヂョア婦人雜誌は受胎カレンダー等を賣り出し、決定的な説もないのに盛に宣傳してゐるのは、彼等の商業政策の然らしめるので、斯かる都合な、偽瞞と徹底的に闘はねばならぬ。それは我等の科學に對する、闘ひでもあるか

らだ。

二、薬品に依る方法

薬品に依る避妊方法を述べるにあつて、その方法を三つに區別して述べることにする。

- 一、挿入薬
- 二、洗滌法
- 三、内服薬

である。

挿入薬 昔から、古今東西に、一番簡單な方法として薬物を腔内に挿入して避妊の目的を達しやうと考へたことは當然なことだ。生かすも殺すも薬は偉大な力を現すから、これを利用しやうとすることは當然である。

この書を書きなほしてゐた頃、新聞廣告に或婦人雜誌が、梅干に依る避妊法、てなインチキ廣告を出してゐたが筆者はそれを讀む暇がないので、その内容はよく判らな

いが恐らくは、これから述べやうとする「酸性」が原形質、即ち精蟲を破壊する力があるもので、梅干の酸を應用して避妊の目的を達しようとするのであらうと考へるが、兎に角、薬物を避妊に使用する場合には、次の條件を備へてゐなければならぬ。

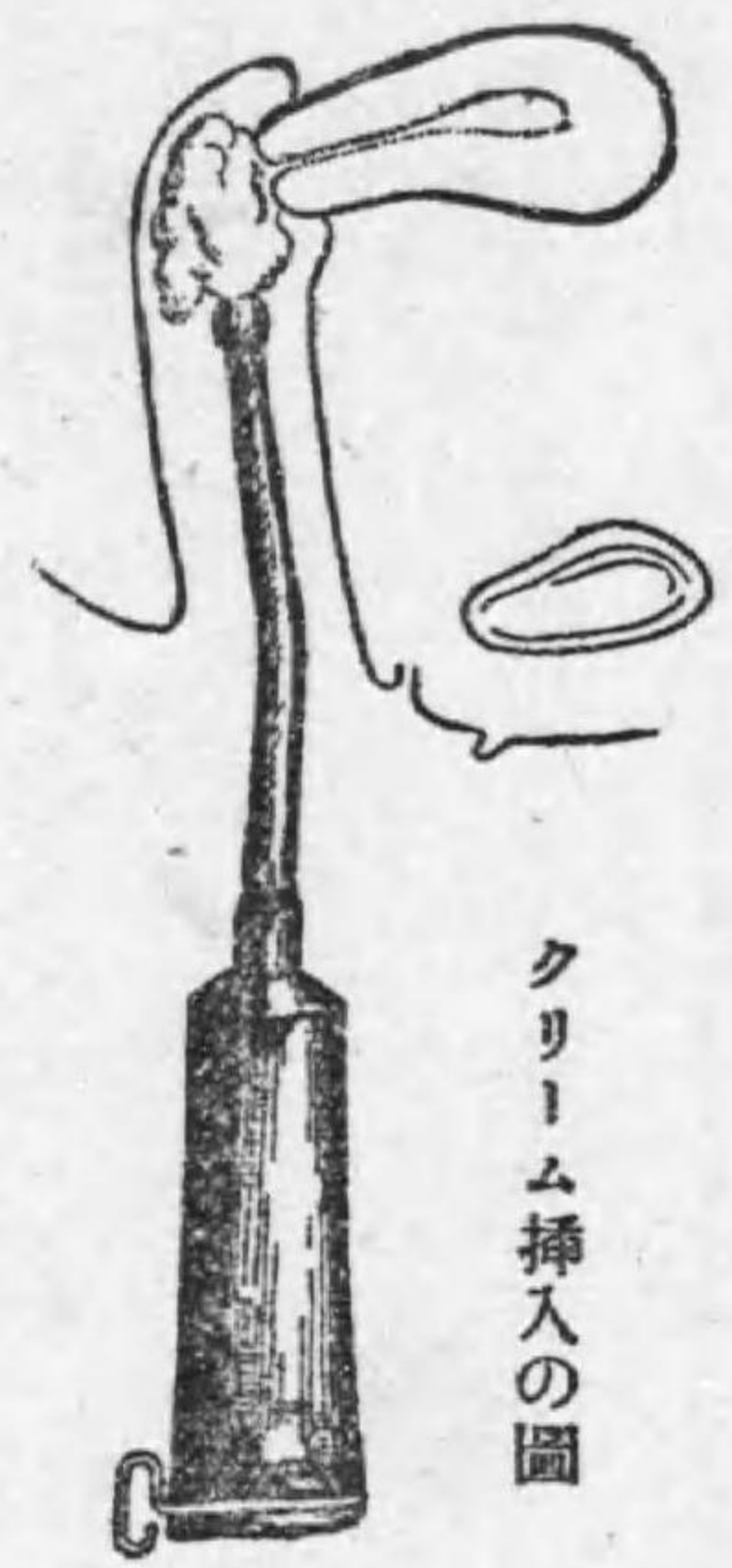
- 一、絶對身體に對し無害であること。
 - 一、使用が容易であつて、確實でなければならぬ。
 - 一、薬品が長時間置いてても變化しないこと。
 - 一、腔粘膜面全體に擴がり、惡臭あつてはならぬ。
- 以上の條件が伴へば薬品としては上等である。薬品の化學的成分等は、色々と檢べなければ有害なことがあるから、特に注意する必要がある。

挿入薬には、腔球、クリーム状、錠剤等があるが、使用には錠剤が最も便利であるが、クリーム状の薬劑のやうに腔全體に擴がるのが少いし、溶解するのが遅れるので完全に溶解するまで待たなければならぬ缺點がある。腔球は體温で溶けるもので

あるが薬劑ならば錠劑か、クリーム状が最も使用に適してゐるやうである。

挿入薬は、その効果をあげるには、その使用に注意することが必要であつて、薬物は出来るだけ腔奥深く挿入して、子宮腔部の邊に薬劑が溜るやうにすることは効果も著しい。錠劑ならば充分溶解してから性交に取かゝるやう注意する必要がある。最

クリーム挿入の圖



近まで脂肪性の腔球が薬店や、ブルヂョア相談所などで賣られてゐたが脂肪性の薬劑は、その主要薬が、脂肪に溶けないために微細な浮游粒子として存在し、避妊の目的を達しな

い事があり、脂肪臭を發して、又、着物、その他に附着して不潔にするばかりでなく粘膜を刺戟して炎症を起すやうなことがあるから、かゝる目的には不適である。次に使用する薬物の種類であるが、これは無毒で、腔壁から吸收しても何等害なく

出来るならば稠密な泡沫を發して腔腔全體に擴がるやうな藥品が都合もよいし効果もある。だから、それは殺精力が強いものでなければならぬ。一回の射精で二グラムから五グラムの精液が射出するので、その十分の一位で充分殺精が出来る位の力が必要である。で、以上の條件に適ふやうな藥品は何であるか。現在の藥品では色々があるが。

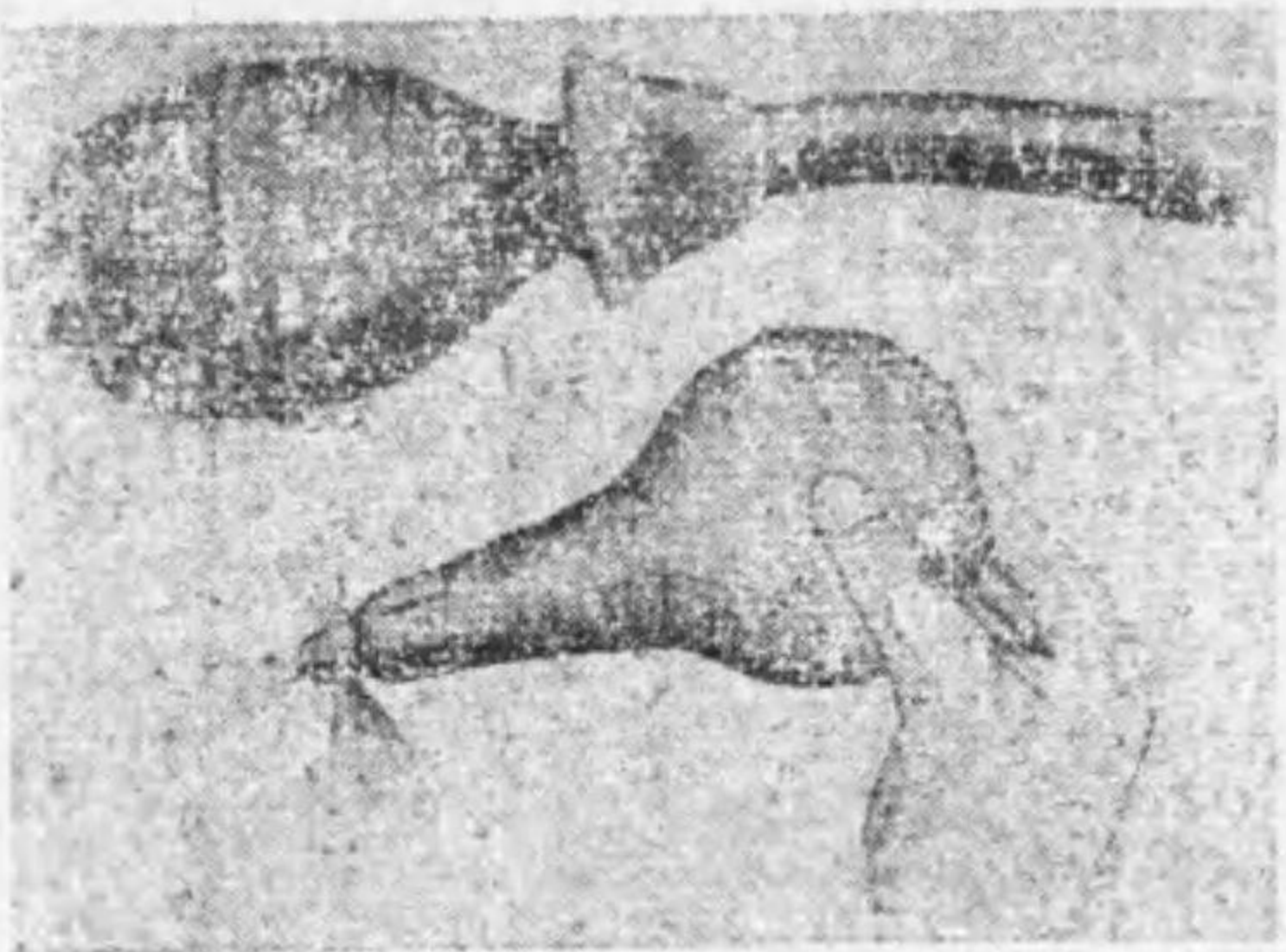
キニーネ キニーネは少量では効果が薄い。従來、キニーネ劑は避妊藥として最上のものでされてゐたが、研究の結果、〇・五グラムは一回料として必要である。特別吸収されても、さほど中毒を起すこともないが、適當に使用しないと効果がない。

酸類 これには醋酸、乳酸、酒石酸、その他色々あるが、殺精劑としては適當してゐる。それは多量に用ひても、それ程害がないし使ひ方に依つては相當の効果をあげることが出来るであらう。昔から食酢を綿花に浸して挿入し交接を爲して目的を達してゐる例は非常に多くあつて、費用も少なくてすむから都合がよい。ついでに、その方

欠

欠

管が四五尺ついで先に嘴がついたもので、ガラス器の中に薬液を入れて置いて先の嘴から、その薬液が出るやうになつてゐるので、洗滌の際は嘴を腔腔に差入れて



スポイト洗滌器

洗滌をなすものである。その他に、スポイトのものがある。手前の方に太いゴム球がついてゐて先にやゝ長い嘴があつて、それを腔腔に挿入して強くゴム球を握つて中の薬液を腔内に噴出せしめて洗滌すると言ふ譯である。然し、此スポイト洗滌器は一面簡單であるが、充分腔内を洗ふことが不可能であつて効果に於ても劣つてゐることは言ふまでもあるまい。

られてゐるやうであるが、避妊法が今日程研究されない以前にあつては、勿論、有効

であると考へられてゐた。然し、今日に於ては、勞多くして効少い方法であると断定されてゐる。それは、性交直後腔内の酸性は、精液に依つてアルカリに中和されてゐるし、子宮腔部は絶へずアリカリ性の粘液は分泌してゐるので、精蟲は射出と同時に子宮粘液中に附着すると言ふことは、あり得ることであつて、若し附着したならば、子宮粘液中に一寸した洗滌法ではなかく洗ひ流すことは不可能である。又、直接子宮に精液が射入するやうなことを論ずる人があるがそれは、子宮外口と、腔の關係を充分知らない人の言葉であつて、直接射入するやうなことはほとんどない。勿論、洗滌は無効だとは言はない。然し性交後の洗滌は、ほんの精液を洗ふだけの効果しかなく、それも上手に洗つたと思つてゐても、腔内は皺壁で伸縮自在であるから、皺壁に附着してゐないとも限らない。その證據には、病菌について言つても判るではないか、充分洗滌したから大丈夫と思つてゐると、感染してゐた例は決して少くない。精子の場合とはやゝ異なるが、如何に洗滌が考へる程効果のないものであるかゞ判る。

次に洗滌に依つて身體に對する影響であるが、これも決して見逃してはならぬ。度々の洗滌は、神経作用と肉體にも影響する。とは洗滌が避妊に絶對効果あると考へられてゐた頃から、言はれてゐた。最近になつて判つたことであるが、洗滌は、腔内の保護作用を破壊すると言ふことだ。腔内には前に述べたデーデルライン氏菌と言ふ様な有効細菌がつねに、腔内の保護をなしてゐるのであるがたび／＼の洗滌のために、それ等の力が少くなつて、病菌に感染したり白帶下が多くなつたり、子宮粘液中に悪い影響を與へたりすることがあると言はれてゐる。或醫師がこの洗滌に依つて避妊してゐる十二名についての結果は、七名は妊娠し、十名共に白帶下が多くなり、神経質となつた、と言つてゐる。勿論、この報告は、不完全かも知れないが、今後の研究すべき問題であると言はねばならぬ。

内服薬に依つて避妊する方法 ヨード劑を多く服用すれば妊娠しないと云ふので研究した結果、廿日鼠に沃土を加へて飼つた處、一時不妊になり、ヨードを抜いて與へ

れば又、妊娠すると言ふ現象が発見された。その他に揚皮を與へれば不妊となると言はれ、その成分にはサルチル酸が存在して斯くの如き作用を爲すものであると判つた。即ち、斯かる薬剤のため、卵巢内のグラーフヒ氏濾が成育しないために妊娠が阻止されるのである。

これを人間に應用する場合は充分の研究の結果でなければならぬし、その効果も確實でないから實際には應用出来ない。ほとんど不可能であらう。

次で内服薬について新聞廣告によくある所謂「月やく」薬について述べてみれば。

これ位、ばか／＼しいのではない。即ち、二三月、月経とゞかふりの方に効果があると言ふのであるから當然墮胎を意味してゐる。だが墮胎を起す位の効果ある薬品ならば、身體にも非常に有害であることは當然である。斯かるものは絶対服用することは禁じなければならぬ、勿論卵巢、子宮等の發育が不充分であつたり、その他の障碍の場合、ホルモン劑の注射薬は非常に効果もあるし、病的變化の月経閉止には効果は

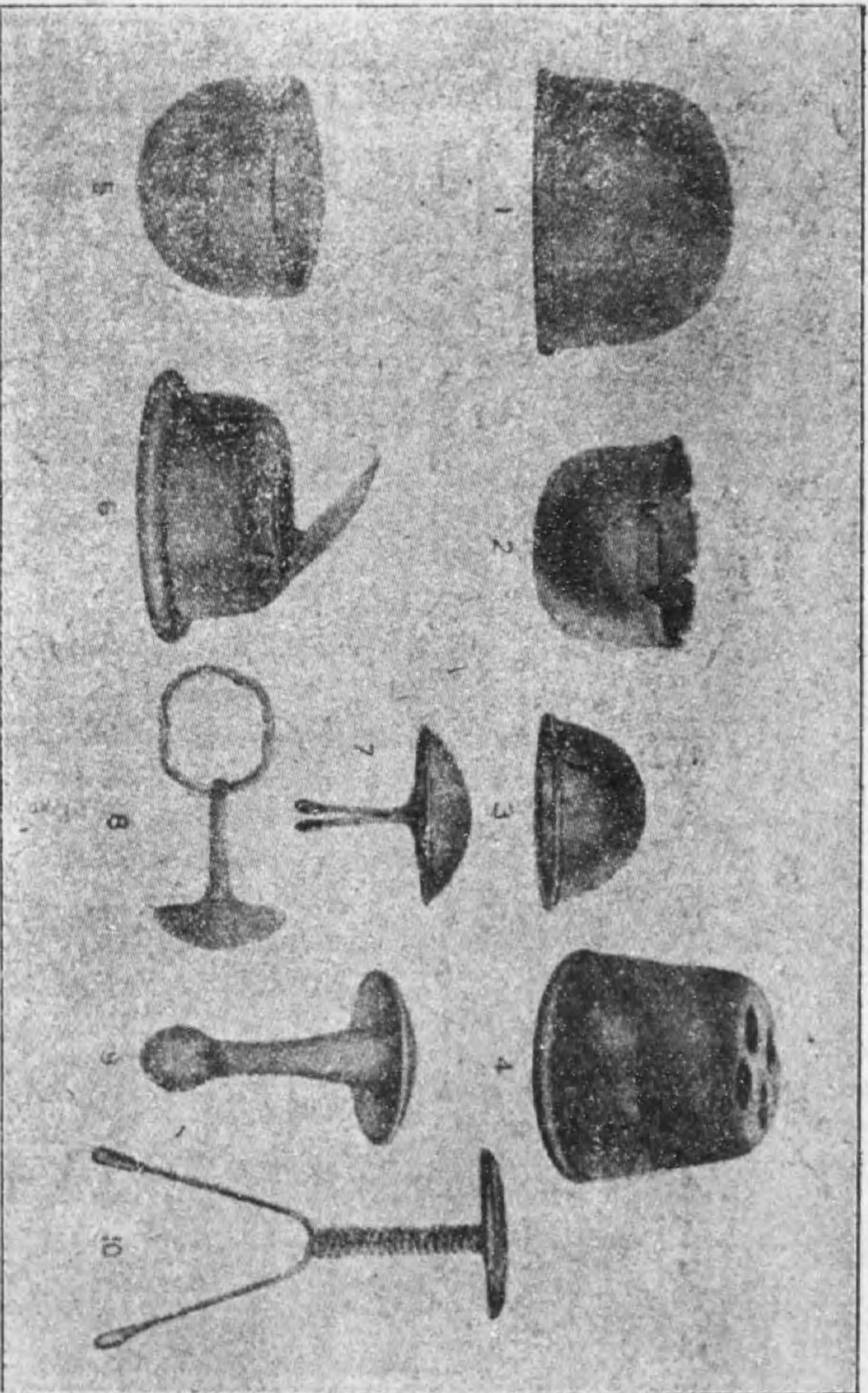
先づ第一である。

以上で薬品に依つて避妊をなすことについて述べたのであるが、勿論不充分であらうと考へる。より、くわしく知りたい人は無産者産兒制限同盟に加入して技術部員となつて研究することが必要だ。

三、器具を用ひての避妊法

自然を我々は征服することが出来る。勿論それは、ある程度までであるが、我々に都合のよいやうに自然を驅使出来るのだ。天空を飛行機でとべる。雷を使つて電燈が光る、だが資本主義社會では、それは凡て、我々の必要の爲めではなく、彼等に都合のよいやうに××に、××の機械に、使はれてゐる。自然の理法をブルヂョアは曲使してゐるのだ。

我々は必要な子供を生みたいと考へる。それも不可能だ。今や我々は資本主義と闘



凡て右書であるさされた避妊器具であつて効果も少い。1.セツキヤセツナ。2.金器
キヤセツナ。3.4.5.6.同様の器具。7.8.9.子宮ホムズ。10.避妊ピンの一種である。

ふ以外に自由を闘ひ取ることは出来ないことが判る。

性交は、生殖行動だとは何度も述べたことであるが、我々は、生殖ばかりの爲めに性行爲をなすものでない。衝動の満足と言ふことは主要な要因であらう。自然は衝動に依つて生殖行爲をなさしめるのだ。だが我々は衝動の満足を必要として生殖を必要としない場合に妊娠を避けることは正しいことであらねばならぬ。それは決して不自然でなく、自然を驅使することである。性交は快感と満足感を與へるのであつて、非常にデリケートな關係である。我々は、少しのデリケートな相互關係を破壊せらさずして性行爲をなすことを望むのであるが、これか述べようと思ふ器具を用ひて避妊をなす方法は、このデリケートさを失はしめるやうな結果になりはしないだらうかと考へるのであるが、そのデリケートとは何か？ それは如何なる快感であるかそれ等の關係を知り驅使することによつて、破壊することなく、より以上増さしめるのである。

器具については、一般に一番多く使用されてゐる器具、及び一番効果的な器具は十分にわしく述べる考へであるが、紙數に制限があつて、幾分不十分な處もあるかも知れぬがその點は他の機會に於て學ばれたい。

器具は、どんなものでも使ひ方が充分であれば効果も確實で、性交上の相互的デリケートさを失はしめることはない。又、使ひ方が悪ければ如何にすぐれた器具でも全然無効になるもので、その點を考慮に入れて讀んで頂きたい。

コンドーム これは男性側の使用する凡ゆる避妊器具の最上のもので、非常に古くから使はれてゐた様である。今日程、科學的に事物の考察がなされてゐられない昔から精液が何等かの妊娠に關係があつたことは判つていたであらうし、それを婦人側に與へなければ妊娠しないものである位は判つてたやうである。そのために、液を捕獲して婦人側に與へないやうにする方法が考へられたのは當然であつて、ゴム工業が今日程發達しなかつた昔は「薄い布」で作つてゐたらしい。それは色んな文献に現れて

ゐる。布は勿論、小さい孔があいてゐるので効果も少かつたし、その後、動物の粘膜等で作られるやうになつたが、工業の發達はゴムを作るやうになり、必然にゴム・コンドームが出来るやうになつたのである。コンドームと言ふのは所謂ルーデサツタのことで英國のコンデム博士が發表したため斯うした名前になつてゐるが、名前はどちらにしてもよい。それからコンドームの種類は、フィッシュスキム（魚の粘膜）と言ふやうなもの、ゴム・コンドームとがある。ゴム製のものにも、色々質の變つたものがある。最近、軍事化學が發達して、ゴムにも非常な進歩が現れた。無論、彼等は決して人類の幸福のために化學を發展させるのでなく、戦争、商品の販賣に都合よいやうに、即ち、その必要のために發達させることは必然であるが兎に角、ゴム製は、熱ゴムと言ふものを作り始めた。前は、薄製ゴムと言つた不完全なものであつたが、熱ゴム製のコンドームは丈夫で小さい目にみへない程の孔がほとんどない。市價のやういコンドームは、薄製ゴムが多い、それはよくみれば判るので薄製ゴムは光があつ

て粉を多く振りかけてあるに反し、熱ゴム製は少し硬度があつて、光が少い、粉も少い。我々が使用する場合は熱ゴム製を使ふことを奨める。

コンドームは非常に一般によく使はれてゐる。然し皆、感覚が悪いと言つてゐる。それは使用方法が悪い爲めで、それ程、感覚の悪いものではない筈である。元來、男性の陰莖は觸感は少いもので刺戟感が強いものであるから、それを適當に使へば、それ程不快なものでない。それに、植物性の物質は、粘膜面に對して一種の異物感と與へることは事實である、だから、動物質のフィッシュ スキンはその點幾分異物感が少い。

コンドームの使用法は、異物感を少くするために、コンドームの内外に粘液をぬれば感覚に影響することが少い。それには手近な唾液がよい、或人は油物がよいと云つてゐるが脂肪や油はゴムを傷めるもので、かへつて悪い結果を齎す。先づ陰莖に充分の唾液をぬり、(コンドームも一度洗つたものがよい)よく内外に唾液をぬつたコンド

ームを靜かに被せるのである。コンドームを唾液にぬらす場合は、一度、口に入れて、ぬらせば全體にぬらされて、被せる場合にも簡單でよい。大抵、コンドームは、輪形に巻いてあるが、先に液精の溜の幾分の餘りがあるから、この餘つた部分をつまんで靜かに被せるのである。此の場合、空氣が這入つてはならない。若し空氣があれば感覚が悪いばかりでなく、破れ易いからである。それから被せる時は、出来るだけ根本まで、陰毛をよく排けて被せなければ、性交後抜き取る場合に精液が腔内にもれるおそれがある。又、包皮の長い人は充分に反轉せしめて被せないと破れ易いばかりでなく、感覚が悪い。

コンドームには少しの孔が(目にみへない位の孔でも)あつてはいけない。それは水で洗ふ時、水を入れて検べて置くべきである。で、コンドームの保存であるが、薄製ゴムのものは、三四ヶ月、も置けば、もろく、破れ易くなる。又ゴムは紫外線と空氣には非常に弱いから、黒色のビンの中に、寒暑の甚だしくない場所に保存して置く

ことが一番よい。又、水の中に浸しておいても差支ない、熱ゴム製であれば五六ヶ月は先づ大丈夫である。それに熱ゴム製は、數回に亘つて使へる。一度使つたならば、水で洗つて（湯ではいけない）新聞紙の間等にはさんで置けば自然にかわくものだ。それに精液は水にはすぐ溶けるから非常に簡単に洗へる。

コンドームは花柳病の豫防には最上のもので、花柳病を夫婦が持つてゐる場合は、豫防薬と併用して使ふ可きである。

フィッシュ スキンに就て一寸述べておくが、これは、ほとんど使用に耐へない。弱くて破れや易いし、使用も面倒である。

コンドームは上手に使へば避妊法としては最も確實である、だが、一つの缺陷は、前にも述べたやうに精液が婦人に吸収されない結果の弊害である。それに幾分の不快等を覺悟せねばならぬ。筆者は、前に性交のデリケートの關係を破壊することについて言つたが幾分の不快は忍ぶとしても、今日尙、明確な、證明はないが精液の腔内に

射入されない事の不快と、結果の生理的影響は、今後の研究と共に、考慮に入れるべきであらう。

つめ綿、つめ紙等 藥物避妊の中に、筆者は食酢と綿花の避妊法を述べて置いた。

だがそれは酸の効果を説いたものであつて、つめ綿と言ふのは、科學的知識のない人達が、精液が子宮に直接射入するから妊娠するのだと言ふ考へを以て行つてゐた結果の方法で、生綿を腔奥に挿入して置くのである。又、最近に脱脂綿を挿入する人もある。脱脂綿のみを挿入することは勿論、何等効果ないことは精蟲の獨自的活動を述べ置いたから判かるであらう。で生綿を腔奥へ挿入すればどうであるかを言へば、生綿は他の如何なる細菌も通さないから精蟲も通さない。一寸考へるとなか／＼うまい避妊法のやうに考へられるが決して確實な方法ではない。何故ならば、精蟲は、それ等の障礙物があつても、又、生綿が決して一定の場所へ、即ち子宮外口へ落つてゐるものでないから、どん／＼突入してしまふ。

つめ紙も、その通りである。勞多くして効果ない方法である。

子宮帽 精蟲が子宮へ進入して輸卵管内で受精することは判つてゐるであらうが、兎に角、精蟲を子宮へ進ませないやうな方法を講じることは、つめ紙やつめ綿等で考へられてゐたが、それが、性行為動作に際しても決して外れない、又、一分のすきもないやうな器具ならば大丈夫だと言ふので、子宮の頭へ帽子をかぶせて、精蟲の進入を防ぐことを考へた。それは子宮帽と言はれてゐるもので、種類も又非常に多い。ゴムで作つたもの、セルロイドで作つたもの、金屬で作つたもの、獸類の粘膜で作つたもの、等々。そのうちで一番多く用ひられ、効果的に言つてよいものはゴムで作られたものであらう。他のものは使用も困難で、効果も少いからゴム製の子宮帽について述べる。

ゴム製のものでも種類があつて、プロレース、ミズバ、チエーク、等々で、最も使はれてゐるのは、プロレース型であらう。次にミズバ等も使はれてゐるが、代表的な

ものはどうしてもプロレースだから、それについて使用法、その他を述べる。

子宮帽使用の缺點は、子宮の大きさを知らなければならぬこと、その挿入がやや困難な點である。だが一度相談所に於て計つてもらふこと、使用法を教授しても



らうことに依つて、割合に簡単に使用出来るもので、たゞ問題は、この器具が、いまだ日本のゴム工業に一度も作られたことがない爲め、なか／＼手に入難い。又、日本に於ては、その相談所がない爲め數種のプロレースがないことだ。プロレースは良質のものを選ばねばならないと共に、形も充分考へなければならぬ。

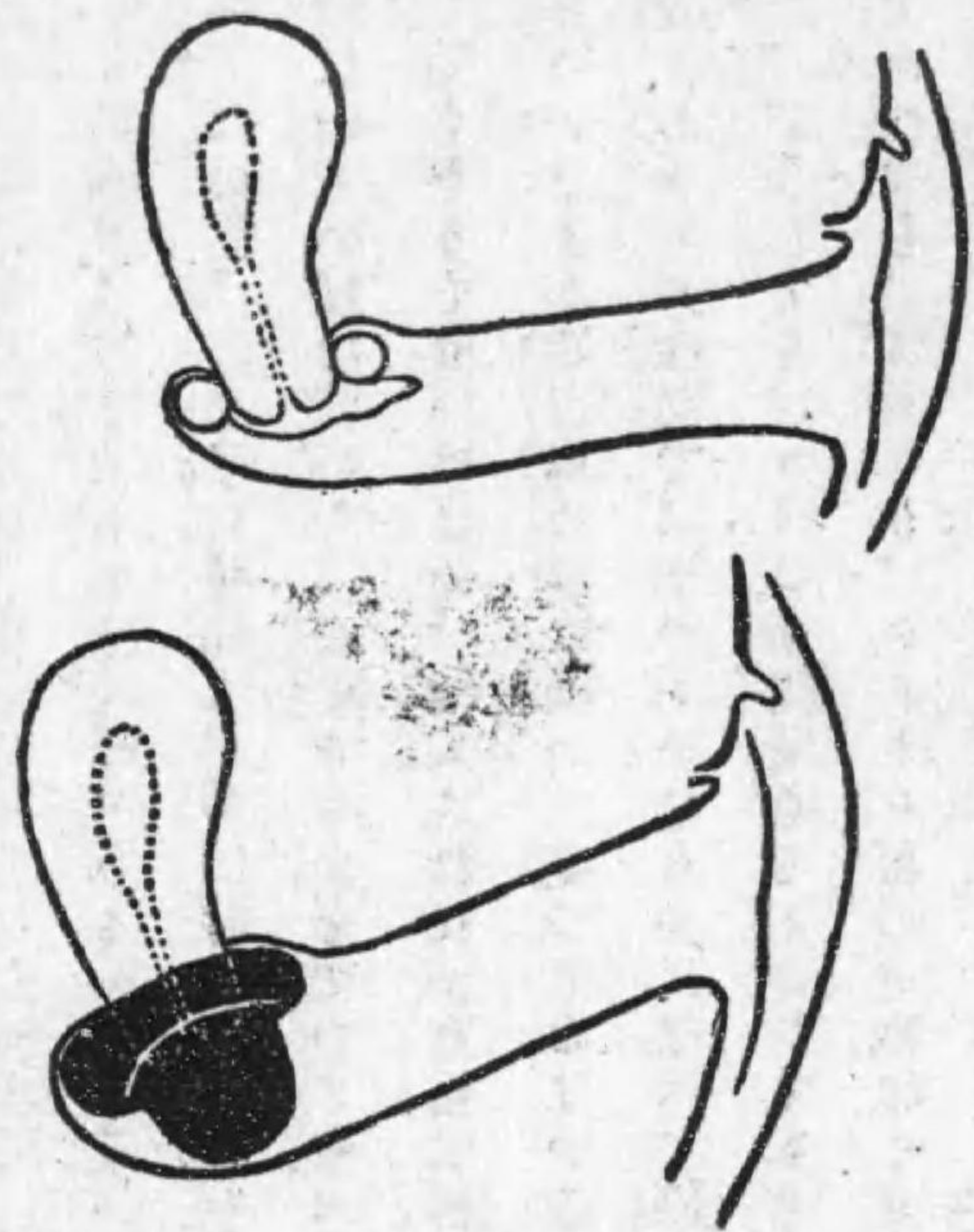
形 形は縁が空氣入りのやゝ硬いものでなければならぬ。ドームは、やはらかくて、ハネ返るものでなければならぬ。そしてドーム(山)は出来るだけ高いのがよい。即ち一寸三分位の深さが先づ適當であらう。縁は、その個人に依るもので、一度お

産した人で一寸一分位、未産の人で八分位であらう。然し、それも決定的でなく、その個人の子宮の大きさに適應せしめなければならぬ。一〇一頁の圖に見るやうな形はプロレースとしては最もよい形である。

挿入準備 プロレース・キャツはゴムであるから、二年も三年も経つたものはサツクの場合と同じく切目や孔があるから注意して引伸して検べる必要がある。大丈夫と判つたら縁とドームとのつぎ目をよく検べてみる。こゝは挿入して置いて不潔になり易いから切れ目があるのは使用に耐へない。いよく大丈夫と判つたら、リゾール水か硼酸水の中に三十分も浸しておくのだ。それは消毒しなければ子宮に直接細菌が這入るやうなことがあるからだ。それがすんだら、綺麗な布で水分をとつていよく挿入に取かゝるのである。尙ほ、プロレースにはヒモがついてゐるのがあつたが、こんなものは必要でないから切り取つた方がよい。

挿入 指先を石鹼でよく洗つて、先づ自分の子宮の在りかを検べる、だいたい、子

宮が判つたら、子宮帽を山の方をひしやいで、縁を両方からつまんで肛門の方、即ち



子宮帽の正しくかぶさつた圖。上圖は正常にかぶさつた時の想像圖で下圖はその位置を示したも

下側をすべらしながら挿入してゆく、子宮に當つたら縁を子宮頭にあて、指先きで段々と押込むやうにする。子宮帽がよく這入つたら大抵帽子の半分位入るのであるが、帽子の山即ちドームは靜かに、その山がふくれる、これは子宮に吸ひつくやうな恰好になるのだ。だが、これは一回や二

の場合、最も挿入に便利な身體の恰好は、我々が便所に行つたやうな、しやがんだ恰好が一番適當してゐる。自分の子宮の位地を充分に知ると言ふことは、如何なる場合にも必要だ。腔に示指を挿入してみるとやゝ硬い肉の塊が觸るだらう。これが子宮腔部なのだ。この子宮腔部は、前に言つた藥品を挿入する場合に於ても是非知つて置かないといけないから、石鹼で指先を洗つて檢べて置く可きである。

動くやうではいけない。挿入された子宮帽は挿入が不味かつたり、形が小さいか大きいかでよく性行爲の場に動いて被つてゐないことがある。これは効果ないことも勿論であるが男性側ではやつかないものになる。適當な大きさ、上手な挿入、これは一度、どうしてもプロBC相談所等で相談してもらふ必要がある。若し動いてゐるやうであつたら、洗滌なり、クリーム状の藥物なりで消毒せねば間に合はぬ。凡て練習だ。何度も練習せねばとても充分な挿入は困難なのだ。

取り出す時 取り出すことは簡単だ。上手に被つてゐる時はよく吸ひ附いてゐるか

ら無暗に引張り出してはいけない。先づ縁に示指で靜かに一方だけを押せば大抵抜けるもので、山をつまんで引張つても益々吸ひ附くばかりで抜けるものでない。斯うして抜けたら、水の中に入れるのである。數時間入れて置けば尙ほよいが、綺麗に洗つてすぐ出してもよい。硼酸水カリゾール水の中にしばらく浸しておけば非常に完全に消毒が出来る。

挿入時間は何時間か 挿入するのは性交前にかまはないが取出す時の時間は使用後何時間でよいか、それは特に大切なことだ。腔内は酸性であると言つた。で、五グラム位の精液ならば十時間腔内にあれば、ほとんど受胎力はない。で、特に腔内がアルカリ性の人がよくあるから、二十四時間入れて置けば絶対大丈夫である。一週間挿入して置いても平氣である人がある位だから、そう急がないでも、それ程有害ではない、外國の例では月經の終る時から次の月經まで挿入してゐる人があると言ふことだ、だから上手に被つてゐることが判つたら一週間位、そのまゝでかまはない。オラ

ンダは政府が産兒制限相談所を奨めてゐる。で、ある工場に相談所があつて工場の歸りに、一寸相談所に寄つて挿入してもらひ、翌朝、一寸寄つて抜いてもらつてゐると言ふことである。

安心が出来なければ 兎に角一度は相談所に行つて子宮の状態をよく調べてもらはねばならない。例は、何度もお産した人などは子宮が腔部大半まで裂けてゐるのがあつた。こんな子宮には勿論効果はない。で、その他に、被つてゐても精蟲が侵入するやうな危険があると思つたら、坐薬を使つて補へばよい、即ち、被せてからクリーム状薬でもよし、錠剤でもよし、挿入しておくのだ、これなら絶対大丈夫と言へるであらう。

子宮帽の良、否 これは一、挿入が困難である點が悪く、腔内に悪影響がない點と、器具では、他の器具と違つて割合に小さく、性交のデリケートさを失はない點は非常にいいと言へるであらう。たゞ日本で完全なものが出来るか、どうか、ほとんど外國の輸入物ばかりだから判らないが、高價な點が缺點である。

ダッチ・ベツサリー 最近ダッチ・ベツサリーと謂ふ避妊器具が新聞廣告等でよく見受ける。又、色々な場所でも賣り出されて居る。ところで、それを高い金を出して買つてみると意外に使ひ方がむづかしくて皆失望する。うまく使用出来たと思つて居ると時に失敗して妊娠してしまつたと言ふことを聞くのである。だから皆、ダッチ・ベツサリーなんか駄目だと言つた考を持つやうになつたり、それがため、段々と使用する人がなくなると言ふ始末である。然しこれは決してダッチ・ベツサリーが悪いわけでもない、ダッチ・ベツサリーが全然避妊に効果がないためでなく、ベツサリーの眞當の使ひ方が判つてゐないためである。外國等では皆この使ひ方が上手だから、確實に効果をあげて居るのである。だから日本だけが下手な譯はない。

勿論、日本に流行して來たのはほんの二三年來で、これを眞面目に使つてゐる人が非常に少ないのと、始めベツサリーを賣り出した人等が、たゞ賣りさへすればよいと言つたブルジョア商人だつたから、その使ひ方も、いい加減に教へてゐたからである。

我々の無産者産兒制限同盟（プロBC）では、そんないい加減な方法ではいけない、眞當のプロレタリアの日常必要な器具としていつでも使つて喜ばれなければならぬと考へて、此處に、正しいダッチ・ペツサリーの使ひ方を知らせて、大衆的批判に訴へたいと思つて、ゐる。

◇ダッチ・ペツサリーとはどんな物か？

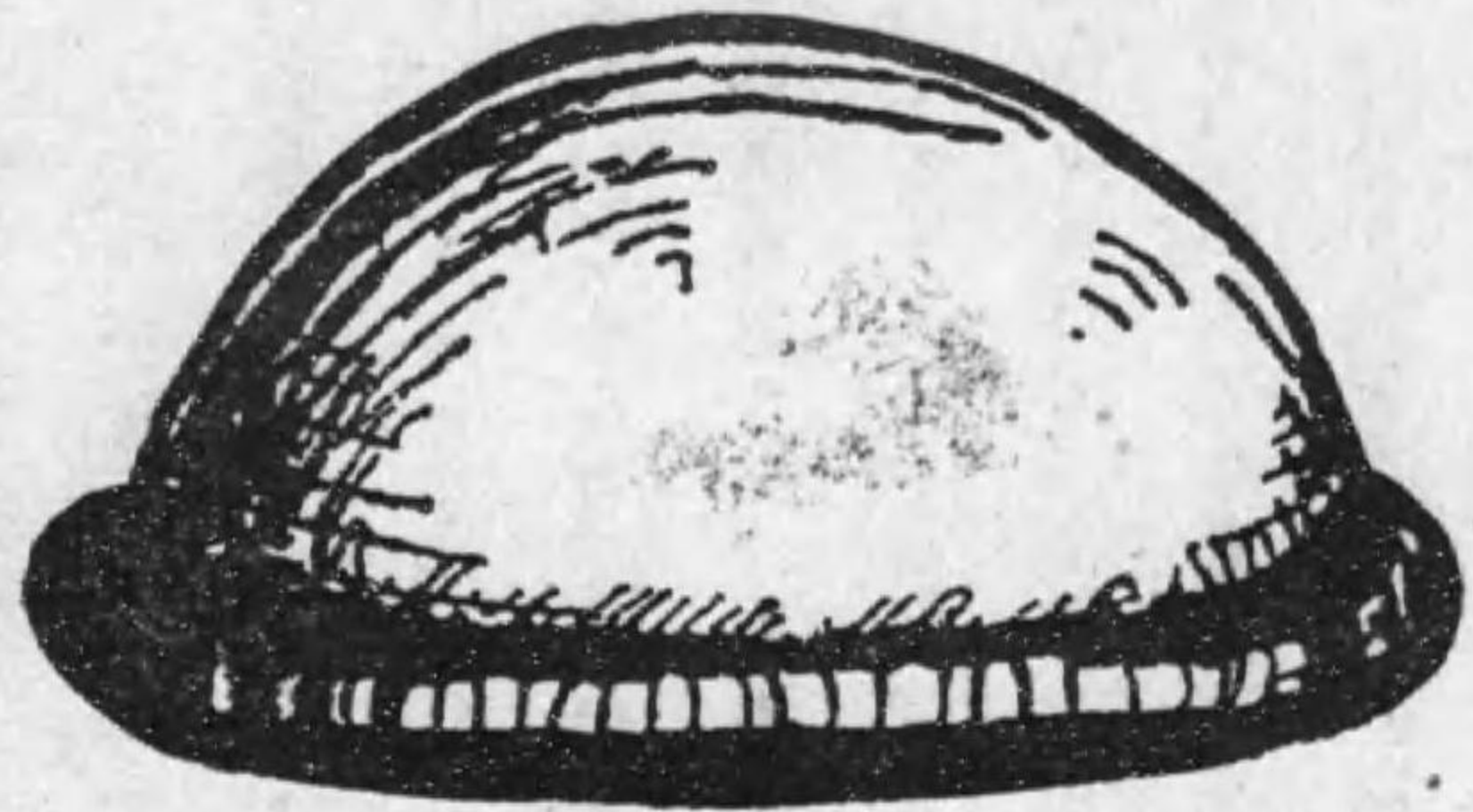
ダッチ・ペツサリーとは、何だか外國の物のやうな氣がするが、決して難しい品物でなく、實物を見ると「何だこんな物か！」と言ふ位、簡単な物で、たゞ球を半分に切つたやうな形の物で、たゞ端に硬いパネが這入つて、曲つてもハネ返すやうに出来てゐる。（第一〇九頁を見よ）

それでこのダッチ・ペツサリーとはどんなことかと謂ふと、ダッチと言ふのはオランダと言ふことである。ペツサリーと謂ふのは婦人の腔の子宮に男性の精蟲が這入ら

ないやうに障碍する物と言ふ意味で、簡単に言ふならば「オランダ避妊器具」と言ふやうな意味である。日本では、ダッチ・ペツサリーと謂はれて居るが英國等では「オランダキャップ」と呼んで居る。醫者の間ではメンシंगा氏型ペツサリーと謂はれて居る。要するに名前は何でも同じで、從來、ダッチ・ペツサリーと謂はれて來てゐるので、ダッチ・ペツサリーと呼んで差支へない。

どんなダッチ・ペツサリーが良いか？ 最近になつてこのダッチ・ペツサリーが、あちらこちらに製造所が出て、色々な名前で賣られて居る。で、どちらにしても使つて完全に避妊出来る物でなければならぬがその品物に依つて悪い物や良い物がある。その選定はプロB

(大物實)ーリサツベチツダ



避妊の方法

C 技術部に指定して使ふことであるが、必要でもあらうから我々素人がみて、どれがよいか悪いかを述べてみる。

型の大きさについて 如何に良質のダッチ・ベツサリーにしても、この型が小さく
ては何にもならない。又、餘り大きいのも勿論いけない。日本のブルヂョア器具屋が
賣り出してゐるのは、六十ミリメートル位が一番大きくて、四十ミリメートル位の
小さいのもあるが、六十ミリメートル以下の物は皆駄目である。日本の婦人には、最
底六十ミリメートル（二寸位）から、七十、乃至七十五ミリメートル（二寸五分位）
が適當とされてゐる。七十五ミリメートルと言へば、湯のみ茶碗のちよつと大きい位
の型で、始めてみる人等は皆、ビツクリする人があるが、あとから、（ベツサリー挿入
法）使用方法を述べるから、それを讀めば、こんな大きな物でも何でもなく使用出來
る、と言ふことが判るのである。それにこんな大きな物は、素人には一寸使用し難い
ので、どうしても一度技術家に、その使用法を教へてもらはねばならない。然しこ

の項を初めから終りまで精讀すれば、大抵使用出來るやうに詳しく書いたつもりで
ある。

それでも出來得るならば一度プロBCの相談所で、よく教はつてからなら尙更、大
丈夫である。で、始めての人には、六十ミリメートル（二寸強）位のものを使用して
段々、大きな物を使用するやうにするのである。段々と言つても、大きさは制限があ
る。或人には六十五ミリメートルがよくても、或人には七十ミリメートルがよい人も
あると言つた具合で、此の適當の大きさが問題である。で、段々大きな物と言つたの
は、自分に適した大きさの物を段々使用する様にする事なのである。それから、こ
の大きさに就いては、アメリカ等では、とても大きな、百ミリ（三寸三分位）もある
物を平氣で使用してゐるが、日本人には向かない。日本の婦人で最大の物を使つたと
しても七十八ミリから九十二ミリ位である。然し、そんな大きな物は實際にはほとん
ど使はれてゐないのである。

△△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
 ダッチ・ペツサリーは何時出来たか
 ダッチ・ペツサリーは、一八八一年（今から
 十二年前）フンスブルグの醫師、メンシंगाと言ふ人が考へ出したもので、始めは、
 子宮の位置が悪いのを治す爲めに用ひたのが改良されて避妊器具となつたのである。
 メンシंगा氏が之を發表してからは、非常に好評を博したのである。先づオランダに
 推奨する人が出来て、此處で盛に使用され、次に英國に擴がり、米國に渡つたのであ
 る。英國では、ノーマン・ヘア博士が推奨する様になり、デンマークではロインバッ
 ハ博士が推奨し、米國ではクーパー醫師等が、このダッチ・ペツサリーの熱心な推奨
 者達である。斯うした熱心な推奨者があるかと思へば、それに反對する人達もある。
 その代表的な人に、マリー・ストープス博士等があるが、此の人はたゞ婦人の立場か
 ら、自分が婦人である關係上生理的に有害であると言つて反對してゐる。
 若しさうであるなら私達は、それは、大いに研究すべき問題であると考へる。
 選妊にペツサリーがどうして有効か
 それではダッチ・ペツサリーが何故に選妊に

有効であるか？ 前に言つた通り、男性の精蟲が子宮に向つて進んで来るのを防いで
 女性の卵子と結合しないやうに妨礙するので先づ、男性の精蟲のある精液は交接に依
 つて腔腔にそゝがれるのであるが、それから、精蟲は非常な勢で子宮へ向つて進ん
 で来るのである。前にも述べたやうに何せ、男性が一回射精に依つて二百萬から二億
 以上と言ふ驚くべき数の精蟲を腔腔にそゝるのであるから、よほど上手に防いだと思
 つても完全でない場合がある。

要するにダッチ・ペツサリーは、子宮と、腔に一枚のゴムの膜をこしらへて精蟲が
 子宮の方へ行くのを通行止めをやることなのである。然し、通行止めも何百萬、何千
 萬、何億と行進する精蟲のデモンストレーションであるから、下手な通行止めでは、ど
 ん／＼行進を續けるのであるから、労働者がデモをやるやうな風にはゆかない。警官
 の阻止位では數千萬の×××××は喰ひ止めることが出来ないと同様である。最も組
 織的に、最も完全な方法で喰ひ止める事が必要である。それには、一分の隙もあつて

はならないのである。それは完全な使用法以外にないのである。

ダッチ・ペッサリーの使用法準備 始めて使用する場合は、出来ればプロBC相談所で教へを受ける事に越したことはないのであるが、我々の組織が相談所を作るだけのびてゐない場合は、我々自身で研究して使用する以外に方法はないのである。アメリカの進歩したブルヂョア共の相談所では、使用法がよく判るまで五回も六回も相談所を訪ねて完全を期するさうであるがブルヂョアの相談所を訪ねる程の経済的な、餘裕がない人は、しかたがないから自分でおぼへてやるより外に方法はない。

先づ大きさであるが、始め六十ミリから七十ミリ位のを求めて使用してみる。その前に、自分の生殖器を充分に知る必要がある。膣口から、人示指を入れて見て、奥の方に、肉の硬い物が觸れるか如何かを調べる。若し、この塊りが觸れたら子宮である事を知るのである。これは前の子宮帽の項にも述べた筈だ。此の場合、便所に行つた時のやうな恰好すれば一番觸れ易いのである。

次に仰向きになつて、やはり示指を挿入してみる。そうして、その深さを測り、よく觸れる様ならば、少し大きな七十ミリ位の物を使ふのである。そうでない人、即ち子宮外口のまわりを自由に觸れる位の人なら、六十ミリから、六十五ミリ位の物を使ふのである。

又、數回お産をした方は、それより大きいのがよいやうである。然し、膣の中はのびちとみが自由で、少し位の大小は、何とか融通出来るものである。

以上のやうな準備が出来たら、ペッサリーを一度石鹼で洗ふことである。共に指も洗ふのである。外國では、薬液の中に入れて消毒するやうに奨めてゐるが、それには及ばない。何故ならば、梅毒とか淋病とかの菌が附着してゐない限り、大抵は、膣内の分泌物で消毒されるからである。

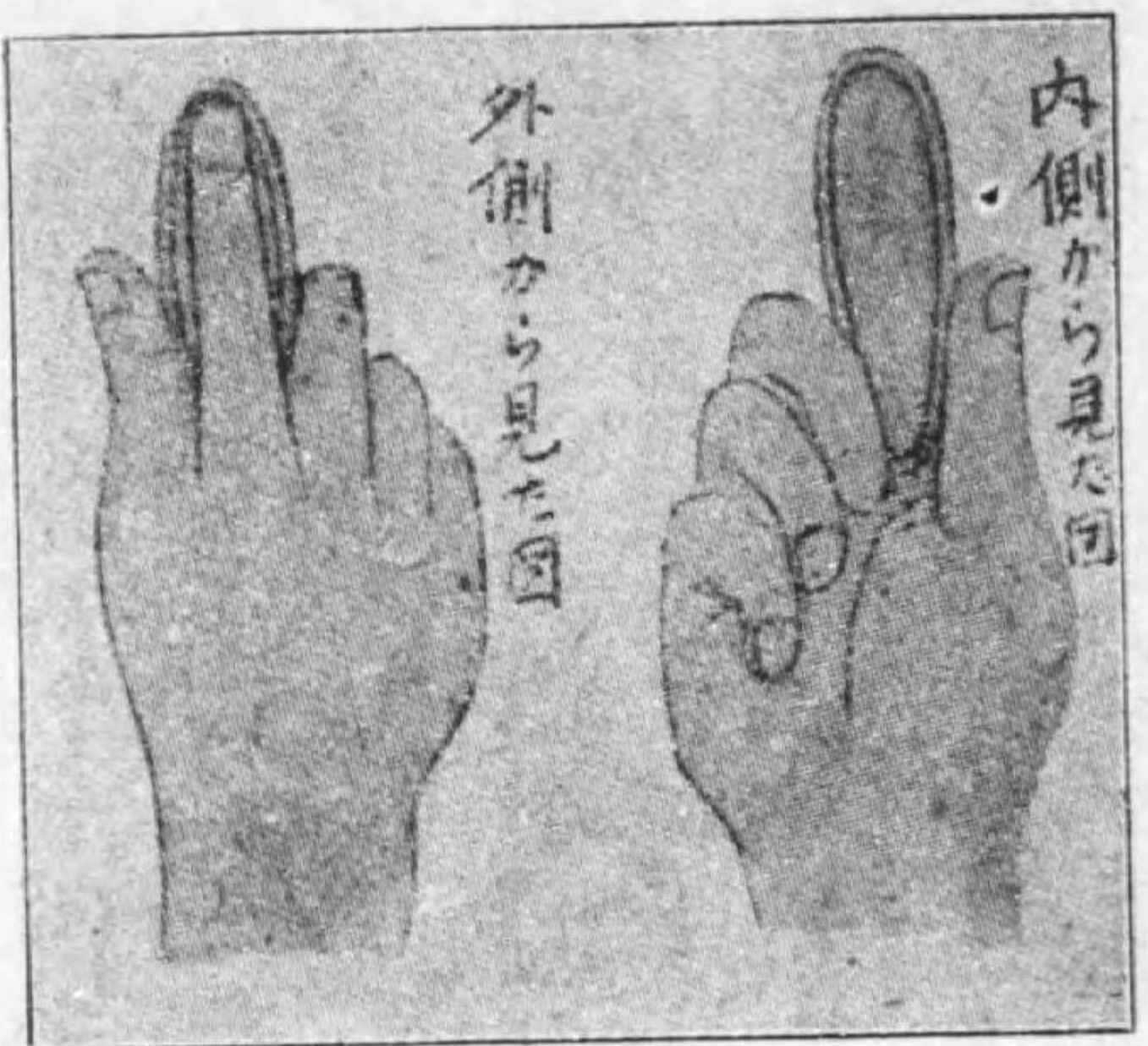
以上の準備が出来たら、次にペッサリーをよく調べてみよ。縁の處が少しでもパネが露出してはいないかどうか、それからパネを兩方から合せるやうに摘んでみて、充

分にハネ返す力があるかどうか、又、ゴム膜に目に見えないやうな小さい孔があいてはゐないか、それには、水を入れてみれば判るのである。若しも水が滴になつて外へ出る場合は勿論駄目である。

始めてダッチ・ベツサリーを使用する人は兎に角失敗し易いので、次のやうな方法を採る必要がある。脱脂綿一にぎり、食酢コップに四分の一位、そしてコップ一ぱいの水に四分の一の酢を入れて薄めるのである。それから脱脂綿をその中に入れて、か

るくしぼる。その他に、ダッチ・ベツサリーに薬をぬる方法もあるが、プロレタリアには、それ等の薬さへ使用出来兼ねるから、萬一の失敗した時の事を考へて、以上の脱脂綿を使用する事にする。かろくしぼつた脱脂綿を腔内に挿入する。出来るだけ奥の方に子宮頭の觸れるあたりを適當とする。その場合、仰向きなれば尙よいのであるが、面倒だつたら、便所に入つた時の恰好でもよいのである。

△△△△△△△△
ベツサリー挿入 準備が出来たら、次にベツサリーを挿入するのである。(上圖を見よ)



即ち、ベツサリーは圖に示す通り、右の手の拇指と曲げた中指とで両側からつまんで、示指は伸ばしたまゝ縁輪の先端を中側から押す案配にする。この場合、ベツサリーは細長くなつて、指一本か二本位の大きさになる。そこで示指に支へられたまゝ、指と共に腔口から奥の方へ挿入されるのである。此の場合、自然に掌面は上を向いてゐる。つまんだ両側の縁は水平に二本並んでゐる譯になる。従に並んでは駄目である。挿入する時、腔口

が開かない場合は、左手の拇指と示指で腔口を押開けるやうにすれば餘程這入り易く

避妊の方法

なる。
 示指にさへられたペッサリーの先は、腔口から下へ向つて、即ち肛門の方へ向つて押込んでゆくのである。決して腹の方、即ち上の方へ向けてはならない。腹の方へ向けると、ペッサリーの先は、子宮を押やるやうになるからくれぐれも注意が必要である。

斯うして挿入されたペッサリーは、拇指と中指に邪魔されて外部に三分の一位のこる。即ち全部這入らない譯である。で、此處で静かにつまんだ手を放さなければならぬ。その場合、外に出てゐるペッサリーの先を左の手で押さへて置く事、押さへないとバネがとび出すことがあるから、静かに押へてゐる。

それから、右の示指だけで先の縁を押して段々奥深く押込んでゆくのである。若し指が短くてそれが出来ないやうな人は、縁の輪を兩側からつまんで細長くしながら押込むと這入る。兎に角どん／＼遠慮なく押込む事である。それに依つて腔やその他に

傷がつくやうなことはほとんどない。心配せず充分に押込む。勿論、腹の中に這入り込むこともない。その場合、子宮に痛みを感じる時は挿入が違つてゐる時であるから、氣をつけなければならぬ。即ち、ペッサリーの先が這入るのは子宮頭を越えて向側の後腔穹窿部と言ふ広い場所であるから、樂に這入る筈である。さてそこまでペッサリーが這入つたならばもう外部にはペッサリーは見へない譯である。全部腔の中に這入つてゐるのであるから、いよ／＼最後の仕事に取り掛かる。全部這入るまでは色々心配が伴つたのが、これまで終ればもう安心してやれる譯であるが、これからが一番注意しなければならぬ、又一番難しい動作なのである。

全部這入つたペッサリーは、一番出口の方、即ち、腔口に近い縁の始末をつけなければならぬ。つまり、入口に近い縁を示指で静かに上の方へ向つて押上げる。上と言ふと、お臍に向つて押上げる譯である。それにこの押上げ方がうまくゆかないと、男性の陰莖が挿入出来なくなるばかりでなく、婦人の方も、とても具合が悪いので

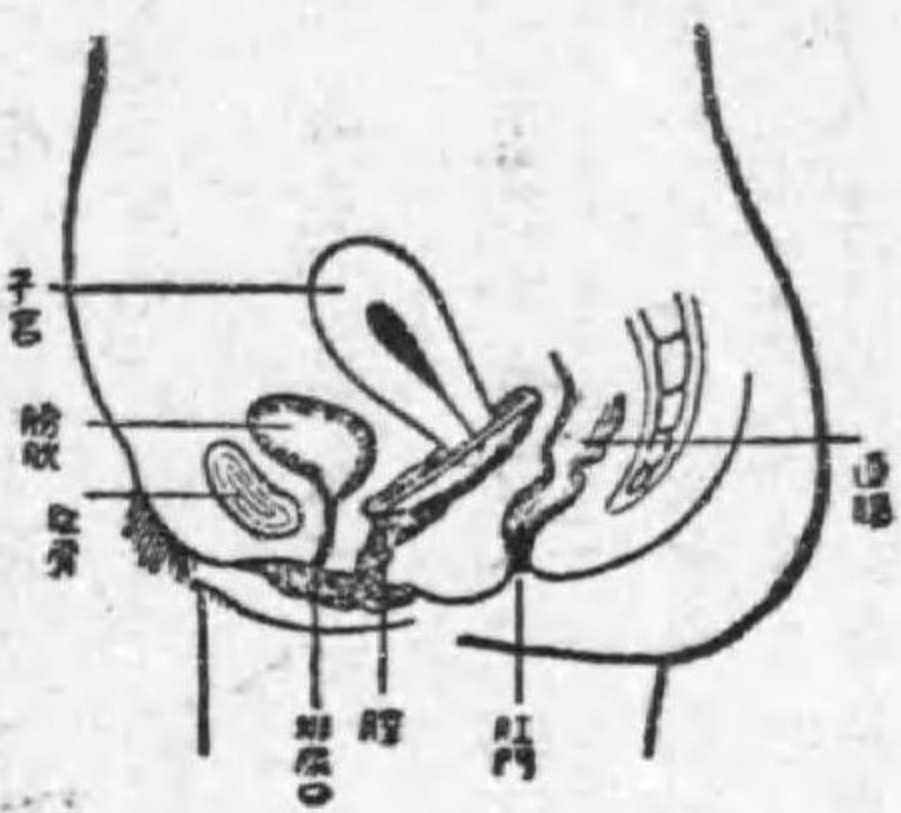
ある。
ペツサリーを如何に落附かせるか 押上げるにも、どの邊に押上げるか、判つてゐないと、何にもならない。押上げる場所は、恥骨の後側の凹に押込むのである。恥骨の後の方と云つても一寸解り難いだらうから自分で示指を腔口から一寸ばかりの處に入れて上側へ曲げてみると、硬い物に觸れる筈である。即ち這り口からすぐ上側に、これが恥骨で、その奥側は凹になつてゐる筈である。それは指でよく觸つてみれば判る。そこへペツサリーの口の方にある縁を押上げるのである。第一一七頁をよくみてやつてもらいたい。恥骨は、お腹の外側からも判る。即ち陰毛が生えてゐる硬い骨がそれである。この中側の奥弓状になつてゐる凹に挿入する譯になる。では何故、この部分へ落つかせたら具合がよいかと言ふと、第一直接、男性の龜頭がペツサリーに觸れる事が少ない。それに、龜頭に依つて動かされてもなか／＼外れないのである。それには小型では駄目である。出来るだけ大きな物を選ばなければならぬが、この大

小を選定するのは前に言つた通り相談所で診察した結果が一番よいのであるが、相談所に來られない方や、地方で相談所がない處では、以上の方法を守つて、やゝ大き過ぎると思はれる程の物を使用することである。

二、三年前に始めて、ダッチ・ペツサリーが賣り出された時分に、とても小さい物が使用されてゐた。筆者の知つてゐるのでは、四十ミリ半があつた。これ等は全然駄目である。商人はいつの場合でもさうであるが、人が使つて効果があらうがなからうが、もうかりさへすれば賣るのである。それに小型に名づけて未産婦用と言ふのであるから實に馬鹿々々しい限りである。

挿入が完全か否か必ず検べてみよ 以上のやうに、上手に這入つても、それで安全とは決して言へない。何故ならば、斯うして這入つたと思つたペツサリーは子宮腔部(子宮頭)にうまく被つてゐるかどうか、ハッキリ判らないからである。子宮頭に被さらなければ勿論、無効である。即ち精蟲はそのまゝ子宮へ這入つて、つひに妊娠し

て仕舞ふからである。であるから、それが充分うまく這入つてゐるかどうかは、よく検査する必要があるのである。その検査をするには、示指をもう一度腔内に入れてみるのである。そしてゴムの上から、奥の方の縁のあたりをよく觸つてみると、うまく被つてゐる場合は、ゴムの向ふ側、



正しく挿入された位置



最も多く誤られ易き位置



また誤られ易き位置

る場合は、ゴムの向ふ側、即ち、ゴムの下に子宮頭の硬い肉が觸れるのである。うまく、ゴム

の下に觸れたら大丈夫であるが、若しゴムの下でなく、直接指に觸れるやうな場合は完全でないのであるから、勿論駄目である。その場合よく調べてみると、ペッサリーの

の奥の縁が子宮頭を奥の方へ押やつてゐる場合があるし、又、子宮頭の横側を素通りしてゐる事もあるから、よく調べなければならぬ。(第一一二頁の圖を見よ。)

始めての人は、この調べ方が下手で、よく指を動かしてゐる時とんでもない處から、坊主頭の子宮がとび出すことがある。元來子宮はブラ／＼動いてゐるものであるから、ペッサリーのバネの様な強い物で押されると、兎に角、ペッサリーが被さらない事がよくあるから氣をつけねばならない充分被つてゐるならば絶対安心であるが、失敗するのは、何時もこんな場合である。

どうしても始めの間は、一度挿入しても、うまく這入らないものである。吃度二度三度は子宮に被さらないものだから、最後になつて面倒くさい、では駄目であるから、ペッサリーを使ふ前に二三度入れてみるのもよいだらう。筆者の知つてゐる人でも、面倒だと云つて失敗して居る人もある。又、挿入したんで痛いと言ふやうな人もある。入れ方が下手で痛いのである。その痛まないやうに入れる事が必要なのである。完全

に這入つてゐれば痛みも氣持悪い事も感じない筈である。それにはベツサリーのつまみ方から練習せねばならない。始めのうちは二三度入れ直しをやつてもなか／＼うまく這入らないが數回繰り返してゐるうちに上手に少しの失敗もなく挿入出来る様になるものである。コンドーム（サック）でもその通りである。始め二三回使つて、うまくないと言つてそのまゝにする事がある。

それに結局、二三回で止めてしまふのである。ベツサリーは男子のコンドームのやうに目にみえる處に入れるのでないから尙更、二三度では完全に入れられないのである。こゝで氣を落してはならない。數回練習するうちには、何でもなく使用出来る。我々が工場に出る時、一寸顔を洗つて行く、此の場合一寸、石鹼をつけて洗へば綺麗になるが、それを使はないと、洗つても顔に水をぬりつけたと何等變らないと同じである。決して一分間と時間はかゝらない。檢べる位何でもない筈である。充分に氣を付けてもらいたいのである。そこで入れ損ねたと思つたら、又、引き出して入れ直す

事である。段々なれて來ると、被さつてゐないと判れば一寸指先の加減でうまく被せるやうに出来るもので、それにうまく被さつてゐないと、前に言つたやうに、何だか氣持が悪かつたり、痛かつたりする。であるから、始めから、子宮頭のある處を覺えておいて、何なく挿入するやう、心掛けることである。これは少し研究して、又は、自分でよく考へてやればすぐ覺えるものだ。一度でよく判る人もある。プロレタリアは、如何なる場合にも全般的に目を見張つて居るのである。だから一寸の練習でも判る筈である。

◇何時間位挿入しておくか 以上でダッチ・ベツサリーの使用法を終るが、非常に長つたらしく書いた爲め、こんな難しい物なら使用するのが面倒だと思ふ人もあるだらう。だが、自分でやつてみると何でも無い實にた易いことである事が判る。次に挿入して性交が終つたら、ベツサリーは何時間もそのまゝ入れて置くものか？ 又どの時間位入れておいても大丈夫かと言ふ事は大切な事であり、最後の注意で今までの苦

心が何にもならない事があるので、挿入時間に就いて述べて見る。

一昨年死去した、獨逸の世界的な社會衛生學者として知られてゐる、グロチ・ヤーンと言ふ人は、このダツチについてもその衛生學上から、非常に研究心の深い人で、又、ベツサリーの推奨者でもある。で、その人の説を揚げてみる。グロチ・ヤーンは月經から次の月經まで挿入して置いても差支へないと言つてゐる。それでも不潔になるから、月に三回位取り出して洗滌するがよいとも言つて居る、やはり社會衛生學者で醫學博士の西謙一郎と言ふ人は、それと同じ説をとなへてゐた。若し出来たら、ベツサリーに辨をつけて、普通の時には辨を開いて必要に應じて閉めると言ふのである。然し、これは今の處、そんな精工なベツサリーが出来てゐないし不潔になり易いのであるから二十四時間以上はよろしくないと言はれてゐる。外國の書籍をみても、大抵、二十四時間以内、二十時間位が適當だと言はれてゐる。それ以前に取り出す事は危険である。何故ならば、數千萬の精蟲であるから、若し生きのこつて、妊娠する

事がないとも限らない。そんな危険を感じる場合は、前に言つた、脱脂綿に食酢を薄めて、それに浸して挿入する事も有効である、最も、たゞ挿入するだけではいけない。食酢をかるくしぼつた綿花でよく内部を拭いてから取り出すやうにするのである。これ位の注意力があれば決して妊娠することはない。

或る醫師は、洗滌する事を奨めてゐてゐるが、出来得れば、それも有効であるが、色々な事情でそれが出来得るか、どうか問題である。それに洗滌は、腔に有害な作用があると前に述べたし、産婦人科醫は皆反對してゐる以上、それは考へなければならぬ。兎に角、二十四時間も、そのまゝ挿入してゐても差支へない。

ベツサリーを挿入するのは、性交直前でもよいし、床に入る前から、用意して挿入しておいてもよいのである。若し、工場にでも働いてゐる人であればそのまゝにして翌日の夕方取り出して始末しなければならぬ。

あとしまつ 十五六時間から二十時間もすれば、取出しても大抵差支ない。それで

も危険と思へば前に言つた方法に依つて食酢で拭くことである。取出す場合は、非常に簡單である。即ち、示指を入れて、前に上に押上げた、恥骨の凹の處の縁に手をかけて靜かに引き出すのである。取り出したベツサリーは、すぐ水に入れる熱い湯等はゴム質をいためるから、水がよいやうである。と言つて、あまり冷たい水も、感心したものではない。何故なら、ゴムが硬くなつて、若し、そのまま水氣も拭かないで置くとゴムがボロ／＼になり易いからである。よく洗つたら、布でよく水氣を拭き取る事を忘れてはいけない。

時々ベツサリーは検査せよ。ベツサリーはゴムであるから、一年も二年も使つてゐるうちに破れたり壞れたりするものであるから、時々調べてみる必要がある。それには、先づ、縁のパネとゴムが密着してゐるかどうか？ ゴムに小さい破目がないかどうか？ 検べるには、縁の處をよく引張つて見て、切れなかつたら大丈夫である。次に水を一杯入れて水が少しも出なければ大丈夫である。元來、精蟲は、小さい物で百

倍以上五百倍位に大きくした顕微鏡でようやく見ることが出来る位であるから、それは非常に小さい穴からでも浸入すると言ふことを忘れてはならない、以上で、ダッチ・ベツサリーの使用法は終つた。

最後に私達は、凡ての避妊法についても、大衆自身が實踐に依つて、そして正しい使用法も、又その確實さも決定するもので、決して、理論や、試験管の中で解決出来るものでないと言ふことを知らなければならぬ。

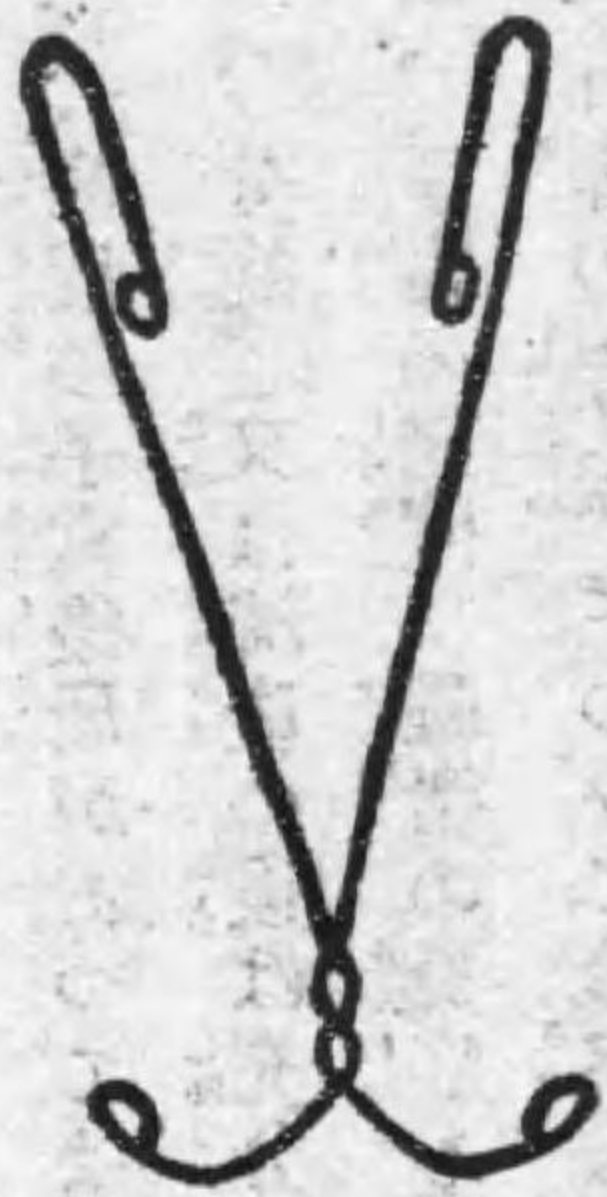
ダッチ・ベツサリーの使用も本書ばかりでなく、又、自分ばかりでなく、廣く、大衆の中に普及して、始めて正しいものであると言ふ事が確定するものである。

無産者産兒制限同盟は、創立して日尙ほ淺いので、同盟の技術部に於て得たダッチ・ベツサリーの報告は非常に貧弱で、サヴェエト・ロシアの大衆的な豊富な實驗から比べてみれば我々の活動が、もつと一強力に爲されねばならない事を知るのである。子宮挿入器具 今迄述べたのは大底素人が使用出来るものであつた。これから述べ

やうと考へてゐるのは全然素人には不向き、又、とうてい出来ない方法であらう。だがあまりよく使はれてゐるし、それについての知識もない人があるから述べることにする。それから、も一つ注意したいのは、これから述べる器具は發賣を禁止されてゐるから、現在は絶對使用出来ないし、そればかりでなく、禁止されてゐるためか、極秘に一部に使はれてゐると言ふことだ。若しそうであつたら尙ほ、よくこの知識を知らなければならぬ。次から次へ個人の傳聞き程恐ろしいものはない。科學的事實もそれは曲げて教へられる。その結果は勿論、危険この上ない次第だからである。大衆へ若し危険であるからと言ふ意味で禁止するならば、如何なる點が危険であるかを充分知らせることだ。秘密にすることは、一方に法網をくゞる不正商人の暴利にまかせ素人細工の危険を助成するばかりだからである。

避妊ピン 又は、金ピンが日本に使用されるやうになつたのは相當に古い。十年前から使はれてゐたのであるが、その當時のピンは禁止前の（昭和五年十二月、内務省

令）ピンと比較すればお話しにならない程、不恰好で危険なものであつた。で、最近まで使はれてゐたピンと言ふのは上圖のやうなもので、二本の金線、（大抵十八金か十四金）を「又形」に折曲げたもので、「Y字形」のものに、一方に皿がついてゐるのもあつた。長さは一寸五分位のものだ。その他に單にY形のものもあつた。普通避妊ピンと謂は



避妊ピン

れてゐるものは、この皿のないもので、又一番多く使はれてゐた。ピンの質、ピンは白金か黄金か、兎に角、人體に這入つて酸化しない物質で作らなければならぬ。そでなくとも子宮内部は月

月に月經と言ふやうな生理的變化の繰り返されてゐる處であり、新陳代謝も激しい器官であるから、それは出来るだけ不純物のないもので作るべきである。
▽挿入に當つて ピンは、子宮腔内に、挿入し置くものであり、然も細い物質である

から、生理的には色々な病的變化を起し易い。だから、子宮の状態に充分氣をつけなければいけない。その診察は勿論、技術的にすぐれた醫師の領分に屬するので素人では判らないが、兎角、子宮は常態のもので次のような條件が必要である。

- 一、子宮に輕微の炎症もあつてはならず、全く健全でなければならぬ。
- 一、高度の子宮後屈があつてはならぬ。
- 一、分娩、又は流産の後は充分子宮が恢復してゐなければならぬ。
- 一、子宮の周圍に輕微の炎症もあつてはならぬ。

これ等の症狀について診察して充分である場合は、専門醫との相談の結果、始めて挿入すべきである。

挿入中の注意。これは是非心掛けて置かぬと、とんでもない失敗を起すものである。少く共、目にみへない感覺にもよく、肉體の一部分に斯かる器具を挿入して置く場合には絶へず注意が必要である。即ち、挿入後、何等の痛みはないか。勿論挿入して一

週間位は相當の扁痛と、白帶下様の下り物があるのは普通であるが、それも人に依つて全然、何等の異状もない人がある、そんな人は尙更注意すべきである。然も、その後痛み、又出血するやうな場合は、即時抜き去らねばならぬ。突然、痛むやうならば尙更である。その他、しやがんだり、走つたりした場合に異物感がないか、特別、色のついたやうな下り物はないか、等注意して若しそんな事があつたら醫師と相談する必要がある。それから挿入後三ヶ月目位に一度抜き取つて一週間位子宮を休ませる必要がある。何故ならば、挿入して置けば、ながくなればなる程、子宮實質に喰ひ込んで、効果もなくなるが、子宮にも異状をきたすやうな結果になる。だから、出来ならば、三ヶ月目の月經の時に抜き取つて月經が濟み、數日間休めば子宮は恢復するのである。

▽挿入法 これは素人には必要ないし、禁止されてゐるので述べることは差ひかへるが、兎に角、子宮鏡に依つて腔を開き、子宮外口をよく調べて、子宮挿入用の器具を

用ひて挿入し、一部分は、腔部に現し、大半を子宮内部に放置するのである。

▽何故避妊に効果があるか 子宮内に異物が存在すれば受精した卵が着床しないと説く人がある。だが決して、そうだとばかりは限らない、だが着床した卵が異物のため邪魔され流出すると言ふ人がある。恐らくそれが適確であらう。元來、これは子宮頸管の永久閉塞の爲めに頸管を押擴げるために使用されたもので、その目的のため数ヶ月間挿入して置いて、それを取外してみた處、その結果妊娠した。そして又次に挿入して置いた處妊娠しないので、それが必要になるまで挿入して置いたことかから始つてゐる。(ランセット誌から)で兎に角、何はともあれ、斯かるピンを挿入して置けば妊娠することがない。ほとんどまれに妊娠することはあるが、非常に少い。

▽挿入すれば有害か 勿論、決して無害とは言へない。然し、それも充分に注意して使へばある程度まで危険はないが、子宮實質炎を始め若し少の病氣のある場合には重らせるおそれがある。率は少いが不妊症になる恐れもある。その他、理由のない出血

を起したりする場合がある。

皿のあるものは、前に、ピンの手前の方に皿のあるものがあると言つたが、これは挿入に困難であるばかりでなく、不必要であらう。製作者は、皿に依つて子宮に蓋をして精子の侵入を防がうと言ふ意味であるが、それはほとんど不可能な考へで一度精子の活動を顕微鏡で覗いたら大抵、無効であることが判るだらう。即ち、皿と子宮腔部の間を精蟲は這い込んでゆくのである。

ピンには色々種類があるが、その代表的なものは、小川ピン、馬島ピン、等であらう。そのいづれも禁止品で、又、こゝで述べる必要もあるまい。

子宮ポタン これも禁止品で、ピンの場合の皿があるものと思へば差支ない。たゞ異なるところは、素人でも挿入出来る點と、取はずしも自由であることだ。然し、決して効果あるものでもないし、その注意もピンの場合と同じであるから、くわしくは述べないことにする。形は、カラポタンのやうなもので子宮口に蓋をして精蟲の侵入を

防ぐと言ふ譯であるが、結果、何等効果はない。それに、時々取りはずしたら尙更効果はない。その種類には、これは、黄金は少い。エポナイト、セルロイド、動物骨、アルミニウム、等で兎に角、費用はやすいが効果なく、ピン程でもないが危険である。それが完全な消毒されない場合は尙更である。

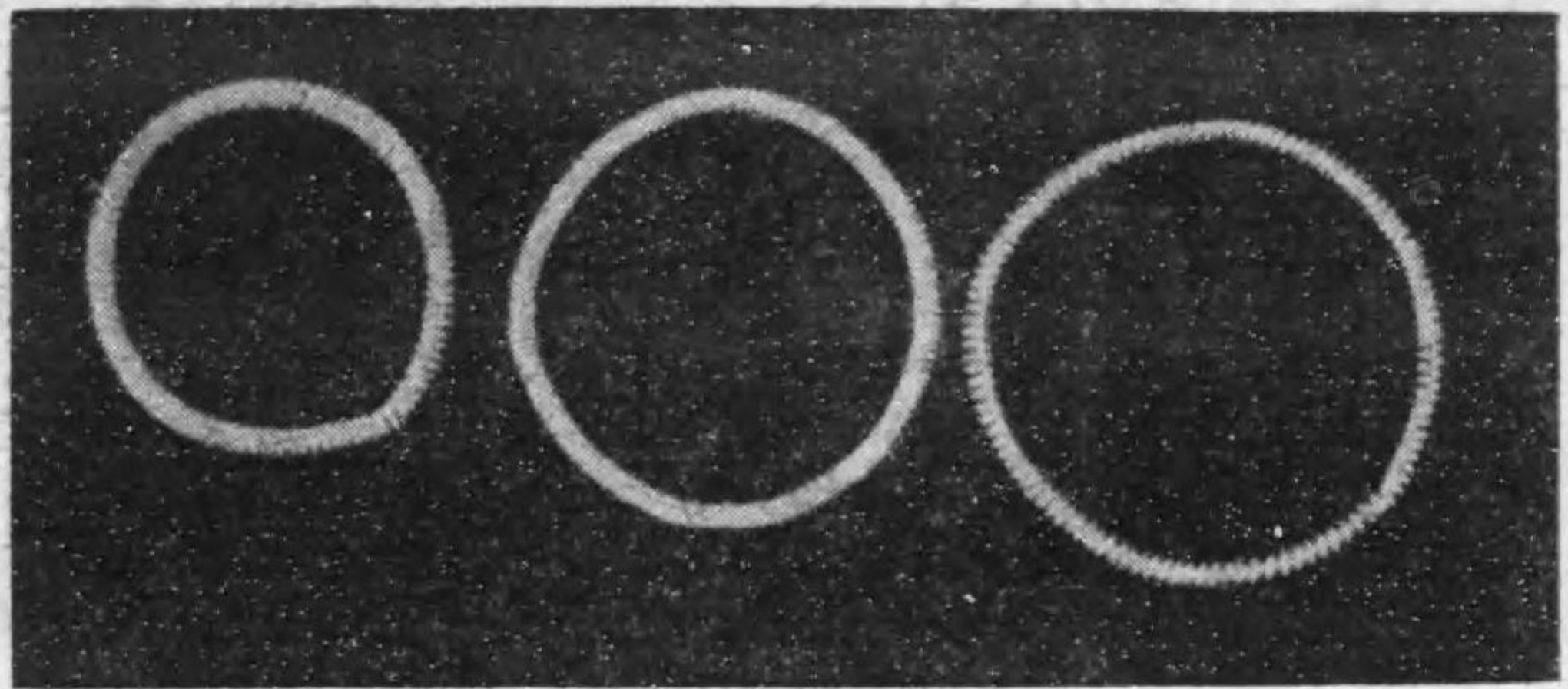
象牙輪、黄金球 子宮腔内に異物があれば妊娠しないらしいと言ふ事は前から醫學者間の間に問題になつてゐた。京都大學の教授が黄金球を子宮内に入れて置けば妊娠しないだらうと考へて作つて試験してみた。結果は非常によかつた。だが問題は黄金球と言つても中空であるが重くて月経時等の子宮筋肉がゆるんでゐる時は落すことがあるし、この挿入には子宮擴張器で開いてから挿入するので、なか／＼面倒であつた。勿論、挿入して半永久的に其まく放置するのであるが、その爲にそれが幾分でも酸化してはいけないので純金でなければならぬし、製作も面倒であつた。その後研究の結果、動物質の硬い物で作つてみようと言ふので、象牙の輪を作つて挿入してみ

た。これも重くて、挿入もやはり困難であつた。そうした關係から、やがて一般化されずに終つた。そのうち子宮内挿入の凡ての避妊具が禁止されたので報告を受けないが若し斯かるもので確實で、無害ならば一番よいと考へる。然し、それには次の事が考慮に入れなければならぬ。

「挿入に當つて、個人に適應したものであること、月経時等に流出しないか、と言ふことと弊害はないか、」等であるが、兎に角、その研究も、その後如何になつてゐるか判らないので他の機會に報告しやう。

グレーフェンベルグ氏銀環 前の象牙の場合と同じく、銀環を子宮腔内に放置して目的を達しようと言ふのである。これとて最近の研究であつて、その良し悪しは、その筋の専門家に委せて置かねばならぬ。

▽銀環とはどんなものか ラセン狀の輪であつて、個人の子宮に當てはまるものでなければならぬため、大きさ、パネの硬度は色々である。



ラグレーフェンベルグ銀環

▽挿入法 十分に消毒したものを、先で子宮の位置と、子宮腔の直徑等を検査した上で、挿入用の器具で静かに挿入するのである何せ、子宮内に挿入する器具は、凡て消毒が完全でなければならぬ。挿入された始めは、子宮異物としてその刺戟のため、かるい痛みがある。それは子宮が異物に對する押出す陣痛であるから適當な大きさでなければならぬし、小さいのでは効果がない。その適、否は此の場合一番むづかしい。だから、挿入の場合は、その事を検べなければ挿入しても押出されてしまうし、小さいのでは月經時に流れ出てしまう。

▽挿入後の注意 適當に檢べられた後、充分の注意の

下に挿入されるのでめるが、挿入後數日間は痛みと出血が伴ふ。又、尙ほ熱が出る場合さへある。それがすめば、何等感しないやうになる。だから挿入後數日間は熱を調べてみることだ。又、一年に一度は是非取出して、異状はないかを調べなければならぬ。その爲めには引張り出すための特別の器具が入るし、素人には困難でもある。又挿入一ヶ月目の月經の時は多少痛みを感ずることがあり、出血も多いことがある。そして挿入してからは二ヶ月に一回位の割に産婦人科の診察を必要とする。特別の異状がないとも限らないからだ。

▽どんな人に挿入出来るか この銀環はどんな人にも挿入出来る譯ではない。前に避妊ピンの項で述べたやうな適應も考へなければならぬ。即ち、完全に近い子宮の持主でなければ使用出来ぬ。若しも少しの病氣でもあればそれは益々重らせるばかりだ。それに淋病の場合などは、特に害が大きい。何を言つても専門醫に絶對委せるに限るでない、いつの間にか銀環は外にトビ出してゐることがあるからだ。

▽どれ程効果があるか 効果の點は非常に困難で、今の處、その統計もないので何とも言へぬが、ほとんど好結果を齎らしてゐるから大抵大丈夫と思ふ。然し、それも此後である。日本などでは、まだ使はれた例もきかないし、外國の例ばかりでは結局、うけ賣りに過ぎないからだ。

子宮内挿入避妊の此後 避妊ピンにせよ子宮ボタンにせよ、象牙、環、その他子宮内に放置する器具は、兎に角、素人には使へないし、専門家、醫師の指導に依る外なく、その研究も、素人は材料を提供する以外何とも出来ぬ。だが若し、此方法が好結果であつた場合は、他の如何なる避妊法より最も手数の掛らぬ方法で他の方法は殆ど無用になるであらう。然し、日本に於ては、斯かる子宮内挿入の器具は禁止されてゐる。これは前にも言つた通り、避妊法の完全を期すためには障礙となるのであつて、それ等の取締令を廢止さすべきであり、その爲めに闘ふ事は我々の義務でもある。

四、生物學的避妊法

生物學的避妊方法と言ふのは、今迄の局部的な、物理的、化學的な方法でなく身體の、新陳代謝や、生物の特別作用を利用して行ふ方法であつて、食物に依つて避妊しようとか、ホルモン等を利用して避妊しようとするのであり、いづれにしても最近の説であつて、人間に實驗した例は非常に少いし、その結果も絶對的でない。だが、この方法は今後の研究と共に、非常な進歩をなすであらうし、期待してゐても決して不可能と言ふことはない。で最初に食物に依る方法から述べよう。

ビタミンに依る避妊 ヴイタミンと言ふ言葉は決して新らしい言葉ではない。今は盛に使はれてゐる。脚氣はビタミンBの缺乏だと言ふことは、皆ほとんど知れ亘つた事實である。我々の身體には、蛋白質だとか脂肪だとかの營養以外にビタミンと言ふ營養があると云はれてゐる。蛋白質は細胞の新陳代謝を補ふ爲めに是非必要な

もので脂肪は身體の熱を保つ上に、これも絶対必要である。斯うして我々の身體には凡ゆる營養が必要なることは言ふまでもない。で食物は、それ等の營養を攝るために必要であるが、今から數十年前に、蛋白質、脂肪、含水炭素、水、鹽類等の五大營養物は生命を續けるもので絶対必要であるかと言ふことが問題となつた。そしてその研究に取かゝつたのであるが五大營養物の外に何か外にまだ營養物があることを發見した。一九一一年、英國のフランク博士が五大營養物の外に特別の物質を發見したので、それが生命に必要であると言ふ處から、ビタミン即ち生命と言ふ意味アミン即ち、營養の化學語をとつてビタミンと名づけた。その後A、B、C、Dと次から次に發見された、その一つでも缺乏すれば色々の病氣になるのである、前に言つたBは脚氣になるし、Aは病菌に對する抵抗力がなくなるし、Cは壞血病になる等々である。で、その後、一九二四年、ミュラー女史がビタミンEと言ふのを發見した。ビタミンEと言ふ物質は、他のビタミンと異つて生命や、發育には關係ないが生殖作用には絶

對必要のものであつて、長期間それが缺乏すれば動物の卵巢や睾丸は萎縮して全然不妊症になる。短期間では、比較的少く缺乏した場合には妊娠はするのであるが、たゞ胎兒の發育が不良で、胎内で死亡する場合がある。又、肝臟、心臓及び血管の發育不良となり、且つ、赤血球生成が不充分である。又、一方には、胎盤に變化を起す結果となる、で、變化の甚だしくない前にビタミンEを與へれば再び正常にかへることが判つた。即ち繁殖を全うする事實が判つたのである。

それではどんな食物を攝ればよいかと言へば、野菜類に最も多く含まれて、特に綠葉の中に存在してゐる。最も多く含まれてゐるのは小麥胚子である。肉類には比較的少い。貧乏人の子澤山と言ふ言葉がある。貧乏人は肉類はなか／＼食へないから菜食するからビタミンEが含まれてゐるから子供を多く産む、なんて言ふのは、とんでもないことで、べら棒な話であるが、今やビタミンEの盛んな時、避妊法も生殖に關係あるビタミンEが發見されたのだから、何等か方法はないかと考へるのも當然で

ある。

だが、これも実際になると我々の考へる程簡単でない。ビタミンEの研究は大抵動物実験の結果であつて、人間には実験されてない。そして、理論的に言つても、それは不可能であらう。と言ふ悲観論に到達する。何故ならば、それが人間に適應させたらば、睾丸、卵巢の萎縮の結果を考へても判ることだ。それでなくとも、我々の食物が如何に料理法が上手でもビタミンEの絶対ないものと言ふのは、ほとんどないからだ。

これは此後の研究以外にない。と同時に食物と妊娠の關係、その他の研究は、必要なく可からざるものであると言はなければならぬ。

ホルモンに依る避妊。前の食物の場合と異つて、これならば不可能なことはない。ホルモンと言ふのは前に述べた内分泌物のことであるが、今日、動物実験だけが成功してゐて、實際的に人間の統計は非常に少い。

前にも何度も言つた通り、卵巢のグラーフ氏胞が破裂して卵子からとび出して、所謂、排卵作用が行はればグラーフ氏胞は黄体と言ふものに變化して、それは一種の内分泌をすると言つた。そのホルモンは次に發育すべき卵の發育を抑制するので、前と言つたやうに、若し受精すれば、それは分娩までは發育しないのである。で、その黄体がある間は決して次の卵が成熟しないから、それを應用して、卵巢黄體をエキスとして動物に注射すれば或一定期間妊娠しないのである。ヘルマン・スタイン及びブラクと言ふ人はそれを色々の動物に實驗してみても、その結果は非常に良好であつた。でそれを注射すれば、たとへ精蟲が進入して來ても卵子の發育が止まるから受胎作用もない譯である。その後、フェルネルと言ふ人が、グラーフ氏胞黄体ホルモンばかりが斯うした作用があるばかりでなく、胎盤にもあると言ふことを發見した。で胎盤エキスを作つて、やはり動物に注射した處、一時的に妊娠しなくなつた。

以上のやうな實驗と同様に、ハンペルラートと言ふ人は、妊娠した家兎、又はモル

モットの卵巢（その中には黄体がある）を他の家兎に移植手術をした。その結果は勿論、その家兎はグラーフ氏胞が成熟しないし、妊娠もしないと言ふことを証明した。次で同氏は移植でなく、卵巢のエキスをとつて他の家兎に注射してやつぱり同様の結果を得たのである。そうして得た家兎の避妊期間は一ヶ月半乃至二ヶ月であつた。ハ―ベルラントの以上の理論に反対する人もあつたが、リユーブザーメンと言ふ人は、その反対者に反対して、ハ―ベルラントの説に賛成して、自分から進んで人間に實驗しようと考えた。そして、彼は、次から次に妊娠する二人の婦人にこの實驗をしてみて、可成の長いあいだ不妊であることを實驗した。そして、この説も確定するやうになつた。然し、これを人間に應用するまではなか／＼である。それは効果が決定的でない點と、不妊の有効期間が判らない點と、動物實驗にも現れたやうに、このために性慾が缺乏する結果になりはしないかと言ふやうな點である。

精液免疫法に依る避妊

これは生物學的と言ふより別になると考へるが、ついでに

述べて置きたい。ヂットレルと言ふ人は、男性の精液を女性の身體に注射すれば、注射を受けた身體に、その精蟲毒に對する免疫物質が出來はしないだらうかと言ふことを考へて動物に實驗した。その結果は動物に精液を注射すれば或期間だけ、交尾しても妊娠しないと云ふことを證明した。そして、この説は各方面から認められた。殊にマツクカートナーと言ふ人は大黒鼠に應用してみた。大黒鼠は交尾さへすれば必ず妊娠するもので、これに依る實驗は、二十二週間も妊娠しないと云ふことが判つた。そして、マツクカートナーは、それを次のやうに説明してゐる。

「精蟲を不活動にすると言ふのは、注射に依つて出來た精蟲毒素が雌の血液内に生じて、其の毒素は、子宮分泌液及び腔分泌液に移行して、進入して來た精蟲が此等の分泌物に一度接觸すると、今まで離ればなれに自由に活動してゐる精蟲が、集塊となつて活動力を失ふてしまふからである」と言つてゐる。

この實驗をナイヂツチと言ふ人は三十八の婦人に試してみた。内四人は避妊注射が未だ終らぬうちに妊娠したので成績は何とも言へないが、他の二人は効果がなく妊娠した。残りの二十四名は二ヶ月半乃至一ヶ年以上の期間、不妊の目的を達したのである。

この注射は、數回やると副作用が現れて來る。悪感、發熱、惡心、嘔吐などである。若しこの方法が確實ならば、その方法が簡單でグラーフ氏胞の場合のやうな性慾缺乏症などにならずに理想に近い方法だが、その免疫作用は非常に期間が短いし、それを續けるには何度も注射をせねばならないし、續ければ、前に言つたやうな不快な結果になるので、これは奨める譯にゆかない。

その他に、クダルコウスキと言ふ人は、次のやうな方法を發表した。前に言つた、胎兒や胎盤の様な卵成分を犬に注射して、犬の血精を家兎に注射すれば妊娠しないと云ふ事實である。この實驗の結果は、交尾しても妊娠はしなかつた。即ち避妊の目的

は達せられた。だが、その持續期間が非常に短いので人間に應用することは出来ない。さて、いよく生物學的避妊の結論に來たやうである。問題は人間であるが人間に利用出来ない方法であればどうにもならぬ。だが決して悲觀してはならぬ。サヴェト・ロシアに於ては、この方法は可能性があるとして生物學者に研究されてゐると言ふことだ。近いうちに何等かの報告のあることであらう。

五、手術に依る永久的避妊法

この項では絶對な避妊法とでも言ふ可き方法であつて、手術に依つて妊娠に必要な器官の一部分を切斷とか結紮とか焼き切るとかする方法で、勿論、技術の秀れた醫師以外には出来ない。

男性側に行ふ方法 男性側が行ふ方法としては、積極的な方法は睪丸を全然取つて仕舞ふのである。他の一つは、精蟲が睪丸から送られて精囊と言ふ處へ進んで來

途中の、所謂輸精管を切斷して仕舞か結んで仕舞ふ方法である。

女性側に行ふ方法

女性側も男性側と同じく、卵巢を取つて仕舞ふか、卵が通る道

即ち、輸卵管を切斷するか結んで仕舞ふかする方法、又は子宮を全然取つて仕舞ふ方法である。

だが、睪丸や卵巢を取るとは病氣の場合以外には決して行はないし又行つてもならないから、それ等には餘り觸れないとして輸精管又は輸卵管の手術的切斷又は結紮について述べることにする。

輸精管結紮法

睪丸の附け根の部分を一吋切開して輸精管を出して絹糸を以て結びつけて仕舞のだ。そうすれば精蟲は外へ出ることがないから受精しないことなる。

手術方法

先ず簡単な手術で、最初にアルコールで消毒して、局部麻酔をやつて、上部の皮を四五分切る、そして輸精管を引き出して中一分位間をおいて兩側を絹糸で結ぶのである。そして、その中央を切り取ればよい。これは結紮でなく切斷であるが

兩側を結ばずに一ヶ處を固くしばつて仕舞ふのである。そして皮膚を元のやうにぬひ

合せておけばよい譯で非常に簡單である。その間に要する時間は三十分位で、それが恢復するのは一週間位である。勿論多少の痛みはあるが、數日すれば治つて仕舞ふ。

その結果

手術の結果身體に影響はないかと言ふことであるが、始めの二三ヶ月は

性慾が益して來ることである。その他に影響はない。この性慾が盛んになる爲め、老人が手術を受ける人がある。勿論ブルジョアであるが、即ち若返り法と言ふ譯だ。この方法は元來スタイナツハが考へたもので、一名スタイナツハの若返り法とも呼んでゐる。

スタイナツハはキーン大學の教授で間細胞の研究をやつた人である。たま／＼ブーアン、アンセルと言ふ二人の學生が睪丸から來る輸精管を結んで精蟲が出ないやうにしておいた處數ヶ月の後睪丸の間細胞が非常に多くなつたと報告を得たので、間細胞が發達したならば性的性質が一層著しくなり、それに伴つて動物が若返るだらうと

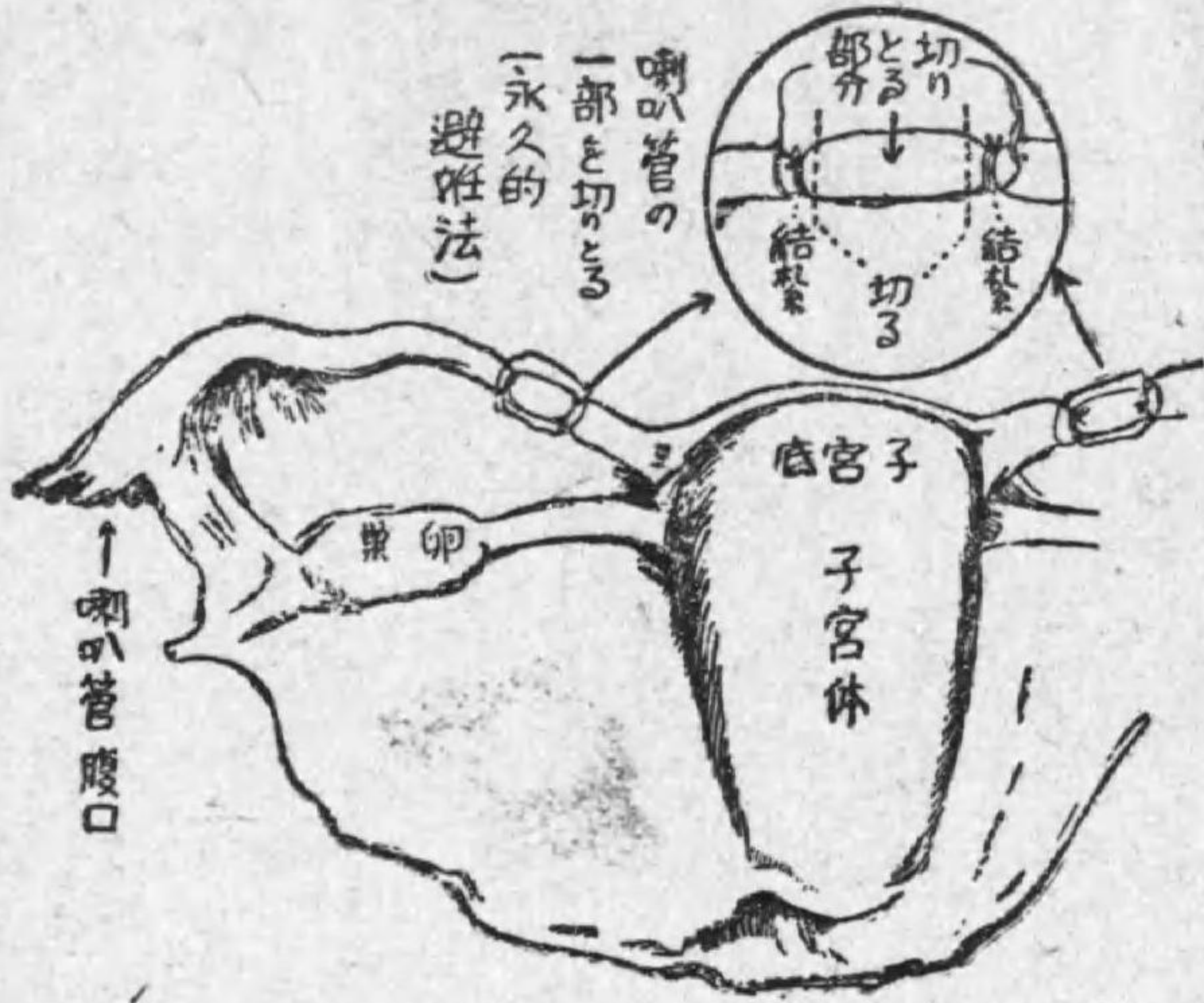
考へ、それを鼠に實驗してみた。實驗の結果は傷がなほ十日程もしたら今まで老年だつた鼠の毛に艶が出て、感じも鋭くなり、盛に牝を追かけるやうになつた。彼は、この實驗を牝に行つてみた。即ち、牝では若い牝の卵巢を老年の牝に移植してみた。すると老年の牝は若かへり普通の牝より八ヶ月も長生きした。その後、斯うした實驗を人間に行つてみた。勿論若返つたので、この手術を受ける人が非常に多くなつた。この手術は前にも述べたやうに輸精管の切斷か、結紮かであるが、では何故切斷と結紮とあるかと言へば、結紮は又必要な時解いて子供を生むため切斷は絶對生めないのだ。と説明するが事實は、結紮は自然と結紮した部分に孔が開いて効果が無い時がある。それを防ぐのに切斷と言ふ方法がある譯で、切斷ならばほとんど大丈夫である。然し二度と子供の必要な時産めない缺陷がある。又、或人は、結紮にしても、その部分が融着してしまふので、必要な時解いても何等効果はないと説いてゐる。

睪丸剔出について 睪丸は前にも言つた通り男の男らしい原因も、それがあつたため

であると言つた。勿論精子もこの部分で作られてゐるが、この睪丸を剔出すればその結果はどうなるであらうか。これを青春期以前に行へば、聲も、體格も、その他、同じやうな子供の時のまゝ發達する。昔、支那の國王に仕へる宦官は皆睪丸を切り取られた者ばかりであつたと謂はれ、又、ヨーロッパの國王は讚美歌を唄はせるために少年時代から去勢、即ち、睪丸剔出を行つて、その聲が優美なことを續けさせようとした。彼等は、その國王の地位を守るために、凡ゆる非人道を行ひ、それを合理化して、當然のやうな顔をしたのである。さて、大人になつてから睪丸を取つたらどうであるか。これは少年時代に取つたのとは少し異つてゐる、即ち幾分の性交慾はある。然し全體的に無氣力になり鬚は少くなり、勿論、性交の結果妊娠するやうなことは絶對にない。それに全身の脂肪が多くなり、非常に肥へて来る。兎に角、氣力のない味氣のない生活が始まるのである。

卵巢を剔出すればどうなるかと言ふに勿論、だいたい男性の睪丸を剔出したと同じ

結果になると思へば差支ない。



斯うした手術は専門的になるし、さ程、
 避妊には必要ないから、これ位にしたい。
 次に女性側の輸卵管結紮について述べてみ
 よう。

輸卵管結紮に依る避妊 輸卵管はラツバ

管とかファロピアン管とも言はれてゐる。
 でその手術は、開腹の上、輸卵管をしぼつ
 て仕舞ふことは男性の場合と同じである。
 この方法を始めて実験したのは一八百八十
 年で、ルングレンと言ふ人であつた。だが
 単に結紮してもその効果が少いので、その

後あまり問題とならなかつた。結紮は人間にも動物にも試みられてゐるのであるが、
 完全に閉がつてゐないと言ふことをフレンケルと言ふ人は發表した。即ちたゞ絹糸が
 喰ひ込んでゐるだけで少しの變化がある位なもので受精は可能だと言ふのである。そ
 の後ポイトネルと言ふ人が二ヶ所をくゞつけて中間を切斷した、それでやゝ良好の結
 果を得たのであつた。ポイトネルは開腹に依つて行つたがケールと言ふ人は腔式開
 腹術と言ふ方法で簡単な方法で行ふことを奨めた。その後色々な人に依つて改められ
 た。コドレルと言ふ人は輸卵管を二ヶ所壓挫して結紮する方法をとつた。一九一〇年
 その結果の報告は非常に好結果を告げた。それからマドレルは八十九人にその手術を
 行つて八十六名から、その結果を得たが皆その目的を達してゐることが判つた。その
 他に色々な方法があるが、凡て輸卵管に處置する方法であるから、これをラツバ管避
 妊法と呼ばれてゐる。然し一度手術を受ければ大抵、一生妊娠しないものであるから
 男性側も同じく永久的避妊法とも言はれてゐる。そして結果は皆非常によいと。身體

に特別弊害があると言ふやうな報告もない、兎に角輸卵管や輸精管は妊娠、受胎にのみ必要で生活機能には左程影響はない臓器であるからそれを如何に處置しても生命には拘らない。

子宮剔出 これも専門的になるし、避妊法としては決して奨むべき方法でもないから述べない事にするが、子宮が妊娠に必要なことは言ふまでもない。これを剔出すれば勿論妊娠しない。子宮剔出は卵巢は剔出しなから去勢の場合のやうな不決な事はない譯である。

六、X光線の理學的避妊法

XI 光線器具製作所に働く者が不妊症となると言ふことはよく言はれることである。それから考へついてX線で避妊が出来ると言ふことを稱へ始めた醫師達がこの研究を始めた。然しX線はまだ研究中のもので實際的利用の結果は色々の困難な問題にぶつ

かつた。で、今日尙ほ研究中のものであるが、それも、男性側に行ふ方法と女性側に行ふ方法がある。そして、或一定期間の避妊と永久的な避妊がある。若しこの方法が完全ならば非常に都合よい方法だがそれには色々弊害、困難が伴ふことは前に言つた通りであり、その研究も此後であると言へよう。

睾丸及び卵巢にX光線をかけたら、どんな結果が現れるかと言へば、時間を長くかければ永久的に、睾丸ならば精原細胞が破壊されて仕舞ふ。卵巢ならばグラフ氏胞の發育が止つて仕舞ふ。で、ある程度のX光線ならば、やがて又恢復して來て、精子も出来るし、卵子も出来る。だが男性側は、精原細胞ばかりでなく、間細胞もおかされる場合がある。何故なら、精原細胞は相當X光線に對しては強いので、先づ男性側は今の處感心出来ない。女性側のグラフ氏胞は割合に簡單で間細胞は強いから、此の方は相當に望がある。

で、女性の卵巢にX光線をあてればどうなるかと言へば強いものならば去勢と同じ

やうな結果になる。即ち間細胞が焼かれるために卵巣剥出と、あまりかわらない結果になるのだ。

脱落症状と言つて時々逆上したり、頭痛がしたりする。あまり弱いX光線だと効果はない。だから、この適當の量と言ふ點が難かしい次第である。それにX光線で避妊して次に生れる子供に影響があつたと言ふ報告であるイデキソン博士は、妊娠中X光線にかけた五十人の婦人を檢べた處、その三分の一までが、いろ／＼と悪い影響を與へてゐる。そのうちの六分の一即ち五十人のうち七名までが白痴であつたと言ふのである。若しそれが事實とすれば、充分研究の結果でなければ行つてならぬ。

以上で避妊法の大體について述べた。勿論充分とはいへぬが、これ等の技術は此後の研究と實踐にまつ他はない。

十、結 論

墮胎と避妊を混同してゐる人がある。成程産兒制限と言へば從來は墮胎も避妊も同様なものだと考へられてゐたし、特にブルチョア醫師などは特に強調してゐる。元來避妊と言ふのは大衆が生活の窮乏から、考へ出したものだ。ブルチョアは、高い金を出して人工流産も出来たし、秘密に「おかかへ醫師」に頼んで手術を受けられた。だが無産階級は、そんな高價な金は勿論出せそうにもない。だから、素人細工で墮胎など行つた。然し、それは實に危険極るもので、大出血や、病菌侵入等で一命に拘るやうな結果をまねき、必然に避妊法が考へ出されたのだ。だから醫師は、色んなケチをつけて避妊に反對した。即ち人工流産手術で儲けられないからだ。筆者は「大衆産兒制限」紙上で、そのことについて次のやうなことを——墮胎はこんなに危険だ——と言ふ題で書いたことがある。

——近頃、産兒制限は「墮胎」のことだと考へてゐる人があります。然し、産兒制限と言ふ意味は決して「墮胎」のことではなく避妊のことです。避妊と言ふのは、お腹の中に子供が出来ない前に、即ち、妊娠する前に、それを豫防する方法のことで、墮胎と言ふのは、お腹の中に子供が出来てから、それを薬とか、器具とかを使つて、生れない前に下すことを言ひます。それでは墮胎は何故いけないかと言ひますと身體に害になるからです。即ち生命に危険であるのです。ドイツのエツガー博士は、墮胎は、どうして危険であるかと言ふことを次のやうに述べてゐます。「墮胎が危険だと言ふことは、第一に出血が非常に多いことである。そして墮胎しても、時に、全部出ないで残つてゐることがある。それが腐つて、破傷風とか子宮鑽通とか言ふ生命に拘るやうなことがある、でなくとも、貧血を起し色々の病氣を起し、子宮の位置が變り、子宮内膜や、ヒステリー等は、大抵の場合よく起るものだ」と言つてゐます。若し金持の婦人ならば、いつも食物がよいから割合になほりやすいし、入院も出来

て手當も充分に出来るが、我々にはそんな金もないから、結局生命に拘ると言ふ有様です。

それに、日本の政府は、墮胎は危険だと言つて婦人が墮胎することを禁じてゐます。ところが、最近のインフレ景氣とかで物價は上がるが、労働賃金は少しも上らないし、食はない譯にはゆかないので、一人でも多く子供を生まうものなら一家中、飢死する外にない有様だから、何とかして子供を生まないやうにしたいのは人情です。と言つて、避妊法は、一寸手輕に教へてくれる處はないし、教へてくれても、責任をもつて教へないから失敗して妊娠して仕舞ふと言ふ具合だから、結局、新聞などの「月やく」廣告に釣られ、五圓も十圓も出して買つてみると、少しもきゝめがない、で、醫者の處に相談に行けば、五十圓か百圓も持つてくれば下してやると言ふんで、そんな金はないし、しかたないから、昔からよく言はれてゐる人蔘や、ホ、ヅキの根などで墮胎をして、大出血を起し、死んで仕舞ふと言ふのが最後です。これでは、どうし

ても正しい、害のない、そしてよくきく避妊法を教はるより他に方法は無い。ところが政府は、よくきく避妊法は禁止してゐるし、墮胎は前に言つたやうに禁じてゐる。若し墮胎が禁止されてなかつたら醫者は普通の手術のやうに二圓か三圓で出来るし、ゴボーや、人蔘や、ホ、ヅキの根を使はないでも、それ程危険がなく手術を受けることが出来るから、幾分助るし、そして避妊を禁止してゐるんで皆避妊とはどんなものか判らないし、墮胎が危険だと言ふことが判れば、科學的な避妊法を行ふやうになりますから、墮胎は撲滅出来るのです。

労働者と農民の國、ソヴェート・ロシアでは、革命前まで、日本と同じやうに墮胎を禁止してゐたし、避妊も禁止してゐたから、田舎などでは、よく人蔘や、ポタン掛針でしろうとが墮胎を秘密でやつてゐた。そのため死ぬる人が非常に多かつたので、革命と同時に、ソヴェート政府は、墮胎法を撤廢して、避妊方法の研究をやり、若し墮胎をやる場合には、その専門醫師が三人もついで、國立病院に入院させて、然も無

料で手術を受けるやうにしたのです。そして墮胎は苦しい手術であり、入院までしなければならぬことが判つて、皆、墮胎を撲滅せよ！ 科學的な避妊法を行へど、婦人達が力を合せて闘てゐます。

以上のやうに墮胎の撲滅は、科學的な避妊法の普及による外はない。然し、前にも言つたやうに、政府は、避妊器具取締令に依つて或種の器具を禁止してゐる。これはますます科學的避妊法普及に障礙になつてゐる。それに人口政策上公衆の前に避妊法の實際について語ることも禁止されてゐるために、素人墮胎を助勢し、避妊の宣傳に大障礙となつてゐる。だから、効果百パーセントの避妊法は絶無だと言つた觀念を植へつける結果になる。

ソヴェート・ロシアでは、墮胎を公認し同時に科學的避妊の宣傳を奨励してゐる。だから、今や、その研究は一般化されて、百パーセントの避妊法が行はれてゐるのだ。次に掲げるのは、「大衆産兒制限」第三號に書かれてあつた、『ソヴェート・ロシア

では百パーセントの避妊法がある」と言ふプロBC書記局の署名のものである。以下の一文を結論として本書を終る。

——二三年前まで、避妊ビンと言ふものがあつた。三圓か五圓で買へたし、それは一ケ買つておけば二年も三年も使へたのと、割合に失敗が少かつたので喜ばれてゐたが、二三年前に内務省令と言ふ法律で禁止されてしまつた。勿論、少しは害もあつたが、ブルチョア醫師共の言ふ程危険なこともなかつた。で良心のある醫師達は、この避妊ビンの危険なのは何故だと言ふので、その研究に取かゝつた人もあつた。外國ではグレンフェンベルグ博士が、(器具に依る避妊法の項参照)この危険なのを取のぞくために研究して、今では非常に進歩した器具を作りだした。日本でもやはり、良心のある醫師が、これについて研究してゐる人もあるが、最近では、非常によいものが出て來たと言ふことだ。そして、これは理想に近い位に効果があるそうだ。ところが、これは、避妊ビンと同様に取扱はれて、發表することは出来ない有様だ。

又、ソヴェート・ロシアでは、避妊とはどんなことをやるのか解らないで、墮胎をやることが避妊だと思つてゐるやうな人がまだ居るので、墮胎と言ふのは、生命にも拘るやうな危険があるので、墮胎は決してやつてはいけなと言ふことを教へてゐるが、それでもその危険なことを行はふとしてゐる人がある爲に、ソヴェート政府の健康委員の人達は、避妊法を教へて、墮胎を未前に防がうと言ふので正しい科學的な避妊法を、ピラヤ、パンフレットで宣傳して教へてゐる。日本で禁止されてゐる、グレンフェンベルグ避妊法と言ふのもやはり、ソヴェートでは使はれてゐるし、その他に日本で禁止されてゐる「子宮粘膜腐蝕法」と言つて、毎月月経前に醫師が子宮内に薬液を注入して避妊させる方法を行つてゐる。

この方法なら百パーセントの効果が有り、醫師の手に依つてやつてもらへば、決して害もない。

ところが日本の醫師は皆、これは危険だと言つて反對してゐる。何故だらうか？

この方法は費用は實費で十錢もいらぬ位だ、だからこれを醫師がやれば墮胎でもう
 けられないからだ。日本の醫者は墮胎を公認することを反對してゐる。若し公認した
 ら、「子宮腐蝕法」のやうに、實費で、やらなければならぬし、儲けることが出來ぬ
 からだ。

然し、諸君、避妊をやつて子供を生むことを制限しなければならぬ者は無産者だ
 けだ。子供を生めば一家中困る、だから危険な命も落すやうな墮胎までやる結果にな
 る。だから、避妊法の禁止に反對しなければならぬし、墮胎が危険だ危険だとばか
 り言つてゐないで、墮胎はこんなものだと教へるために墮胎法の撤廢を、工場から、
 農村から、政府に要求しなければならぬ。

凡ての避妊禁止令の撤廢！
 墮胎法の凡てを撤廢せよ！

一生打

昭和八年二月十四日 印刷
 昭和八年二月十日 發行

【定價金七拾錢】

アリタレロプ 法限制兒産

著者 大 川 浩
無産者産兒制限同盟代表者
 發行者 須 合 慶 治
東京市本郷區駒込動坂町二六四
 印刷所 耕 進 社 印刷部
東京市本郷區駒込動坂町二六四

發行所

東京市本郷區駒込動坂町二六四
 振替口座東京五九六六八番

耕 進 社

終

